

ドイツ陸軍とSS特別行動隊

－1941年東部戦線における政軍関係－

吉本 隆昭

目 次

挿入図一覧	iv
略語表	v
はじめに	1
I 序 論	3
1 本論文の問題の所在と意義	3
2 先行研究	9
3 史料	14
4 本論文の構成	16
II 本 論	19
第1章 ヒトラー・ナチスの東方政策とその思想的背景	19
第1節 ドイツの東方進出	19
第2節 オーバー・オスト	22
第3節 東方総合計画	25
第2章 対ソ連侵攻とドイツ陸軍	29
第1節 バルバロッサ作戦の立案と作戦準備	29
第2節 東部作戦軍の編成と作戦	36
第3節 東部作戦軍部隊の指揮官達	40
第3章 ソ連占領地	55
第1節 占領政策	55
第2節 軍政組織	58
第3節 パルチザン戦	63
第4章 国家保安本部とSS特別行動隊	65
第1節 国家保安本部の設立	65
第2節 SS特別行動隊の創設と対ソ連侵攻準備	68
第3節 SS特別行動隊のソ連における作戦	80
第5章 ドイツ陸軍とSS特別行動隊の公式の関係	91
第1節 陸軍総司令部と保安警察	91
第2節 ヴァグナー・ハイドリヒ協定	92
第3節 更なる協定の締結	98
第6章 東部作戦軍とSS特別行動隊の実際の関係	103
第1節 軍集団及び軍集団後方地域	103
第2節 軍及び軍後方地域	111
第3節 軍団作戦地域（戦闘地域）	121
III 結 論	127

註	135
史料	153
参考文献	156

挿入図一覧

- 第1図：バルバロッサ作戦前進計画 34
(MGFA, *Der Angriff*, S. 245. を参考に著者作成)
- 第2図：クリミア半島の攻略 50
(MGFA, *Der Angriff*, Beiheft Nr.14. を参考に著者作成)
- 第3図：ソ連占領地区分 56
(MGFA, *Der Angriff*, Beiheft Nr. 27. を参考に著者作成)
- 第4図：ドイツ陸軍作戦地域区分 62
(*Handbook on German Military Forces*, S. 44. を参考に著者作成)
- 第5図：SS特別行動隊の作戦 83
(*Encyclopedia of the Holocaust*, S. 437. を参考に著者作成)
- 第6図：SS特別行動隊の1941年11月の態勢 90
(Hilberg, *Der Vernichtung der europäischen Juden*, S.314.
を参考に著者作成)
- 第7図：ドイツ陸軍とSS特別行動隊の公式の関係 . . . 102
(著者作成)

略語表

A: Armee	軍
AO: Abwehroffizier	情報部防諜担当将校
AK: Armeekorps	軍団
AOK: Armeeoberkommando	軍司令部
BA: Bundesarchiv	連邦公文書館
BA-MA: Bundesarchiv-Militärarchiv	連邦軍事公文書館
EK: Einsatzkommando	特別行動中隊
EM: Ereignismeldung UdSSR	S S 特別行動隊行動報告
Gestapo: Geheime Staatspolizei	秘密国家警察
GFP: Geheime Feldpolizei	秘密野戦警察
H.Gr. : Heeresgruppe	軍集団
HSSPF: Höherer SS-und Plizeiführer	高級 S S - 警察指揮官
Kripo: Kriminalpolizei	刑事警察
KTB: Kriegstagebuch	戦争日誌
Korück: Kommandant des rückwärtigen Armegebietes	軍後方地域 (司令官)
NKWD	内務人民委員部 (ソ連)
OKH: Oberkommando des Heeres	陸軍総司令部
OKW: Oberkommndo der Wehrmacht	国防軍最高司令部
Orpo: Ordnungspolizei	秩序警察
Pz : Panzer	装甲部隊
RKFDV: Reichskommissar für die Festung deutschen Volkstums	ドイツ民族強化帝国全権委員
RSHA: Reichssicherheitshauptamt	国家保安本部
SA: Sturmabteilung	ナチ突撃隊
SD: SS-Sicherheitsdienst	ナチ親衛隊保安情報部
Sipo: Sicherheitspolizei	保安警察
SK: Sonderkommando	特別中隊
SS: Schutzstaffel	ナチ親衛隊

はじめに

これまでドイツ第三帝国（ナチス・ドイツ）によるユダヤ人の大量殺戮（ホロコースト：**Holocaust**）を含む未曾有の重大犯罪は、ナチ親衛隊長官ハインリヒ・ヒムラー（**Heinrich Himmler**）を頂点とするナチ親衛隊（**SS:Schutzstaffel**）によって引き起され、ドイツ国家の軍隊であるドイツ国防軍（**Wehrmacht**）は国家防衛のために敵国軍隊との戦闘に専念していた為に、それらの残虐行為に直接関与する事はなかったと考えられてきた。すなわち、これが「国防軍潔白神話（**saubere Wehrmacht**）」である。

ところが近年ハンブルク社会問題研究所（**HIS : Hamburger Institut für Sozialforschung**）によって「ドイツ国防軍の犯罪展（**Verbrechen der Wehrmacht**）」がドイツ各地で開催されたのを契機に、ユダヤ人殺戮等のナチス・ドイツの政治イデオロギー戦争でのドイツ国防軍の役割がクローズアップされて論議を醸し、この分野の研究も進展してドイツ国防軍による犯罪がドイツ社会で広く認識されるに至った。

この様な独ソ戦期のドイツ第三帝国の政治、軍事、戦争、ユダヤ人殺戮に関する研究は、米軍が第二次世界大戦の終戦直後にドイツから押収した「ドイツ押収文書」に頼る従来の段階から、現在は膨大な新史料が発掘され、それを駆使することによって、以前は注目されなかった新しい分野でのより詳細な研究の段階へ入ったと考えられる。

そこで本論文は、ドイツを中心に近年急速に進んだ研究成果を踏まえ、「ドイツ国防軍の犯罪展」での論争を視野に入れて、従来から利用されてきた「ドイツ押収文書」のみならず、フライブルク連邦軍事公文書館（**BA-MA:Bundesarchiv-Militärarchiv**）で収集した新史料、及びドイツ統一によってドイツに返還されて利用可能になった旧ベルリン・ドキュメントセンター（**BDC:Berlin Document Center**）所蔵史料を含むベルリン・リヒタ

ーフェルデ連邦公文書館分館 (BA:Bundesarchiv-Berlin-Lichterfelde) 所蔵史料等を使って、独ソ戦前期における主として作戦地域内でのドイツ国防軍とユダヤ人殺戮を任務とするSS特別行動隊との関係を解明し、更にドイツ国防軍のユダヤ人殺戮を中心とする未曾有の非人道的犯罪行為に荷担するに至る原因とその過程の解明を企図するものである。

I 序 論

1 本論文の問題の所在と意義

1941年6月22日未明、ドイツ国防軍部隊は、約300万名の大兵力をもって独ソ国境(分割線)を越えてソ連領内への侵攻作戦を開始した。ドイツの対ソ連侵攻作戦、いわゆるバルバロッサ作戦の開始であった。その前年1940年12月18日にアドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler)はドイツ国防軍首脳に対して、来るべき対ソ連戦の基本構想を示し、その実施の為の準備を命じた。その構想はその際発せられた総統指令第21号「バルバロッサ事案」によれば、次の通りであった。

「ロシア西部のソ連軍を、ドイツ装甲部隊の大胆な運用によって殲滅し、有力な敵軍の後方地域への後退を阻止すべし。

その後、迅速な突進により、ソ連空軍が我が領土へ到達することが不可能な線まで前進する。本作戦の最終到達目標はボルガー・アルハンゲリスクを結ぶ線を確保して、アジア・ロシア部を孤立させることである。状況により、空軍の攻撃によりウラル地域のソ連の最終的工業地域を破砕することがある⁽¹⁾。」

しかし、ドイツのソ連侵攻作戦は総統指令第21号で示された軍事作戦だけが全てではなかった。前線後方の占領地域において「コミッサール(政治委員)命令(Kommissarbefehl)」に基づくソ連政治委員の処刑、ユダヤ人の大量殺害、ロシアの一般住民への迫害が行われ、またソ連軍捕虜の大量死も発生した。これは政治イデオロギー戦争、民族絶滅戦争、経済収奪戦争をも含んだ軍事作戦を遙かに超える新しいタイプの戦争であった。そこでユダヤ人殺戮等の残虐行為で中心的役割を担ったのが保安警察・親衛隊保安情報部特別行動隊(Einsatzgruppen der Sicherheitspolizei und des

Sicherheitsdienstes RFSS) [以下SS特別行動隊と言う]であった。保安警察・親衛隊保安情報部長官 SS大将ラインハルト・ハイドリヒ (Reinhard Heydrich) の命令によって国家保安本部 (RSHA:Reichssicherheitshauptamt) の指揮下に編成されたこの部隊は⁽²⁾、既に1939年9月のドイツのポーランド侵攻に際してもドイツ国防軍部隊に随行し、将来ドイツの敵になる恐れのあるポーランドの指導者層の殺害及びユダヤ人狩りを行っていた⁽³⁾。対ソ連侵攻に際しては、新たに総員約3,000名から成るSS特別行動隊の4個部隊(A~D)が編成され、ドイツ国防軍部隊に後続してソ連に侵攻し、約100万人⁽⁴⁾にも及ぶと言われるソ連在住のユダヤ人の殺戮に中心的な役割を果たしたのである。

このように、ドイツのソ連侵攻作戦の中心的な目標は、ドイツ民族の為の「生存圏(Lebensraum)の確立」と「反ユダヤ主義」と言うナチズムの中核を成す二つの命題⁽⁵⁾の実現であった。すなわちドイツ第三帝国の対ソ連戦は、「東方生存圏の確立」の前提となるドイツ国防軍によるソ連軍の撃破と広大なロシアでの占領地獲得の為の軍事作戦の実施、更にもう一つが「反ユダヤ主義(Antisemitismus)」の実現の為のSS特別行動隊によるユダヤ人大量殺戮行動から構成される二重戦争であった⁽⁶⁾。しかし、この戦争の後者の面、即ち陰の面であるユダヤ人大量殺戮、住民迫害、ソ連軍捕虜の大量死等の残虐行為は、ナチ親衛隊(SS)だけによって実行されたのではない。その様な行為はドイツ国防軍の承認、支持あるいは協力によって初めて可能だったのであり、やがて国防軍自身もこれらの犯罪行為に手を染めていく事になる。

しかし、ドイツ国防軍のロシアでの戦争犯罪に対する責任の追求は、1946年にニュルンベルクで開設された「ニュルンベルク国際軍事裁判」において国防軍最高司令部(OKW:Oberkommando der Wehrmacht)総監で

あったヴィルヘルム・カイテル(Wilhelm Keitel)陸軍元帥、同作戦部長のアルフレート・ヨードル(Alfred Jodl)上級大将等の国防軍首脳に対しては行われたものの、東部戦線のドイツ国防軍部隊、及びその指導部に対しては充分に行われなかった。更に1950～60年代、かつて東部戦線で部隊を指揮したドイツ国防軍の将軍達は、回想録等において残虐行為の責任をヒトラー唯一人に負せ、ドイツ国防軍の不関与、もしくはヒトラーへの面従腹背を主張した⁽⁷⁾。

その後専門家の手によって、東部戦線でのドイツ国防軍自身による通常の軍事行動以外での残虐行為を中心とする戦争犯罪に深く関与していた事を示す多くの研究が現れたにも拘らず、依然としてドイツ国民あるいは、かつて東部戦線で戦闘に参加した旧ドイツ軍人の間では「ドイツ国防軍は、国家への義務を果たすべく東部戦線で勇敢に戦った。恥ずべき犯罪行為は主としてSSによって為されたものであり、ドイツ国防軍の積極的な関与はなかった。」と言う、いわゆる国防軍潔白神話が流布し、ドイツ歴史家論争の一部ともなった1986年のアンドレアス・ヒルグルーバー著『二通りの没落』に現れる「ドイツ東部作戦軍によるドイツ国民救済のための英雄的戦闘⁽⁸⁾」もこの延長線上にあったと考えられる。

しかしながら近年ドイツでは、1941年6月に開始されたドイツ第三帝国の対ソ連戦を単なる軍事侵攻作戦「バルバロッサ作戦」として捉えるのみならず、ナチズムの政治イデオロギーを実現するための政治イデオロギー戦争、即ち対スラブ人、さらに対ユダヤ人「絶滅戦争(Vernichtungskrieg)」として捉える面が俄に注目されてきた。その中でも、SS特別行動隊によるロシア・ユダヤ人に対する大量殺戮行動のみならず、ドイツ国防軍自身の手による戦争犯罪行為、特にユダヤ人、一般住民に対する大量殺戮が注目を集めるようになった。

その発端は民間の研究機関であるハンブルク社会問題研究所(HIS:

Hamburger Institut für Sozialforschung) が、ドイツ統一後、連邦軍が NATO 領域外へ活動地域を拡大し、旧ユーゴスラビアへの派遣が論議されるに及んでこれを阻止すべく、1995年からハンブルクを皮切りにドイツやオーストリア各地で開催した「ドイツ国防軍の犯罪展⁽⁹⁾」であった。特に、1997年2月から4月までミュンヘン市庁舎で同展が開催され、ドイツ国防軍将兵によるバルカン半島やロシアでの非戦闘員殺戮の現場写真が多数展示されるに及んで、連日多数の市民が押し掛けて話題を集めることになった。それに対して地元バイエルン州政府与党であるキリスト教社会同盟 (CSU: Christlich-Soziale Union) が反発し、同展は根拠に乏しい自虐的行為であるとして、大々的に反対運動を展開するに至った。ところが、そのことが逆にドイツ全土に同展、さらにドイツ国防軍の犯罪行為そのものの真偽や是非、評価を巡る論争を巻き起こす結果となり、引き続き同展はドイツ各地で開催されるとともに、討論会の開催や紙上討論が活発に展開された⁽¹⁰⁾。その後同展で展示されていたいくつかの写真がドイツ国防軍による残虐行為を示すものではなく、ソ連のNKWD (内務人民委員部) による住民殺害の際に撮影されたものである事が判明⁽¹¹⁾して、犯罪展の開催は一時延期され、これに乗じて犯罪展反対派が一斉に反撃に転じるに及んで、この問題を巡る論争は当初の開催の意図とはかけ離れて、さらに活発、先鋭化している。

この論争は、その問題がこれまで一部の専門研究者だけに注目され、大多数の国民や旧ドイツ軍人には、依然として非戦闘員に対する残虐行為はナチ親衛隊をはじめとするナチスによる犯罪でドイツ国防軍による積極的関与はなかったとする「国防軍潔白神話」が流布していたドイツ国内に一大衝撃を与えることになり、これ以降、ドイツ国防軍自身が荷担した戦争犯罪が、俄に問題の核心に上るに至ったのである。

しかし、この問題は第三帝国の国防軍及び国防軍軍人の問題に止まらな

い。何故ならば1955年に建軍された現在のドイツ連邦軍(Bundeswehr)も、プロイセン陸軍の伝統を正統なドイツ軍隊の伝統として受け継ぎ、ヒトラー時代のドイツ国防軍においても、1944年7月20日に発生したヒトラー暗殺未遂事件(7月20日事件)参加者を中心とする反ナチ抵抗運動参加者を正統なドイツ軍隊の伝統の体現者として高く評価し、これらが伝統的にも精神的にも現在の連邦軍に繋がると考えているからである。つまり、ヒトラーの世界観(政治イデオロギー)実現の為の対ソ連侵攻において、ドイツ国防軍が軍事面のみならず政治戦争すなわち軍事行動以外でのユダヤ人等に対する残虐行為に広範かつ積極的に荷担していたとすれば、従来の「国防軍潔白神話」は完全に崩壊し、更に現在のドイツ連邦軍の精神的基盤も揺らぎ、軍人の「良心か服従(Gewissen oder Gehorsam)」の問題を「内面指導(Innere Führung)」と称して軍人に対する精神教育の中心に据えているドイツ連邦軍にとっても重大な問題を提起する事になる。何故ならば、ドイツ国防軍がナチズムの政治イデオロギーに基づき、ロシアでのユダヤ人住民の殺害に積極的に参加していたとすれば、その犯罪はニュルンベルク国際軍事裁判で規定された「B級戦争犯罪:通常の時国際法に違反する犯罪」ではなく、ユダヤ人の大量殺戮(ホロコースト)を処罰する根拠となった「C級戦争犯罪:人道に対する罪」であり、SSが犯したユダヤ人大量殺戮(ホロコースト)と同罪になるからである。

この様な問題意識から、本論文はドイツ国防軍側の史料(フライブルク・ドイツ連邦軍事公文書館所蔵文書)とSS長官ハインリヒ・ヒムラー文書に含まれるSS特別行動隊行動報告(ワシントンD. C. 米国立公文書館所蔵「押収ドイツ文書」)、更にベルリン・リヒターフェルデ連邦公文書館分館所蔵文書を使って、1941年東部戦線におけるドイツ陸軍(東部作戦軍:Ostheer)とSS特別行動隊との関係、すなわち戦時作戦地域内における作戦軍と政治的的特殊任務を帯びる特別部隊との特殊な政軍関係をケ

ーススタディとするものであるが、その際更に踏み込んで国家の敵である敵国軍隊を撃破することを本来の任務とする国防軍が、如何なる理由で、どのような過程を経て、本来の軍事的な任務からはずれたユダヤ人及び一般住民に殺戮という犯罪行為に荷担して行ったのかを明らかにする。

これらの作業によって、第二次世界大戦における最大の戦いである独ソ戦の開始時点でのヒトラー及びナチ党によるドイツ国防軍に対する支配権確立の度合も明らかにすることができ、今後ドイツ第三帝国の全期間にわたるヒトラー及びナチ党とドイツ国防軍との関係、即ちドイツ第三帝国における政軍関係の全貌の解明への端緒を開くものと考ええる。

そもそも政軍関係とは、その国の政治と軍事の関係、すなわち政府と軍の関係、あるいは政治勢力と軍の関係で、これを研究する学問分野を政軍関係論(Civil-Military Relations)と言う。我が国では研究者も少なく、あまり注目されてこなかった分野であるが、欧米では、地道に研究が進められて膨大な研究成果が蓄積されている。それは政軍関係が、その国家のあり方の根本に関わり、その解明が国家の存在の基本問題につながるからである⁽¹²⁾。その意味で、ドイツ第三帝国での政軍関係の解明は、ドイツ第三帝国という特異な国家の政治、権力構造の解明に新しい光を当てることになると考えられる。

本論文は、軍の作戦地域すなわち東部戦線の戦場において、軍の統制力が最大限発揮される状況下で特異な政治勢力と軍との間に成立した関係を、原因、経過も含めて解明するものであるが、その事はドイツ第三帝国全体の政軍関係の解明への第一歩になると考えられる。何故ならば、ナチスの政治勢力(ナチス指導部やSS)は、東部戦線でのSS特別行動隊によるユダヤ人殺戮を経て、ヨーロッパの全ユダヤ人の殺戮(ホロコースト)へ先鋭化する事になるし、軍(国防軍)では、東部戦線での経験を経て、ヒトラーとナチスの本質を看破して、国防軍内に反ナチ・反ヒトラー抵抗

グループが形成されて、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件へと発展するからである。

2 先行研究

本論のテーマに関しては、1957年に出されたドイツのソ連占領政策の研究の嚆矢とも言うべきアメリカの研究者アレキサンダー・ダリン著の『ロシアにおけるドイツの支配 1941—1945』⁽¹³⁾においても、ドイツの占領地民政については詳述しているものの、「ドイツ国防軍は政治的案件については蚊帳の外に置かれていた」として、軍政に関しては殆ど言及されていない。しかし、1965年ハンス・アドルフ・ヤコブセンは国防軍の「コミッサール命令」実行に焦点を当てて、国防軍の戦争犯罪関与を追求した。⁽¹⁴⁾ 1969年に出されたマンフレート・メッサーシュミット著『ナチ国家におけるドイツ国防軍』⁽¹⁵⁾ とカール・ユルゲン・ミューラー著『陸軍とヒトラー：軍とナチ政権 1933—1940』⁽¹⁶⁾ は、国防軍とナチ党との関係をより包括的に研究したものであるが、メッサーシュミットはナチ党による国防軍の支配は第二次大戦以前より進み、大戦直前（1939年）には国防軍はナチ国家体制に組み込まれたと見なし得るものの、最終的支配権の確立は7月20日事件（ヒトラー暗殺未遂事件）以降であるとして国防軍の積極的な戦争犯罪関与を間接的に否定した。ミューラーもSSと国防軍の協力関係は、単に体制内の勢力争いに起因するもので表面的なものと考えた。

これに対して1960年代後半—1970年代に何人かの東ドイツの歴史学者によって、国防軍の占領地域での積極的な戦争犯罪関与が主張されたが、そこには共産主義のドグマとソ連に対する過度の配慮があり額面通りには受け取れない⁽¹⁷⁾。

1977年ヘルムート・クラウシュニックは、ソ連軍の政治委員を捕ら

えた場合に戦時国際法を適用せず、戦時捕虜として扱わずに犯罪者として直ちに射殺する様に命じた「コミッサール（政治委員）命令（Kommissarbefehl）」の実行により、ドイツ国防軍の戦時国際法の放棄という新しい解釈を試みた⁽¹⁸⁾が、更にヘルマン・ディーター・ベッツも1970年に博士論文において同様の指摘を行っている⁽¹⁹⁾。

本格的なドイツ国防軍の戦争犯罪関与に対する追求は、1978年のクリスチャン・シュトライト著『戦友にあらざ』⁽²⁰⁾においてソ連軍捕虜に対する残酷な取扱いと大量死に焦点を当てて行われた。シュトライトはドイツ国防軍の犯罪的命令は対ソ連戦当初から存在しSS特別行動隊との大量殺戮に関する協力、さらに一般住民に対する迫害へとエスカレートして行き、結局ドイツ国防軍は対ソ連侵攻において絶滅戦争の面でも大きな役割を果たしたと主張した。しかし、1981年アルフレート・シュトライトは『バルバロッサ作戦におけるソ連軍捕虜の取扱い』⁽²¹⁾で捕虜の大量死は政策の結果ではなく、差し迫った状況により強要されたものであると主張した。これに対して、1981年クラウシュニックは『世界観戦争の部隊：保安警察・親衛隊保安情報部（SD）特別行動隊 1938—1942』⁽²²⁾を著し、国防軍とSS特別行動隊のユダヤ人殺戮等の残虐行為に関する協力関係を明確に指摘した。さらに同書の共著者であるハンスーハインリヒ・ヴィルヘルムは、同書後半の「SS特別行動隊A」で初めて特別行動隊毎のケーススタディーを行った。

1980年代に入りドイツ国防軍の戦争犯罪である残虐行為への関与として次の三点が揚げられた。

- 1) ドイツ国防軍は、「コミッサール命令」の適応範囲を越えて大量のソ連軍の一般兵士を死に至らしめた。
- 2) ドイツ国防軍のSS特別行動隊への協力は、兵站支援からさらに

エスカレートして、数百万に及ぶヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅への道を開いた。

- 3) ドイツ国防軍はソヴィエト・パルチザンとの戦闘に際し、必要以上に多数の一般住民をパルチザンと決めつけ殺害した。

ただし、1) のソ連軍捕虜の大量死に関しては国防軍の意図に基づくものかどうかは研究者の間で意見が分かれている。

しかし、ドイツの多くの軍事史家は依然として東部戦線の軍事的側面にのみ焦点を当てて占領政策に関心を示すことはなかった。これに対して、リチャード・フェイテック、オマール・バルトフ、クリストファー・ブローニングといった米英の歴史家達は、ドイツ国防軍をヒトラーの「生存圏」思想実現のための機関とはっきり位置づけ、ユダヤ人殺戮に際してもドイツ国防軍は異議を唱える事はなかったと主張した⁽²³⁾。ようやくドイツにおいても、1979年からドイツ国防省軍事史研究所(MGFA)によって刊行が開始されたドイツの第二次大戦公刊戦史である『ドイツ帝国と第二次世界大戦』(全10巻)⁽²⁴⁾の第4巻『ソ連に対する攻撃』(1983年)⁽²⁵⁾の中で、ユルゲン・フェルスターはバルバロッサ作戦を征服 - 絶滅戦争と位置づけ、ドイツ国防軍の計画立案段階からのユダヤ人殺戮を含む戦争犯罪への関与と、作戦開始後の残虐行為に関してSSと共犯であると主張した。また、東方生存圏確立の為の国防軍の役割についても強調している⁽²⁶⁾。

しかし、これらの新しい研究にも拘らず、東部戦線での残虐行為の主な舞台となった軍後方地域及び軍政そのものに関する研究は不十分であったが、1989年テオ・シュルツによって初めて本格的な研究『ロシア占領地におけるドイツ陸軍とナチスの政策』⁽²⁷⁾が出された。この研究は中央軍集団(H. G r. M i t t e)の後方地域内で、第9軍と第2装甲集団(後

に装甲軍)に配属された第582軍後方地域司令官(K o r ü c k 5 8 2)と第532軍後方地域司令官(K o r ü c k 5 3 2)についてのケース・スタディであり、K o r ü c kの対パルチザン戦、一般住民との関係、ソ連軍捕虜の取扱い、更にユダヤ人問題に関するSS及びSD(SS特別行動隊を含む)との関係を具体的に明らかにした。

1992年、カナダの研究者ロナルド・ヘッドランドは『殺人のメッセージ：1941-1943年保安警察・保安情報部 - 特別行動隊報告の研究』⁽²⁸⁾を出し、SS特別行動隊が国家保安本部に送った報告について、その内容と報告書の歴史学的及び法的価値を分析している。更にヘッドランドは、この研究の中で「陸軍のSS特別行動隊に対する協力」と言う一章を設けて、陸軍とSS特別行動隊との協力関係を論じている。

その後、SS特別行動隊に関する研究は、1996年にヴィルヘルムが、新史料を駆使して再び『SS特別行動隊A』⁽²⁹⁾を表わし、その中では地域毎の活動状況が分析され、そこでの国防軍との関係を明らかにしている。

同年ラルフ・オゴレックは、1994年にベルリン自由大学に提出した博士論文『SS特別行動隊と「最終的解決の発端」』⁽³⁰⁾を公刊し、従来の史料に加えて、ドイツ各地の地方公文書館の所蔵文書を駆使して特別行動隊の全体像を明らかにし、更にSS特別行動隊B、C、Dについては、その構成部隊である特別中隊、及び特別行動中隊単位での分析も行っている。

1997年には、ペーター・クライン編集による特別行動隊に関する命令、報告等の史料集である『1941年-1942年ソ連邦占領地域における特別行動隊』⁽³¹⁾が公刊され、この分野の研究者の利用の便に供された。更に1999年には、米陸軍将校であるフレンチ・L・マクリーンが、米国国立公文書館所蔵のSS特別行動隊の中隊長以上の人事記録文書(旧ベルリン・ドキュメントセンター文書)を『フィールドマン：SS特別行動隊-特別行動中隊を指揮したSS将校達-』⁽³²⁾で整理して公表した。

これら最近の研究動向から明らかなように、近年の欧米でのSS特別行動隊に関する研究は、従来の極めて特異で希な研究対象であった時期から、より一般化して内容も詳細かつ深いものになってきている。

一方、国防軍の東部戦線での犯罪に関しては、「1 本論文の問題の所在と意義」で述べた様に1995年から1998年にドイツ各地で開催された「国防軍の犯罪展」を切っ掛けに盛んに議論が行われた。これは「国防軍神話」を崩す事には貢献したが、その内容は、殆どがこの分野の専門家には既に知られている事実であり、この分野での研究に新たな進展があったとは言い難い。

しかしながら、冷戦の終結、ドイツの統一、ソ連崩壊等により、新たな史料が大量に利用可能となった事により、21世紀に入り、東部戦線でのドイツ国防軍の占領地域での占領政策、治安作戦等の1次史料に基づく精緻で実証的な研究が大きく進展した。まず2004年に公刊されたのが、マンフレート・オルデンプルクによる『イデオロギーと軍事的計算—ドイツ国防軍の1942年ソ連における占領政策—』⁽³³⁾である。1942年の第11軍のクリミア半島での占領統治と第17軍によるドネツでの占領統治の実態を詳細に明らかにした。翌2005年にクラウス・ヨッヘン・アルノルドが出した『ドイツ国防軍とソ連占領地域での占領政策—バルバロッサ作戦での戦争指導と過激化—』⁽³⁴⁾は、1941年のバルバロッサ作戦遂行時における占領統治の実態を、事前のドイツでの準備からソ連軍捕虜、対パルチザン戦、ユダヤ人等を広く網羅して、その実態を明らかにしている。2008年に出されたディーター・ポールの『ドイツ国防軍の支配—1941年～1944年のソ連におけるドイツの軍政と一般住民—』⁽³⁵⁾は、1941年からドイツがソ連領内から撤退する1944年までのドイツによる占領の全期間を対象に、ユダヤ人、パルチザン、一般住民に対する占領政策が明らかにされている。同じく2008年には、フェ

リックス・レーマーによって、「コミッサール命令」⁽³⁶⁾の東部作戦軍での実行状況に関する詳細な研究が出されている。2010年に刊行されたユルン・ハーゼンクレファーの『ドイツ国防軍とソ連占領政策－1941年～1943年の軍集団後方地域司令官－』⁽³⁷⁾は、ドイツ国防軍の占領政策の内、これまで詳しい実態解明が行われなかったドイツ東部作戦軍の三つの軍集団の後方地域支援を行う軍集団後方地域に焦点を絞った初めての研究である。2012年、ユルゲン・キリアンが公刊した『ドイツ国防軍と1941年～1944年のロシア北西部における占領統治－北方軍集団の軍政地域での実際と日常－』⁽³⁸⁾は、ドイツ国防軍の占領統治の実態を北方軍集団作戦地域に絞って詳細に解明した研究である。

以上の諸研究によって、ドイツ国防軍の占領地域での統治の実態と犯罪行為の解明は格段に進展したものの、これらの地域でのナチスの特別部隊であるSS特別行動隊との関係が如何なるものであったのか、またドイツ国防軍が如何なる理由、過程を経て犯罪行為に荷担するに至ったのかという疑問の解明は、まだ十分に行われているとは言えない。

著者は、修士論文（筑波大学）以来、この問題を追究してきたが⁽³⁹⁾、2012年度の日本大学海外派遣研究員として、ドイツ連邦公文書館（コブレンツ、及びベルリン・リヒターフェルデ）で史料収集を行い、必要な史料の収集を終了する事ができたので、本論文を完成する事ができた。

3 史料

本論文を執筆に際して使用した主な1次史料は、以下の三つである。

- 1) 米国ワシントン D.C.にある米国立公文書館 (NA:National Archives)
所蔵の「ドイツ押収文書」(マイクロフィルム)
- 2) ドイツ連邦共和国フライブルクにあるドイツ連邦軍事公文書館

(BA-MA:Bundesarchiv-Militärarchiv) 所蔵文書

3) 同じくベルリンにあるドイツ連邦公文書館リヒターフェルデ分館

(BA:Bundesarchiv-Berlin-Lichterfelde) 所蔵文書

1) の米国立公文書館所蔵文書は、第二次大戦終結時にドイツを占領したアメリカ軍によって押収されたドイツ第三帝国の政府、軍、内務・警察、SS関係の公文書であり、ドイツでの戦争犯罪を裁く戦争裁判で証拠資料として使用された後に、米国に運ばれて米国立公文書館に所蔵された。それ故にこの文書は「ドイツ押収文書」と呼ばれている。その総量は約10万ファイルに及ぶ膨大なものである。このドイツ押収文書は、ドイツ現代史研究の貴重な史料であり、1970年代からアメリカ歴史学会の手によってマイクロフィルム化されて、原文書は逐次ドイツに返還された。このアメリカから返還された文書とドイツでアメリカ軍の押収を免れた文書、その後ドイツで発見された文書、更に1990年のドイツ統一後旧東ドイツに保管されていた文書とソ連からドイツに返還された文書を加えた全ての公文書はドイツ連邦公文書館（本部はコブレンツ）によって再分類と整理が行われて、軍事文書は旧来通り2)のフライブルクの軍事公文書館に、政治文書の内第三帝国のものは、3)のベルリン・リヒターフェルデ分館に所蔵された。なお戦後のドイツ連邦共和国の公文書は、コブレンツの本部に所蔵されている。1990年まで西ベルリンでアメリカ軍が直接管理していたナチ親衛隊（SS）将校9万人分の人事ファイルを含むドイツ第三帝国の機密文書、いわゆるベルリン・ドキュメントセンター文書は、米本国へ移送され米国立公文書館にマイクロフィルム化されて所蔵されている。その原文書は、現在は3)のリヒターフェルデ分館に納められている。

本論文作成にあたっては、ドイツ政府、ナチ党、国家保安本部、SS特別行動隊関係の政治、行政文書は、主に 1) の米国立公文書館から入手

したマイクロフィルムを使用し、この内、国家保安本部（RSHA）、SS特別行動隊、及び旧ベルリン・ドキュメントセンター所蔵文書は、リヒターフェルデ分館所蔵の原文書と現地で照合して内容を確認した。軍事関係文書は、主にフライブルクの連邦軍事公文書館で直接収集し、更にその一部は、米国立公文書館から入手したマイクロフィルムで内容を確認した。なお、近年本研究テーマに関連して3種類の史料集が刊行されたので、それらも併せて参考にした。本論文作成に使用したこれらの史料（文書）の一覧は、論文末の「史料」に示している。

4 本論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである。

はじめに

I 序論

- 1 本論文の問題の所在と意義
- 2 先行研究
- 3 史料
- 4 本論文の構成

II 本論

第1章 ヒトラー・ナチスの東方政策とその思想的背景

第1節 ドイツの東方進出

第2節 オーバー・オスト

第3節 東方総合計画

第2章 対ソ連侵攻とドイツ陸軍

第1節 バルバロッサ作戦の立案と作戦準備

第2節 東部作戦軍の編成と作戦

第3節 東部作戦軍部隊の指揮官達

第3章 ソ連占領地

第1節 占領政策

第2節 軍政組織

第3節 パルチザン戦

第4章 国家保安本部とSS特別行動隊

第1節 国家保安本部の設立

第2節 SS特別行動隊の創設と対ソ連侵攻準備

第3節 SS特別行動隊のソ連における作戦

第5章 ドイツ陸軍とSS特別行動隊の公式の関係

第1節 陸軍総司令部と保安警察

第2節 ヴァグナー・ハイドリヒ協定

第3節 更なる協定の締結

第6章 東部作戦軍とSS特別行動隊の実際の関係

第1節 軍集団及び軍集団後方地域

第2節 軍及び軍後方地域

第3節 軍団作戦地域（戦闘地域）

III 結 論

註

史 料

参 考 文 献

I 序論 で本論文執筆にあたって、その問題の所在と意義、本論文のテーマに関する先行研究、使用した史料等を説明した後、本論文全体の構成を説明した。

II 本論 の第1章の「ヒトラー・ナチスの東方政策とその思想的背景」

では、ドイツ第三帝国の東方侵攻の背景となったドイツの東方進出の歴史的な経緯を示して、ヒトラー・ナチスの東方政策との連続性を説明した。

第2章の「対ソ連侵攻とドイツ陸軍」では、ドイツのソ連への侵攻の背景、作戦構想、計画策定、作戦準備、更に作戦部隊の編成と作戦の概要を示し、東部作戦軍部隊の高級指揮官、すなわち軍集団司令官と軍司令官（軍集団後方地域司令官を含む）の出自、経歴、政治的傾向等を示した。

第3章の「ソ連占領地」は、住民やユダヤ人の殺戮の舞台となった地域に関して、その根底をなすドイツの占領政策、その地域を統治する軍政組織を説明して、住民、ユダヤ人殺戮と密接に関連するソ連側のパルチザン活動の実態を明らかにした。

第4章の「国家保安本部とSS特別行動隊」では、東方地域でのユダヤ人殺戮の実行部隊であるSS特別行動隊を指揮する最高機関たる国家保安本部の成立過程、SS特別行動隊の設立とソ連での作戦の概要を説明した。

第5章の「ドイツ陸軍とSS特別行動隊の公式の関係」は、ドイツの対ソ連戦開始に際してのドイツ陸軍総司令部と保安警察・親衛隊保安情報部との関係、更にその両者間で結ばれた協定、申し合わせ等の取り決めを細部まで解明して提示した。これらは東方作戦地域での両者の実際の間接関係を解明する際に、その前提となるものである。

第6章の「東部作戦軍とSS特別行動隊の実際の関係」は、東部作戦軍の軍集団、軍、軍団（師団以下の部隊を含む）の各級部隊の作戦地域での軍とSS特別行動隊の両者の関係をユダヤ人の殺戮行動に焦点を当てて、その実態を分析、解明した。

Ⅲ 結論 では、本論での分析、検証を踏まえて、両者の関係の実態を解明し、如何なる理由で、またどのような過程を経て、ドイツ東部作戦軍が本来の軍の任務、役割を逸脱して、ユダヤ人及び一般住民に殺戮という犯罪行為に荷担して行ったかを論じた。

II 本 論

第1章 ヒトラー・ナチスの東方政策とその思想的背景

第1節 ドイツの東方進出

そもそもヒトラーの対ソ連侵攻の決意は、どのように行われたのか。ヒトラーは既にその著書『わが闘争 (Mein Kampf)』第II巻 (1927年刊)の中で生存圏の確保とロシア・ボルシェビズム (ユダヤの世界支配の陰謀)の打倒は、ナチズムに課せられた歴史的使命であると明言している⁽¹⁾。その理由は、当時ドイツでは毎年90万人の人口増加があり、これを支える為には出生制限、国土開発、輸出の振興、新領土の獲得と言う四つの道が考えられるが、初めの三つの道では、いずれも問題の解決にはならず、ヒトラーは第四の道、すなわち新領土の獲得を選択したのである。しかも、その新領土も海外にではなくヨーロッパ大陸内で獲得しなければならない⁽²⁾。そうすると、その新領土が獲得できる場所は唯一つ東方地域、すなわちヨーロッパ・ロシアであった⁽³⁾。その上、そのロシアは今世界支配を企む国際ユダヤ主義による二十世紀最大の政治的な実験ともいうべきボルシェビズムによって支配されているのである⁽⁴⁾。ヒトラーにとって、ナチズムに課せられた二つの使命 (生存圏の確保とロシア・ボルシェビズム、すなわちユダヤ人の打倒) を達成するために是非とも対ソ連侵攻を行う必要があった。

ここにボルシェビズム・ユダヤ人の打倒というナチス特有の考えはあるもののヨーロッパの東部地域 (東方) にドイツ人の生活圏を確保するという考えは、ヒトラーやナチスの専売特許ではなく古くから存在していた。

ドイツの東方進出の第1段階は、10世紀の神聖ローマ帝国のザクセン朝のハインリヒ1世とその息子オットー1世 (大帝) の時代で国境地帯にマルク (辺境領) の設立と城塞の建設を行った。その際、教会の東方へのキリスト教の布教も行われ、マクデブルクに大司教座が置かれ、ブランデ

ンブルク、ハーフェルベルク、オルデンブルク、シュレスヴィッヒ、リップペン、アールフスに司教座が新設された。この中でもマクデブルク大司教座は、その後のドイツの東方植民の本拠地となった。ただザクセン朝時代のドイツの東方への進出は、大規模植民活動を伴わなかった。その主な目的は、住民からの租税の徴収と教会の十分の一税の徴収であった⁽⁵⁾。

しかしながら12世紀から始まるドイツの東方進出は大規模な植民を伴うものであり、その後のドイツの東方植民の原型であった。11世紀から14世紀のヨーロッパでの人口増加を背景に、50万人以上のドイツ人の農民、職人、商人達がヴィスワ河以東に新天地を求めて移住し、その後もドイツ人の東方植民は続き、北はバルト海から、東はボルガ河、南は黒海に至る広大な地域に定着した⁽⁶⁾。

更にドイツの東方植民で忘れてはならないのが、ドイツ騎士団である。第3回十字軍に際して、1199年にローマ教皇に異教徒と戦う騎士修道会として許可されて創設されたドイツ騎士団は、13世紀に入り異教徒との戦い、すなわちキリスト教の布教から、自らが一封建領主となって領地を持ち、やがて自分たちの国家を創設するという大変換を遂げることになった。すなわちドイツ騎士団の第4代団長ヘルマン・フォン・ザルツァは、1230年神聖ローマ皇帝とローマ教皇の許可を得て、ヴィスワ河がバルト海に注ぐプロイセンに新たなドイツ騎士団国家の建設を開始したのである⁽⁷⁾。

元々プロイセン及びバルト海沿岸地域では、12世紀半ばからローマ教皇の許可を得た北方十字軍によって、同地域のスラブ系住民に対するキリスト教化が進められていたが、強烈に抵抗する非キリスト教徒であるプルゼン（原プロイセン人）に手を焼いたポーランド大公が、ドイツ騎士団にその制圧を要請したのである。これを好機に征服、キリスト教化、国家建設へと進んだドイツ騎士団は、その支配地域を北はバルト3国の北端エス

トニアから、西は東プロイセン、港湾都市ダンツッヒ（グダンスク）へと拡大し、1309年にはヴィスワ河畔のマリエンブルク（マールボルク）に強大な城塞を建設して、そこを本拠地とした。このドイツ騎士団国家は、2,000名ほどの少数のドイツ貴族出身の独身の騎士が支配する過酷で情け容赦のない軍事国家として、ケーニヒスベルクやエルビィング（エルブラーク）等の都市も発展して200年以上に亘って発展、繁栄した。そして14世紀中頃にその絶頂期を迎えた⁽⁸⁾。

しかしながら、このドイツ騎士団国家も、1410年のタンネンベルク（グリューンバルト）の戦いでポーランド・リトアニア連合軍に敗北してからは衰退に向かい、遂に1525年にポーランドの属国となって消滅した。しかし、その際世俗化して誕生した属国がプロイセン公国であった。プロイセン公国は宗教改革の際に新教のルター派になり、1618年にはブランデンブルク辺境伯のホーエンツォレルン家が支配するところとなった。さらにプロイセン公国は、1701年にはホーエンツォレルン家を君主とするプロイセン王国へと発展した。つまりドイツ騎士団国家とブランデンブルクが合体して、やがてベルリンを首都とする強大な軍事国家プロイセン誕生の基礎が築かれたのである。1740年に即位したプロイセン国王フィリードリヒ2世は幾多の戦争に勝ち抜き、プロイセンをヨーロッパ有数の強国に押し上げ、ドイツ史上最も偉大な王としてフリードリヒ大王と呼ばれるに至ったのである⁽⁹⁾。

やがてプロイセン王国はドイツにおける中心的な存在として発展を続け、1866年の普墺戦争でオーストリアを破り、1871年の普仏戦争でフランスを下して、その中核国家としてドイツ帝国を成立させてドイツを統一した。プロイセンの首都ベルリンがドイツ全体の首都になり、プロイセン国王がドイツ皇帝となったのである。ドイツのすべての中心がプロイセンであった。

本来ドイツ騎士団とプロイセン王国との間に、精神、伝統、価値観等において何らかの繋がりがあった訳ではなかったが、このような歴史の流れの中で、マリエンブルクを中心とするドイツ騎士団国家が強国プロイセンの基礎、基盤であったとの認識が広まり、1902年には時のドイツ皇帝ヴィルヘルム2世は、再建されたマリエンブルク城で盛大な記念式典を敢行し、ドイツ騎士団国家のドイツ帝国への連続性と、さらにドイツ帝国の模範として賛美した⁽¹⁰⁾。

この時期ドイツでは、東ヨーロッパ、ロシアへの進出を企図する東進運動 (*der deutsche Drang nach Osten*⁽¹¹⁾) が盛んであった。この考えは、中世以来のドイツの東方進出を表す歴史的な用語であったが、やがてドイツ人の東方進出、東方支配を、ハインリヒ1世、オットー大帝、ハインリヒ獅子王、そしてドイツ騎士団、フリードリヒ大王へと繋がる連続性の中で、正当化するイデオロギーとして発展して行く。この中でも特に、ドイツ騎士団の東方植民、東方支配が、これまで述べてきたようにドイツの東方進出、東方支配の正当性の根拠としてドイツ人の心に深く根付いていくことになる。この様な歴史的な流れを背景として、ヒトラーがその著書『わが闘争』で示したように、ドイツ騎士団の東方植民を模範としたロシアを犠牲にするドイツの東方への進出と東方地域のドイツによる支配の考えが表れ、正当化されるのである。

第2節 オーバー・オスト

1914年に勃発した第一次世界大戦の東部戦線（ロシア戦線）では、パウル・フォン・ヒンデンブルク (Paul von Hindenburg) が司令官を、エーリヒ・ルーデンドルフ (Erich Ludendorff) が参謀長を務めるドイツ第8軍が、タンネンベルクにおいて東プロイセンに侵入したロシア軍を殲滅した。その後もドイツ軍は進撃を続け、1916年末までにラトビア西部からウ

クライナを経て黒海に至る広大な地域を占領、支配することになった。この地域が、ルーデンドルフを最高指揮官、すなわち東方軍最高司令官（Oberbefehlshaber Ost）とするドイツ東方軍軍政地域、すなわちオーバー・オスト（Ober Ost）である。その面積は10万km²を超え、そこには約300万人のスラブ系住民が存在していた。司令部はリトアニアのカウナスに置かれ、同地域の政治、財務、交通、農務、警察、教会、教育、林業、司法、郵政、交易、広報等を担当部署が実施した。行政区域は、クールラント、リトアニア、カウナス、ビリニュス、グロドノ、ビャリストクの六つに分けられ、プロイセンの地方行政を範に実施された。ルーデンドルフは、1916年8月にドイツ軍最高統帥部（OHL）の参謀次長となって転出するまで、ここの最高司令官として指揮を執った⁽¹²⁾。

戦争の長期化とイギリスによる海上封鎖によって、ドイツの食料、原料、燃料等の不足は深刻となり、オーバー・オストの任務は、まず自身の自給自足体制を確立し、次いでドイツ本国への食料供給基地となることであった。その為にルーデンドルフは、ここにドイツ民族の東方要塞を建設して、一大生存圏を創設しようとしたのである。その実態は、現地住民からの徹底した収奪であったが、ドイツからの投資によって食品加工、パルプ、製材、火薬製造等の産業も興され、広大な地域に交通網も整備された。斯くして、1916年11月には、ベルリンでオーバー・オストの農作物展示会が開催され、東方地域の軍政の成果が宣伝された。ルーデンドルフの指導部は、この東方地域経営を正当化するために、「東方のドイツ化事業」というイデオロギーを編み出した。すなわちスラブ人が住む不潔で野蛮な東方地域をドイツ化する、つまりドイツ文化の光を当てて秩序のある清潔な地域に変えるということであった。そこに出来上がる帝国は、ドイツ人の支配階層の下でスラブ人の被支配階層の農民が働き、農作物、畜産、木材を産出するゲルマン農業帝国である⁽¹³⁾。

一連の東方地域へのドイツの拡大の過程でドイツ国民が再発見したのは、12世紀のドイツ騎士団以来ロシア領内のバルト地域に植民して現地を支配していたドイツ人貴族、すなわちバルト・ドイツ人の存在であった。彼らは、積極的にオーバー・オストの行政に参画し、自らもドイツ人としての自覚を強めるとともに、ドイツ国民に、この地域が数百年前からドイツ人が支配する地域であることを思い起こさせ、東方城塞、東方帝国等のプロパガンダによって一層美化されて、東方植民の夢を深く心に刻ませた。

1917年のロシア革命の勃発によって、ドイツの東方支配帝国は一気に実現することになる。すなわちロシア革命の結果成立したロシア革命政府（ソヴィエト）は、直ちに社会主義新国家の建設と無併合・無賠償を基本原則とする単独講和による戦争終結を決定し、11月22日に正式に各国政府に通知した。これに対してドイツ・オーストリアは、12月からブレスト・リトウスクでソヴィエト側との講和交渉を開始した。その際、ウクライナはソヴィエトからの独立を要求したために、翌1918年の2月にドイツはウクライナの独立を承認して、まずウクライナとの単独講和を成立させた。更にドイツ・オーストリア軍はウクライナに進駐し、3月にはキエフ、オデッサを占領した。そこでソヴィエトは、ドイツ側の講和条件を呑んで3月3日講和条約に調印した。この3月の独露講和条約（ブレスト・リトウスク条約）、及び8月の追加条約によって、ドイツは、バルト三国、ポーランド、ルーマニア、ベラルーシの大部分と南ロシアを含み、フィンランドとウクライナをも保護国として包含するバルト海から黒海に至る広大な地域を獲得したのである⁽¹⁴⁾。それはオーバー・オストの領域を遙かに凌ぐ大国家であった。ヒンデنبルク・ルーデンドルフのドイツ最高統帥部は、ここに東方植民の大規模な計画を企図したが、同年11月のドイツの敗戦によって全てが水泡に帰した。しかしながら、第一次世界大戦時のドイツの東方地域でのこの一連の経験は、ヒトラーとナチス指導

部の東方政策に大きな影響を与えた。何故ならば、ヒトラーは、ワイマル時代の政治闘争の前期にはルーデンドルフと共闘し、特にヒトラーが投獄されることになる一世一代の大博打とも言える1923年のミュンヘン一揆では行動を共にしている。ヒトラーが、軍事、戦略、東方政策の分野でルーデンドルフに深く感化を受けているのは明らかである。更に、後述する東方占領大臣に就任する事になるナチス高官の一人で『20世紀の神話』の著者で、ナチスの政治イデオロギーの有力な理論家の一人であったアルフレート・ローゼンベルク (Alfred Rosenberg) は、エストニア出身のバルト・ドイツ人 (バルト3国出身の民族ドイツ人) であったために、ドイツの東方進出を主張していた。

第3節 東方総合計画

かくしてドイツ国防軍の対ソ連侵攻作戦 (バルバロッサ作戦) によってソ連軍を撃破し、ウラル山脈以西の広大な地域を占領した後に建設されることになっていたヒトラーとナチス指導部が構想した東方ゲルマン植民帝国とは如何なるものであったのか。

ヒトラー自身の言葉によれば、

「我々の長期的な東方政策の目標は、約1億人のゲルマン人をこの地域に植民させて開墾させることである。まず100万人のドイツ人を入植させて、10年以内に少なくとも2,000万人のドイツ人がそこで暮らしているという報告を聞きたい。かつてドイツ騎士団が聖書と剣で持って行ったように、我々のナチズムの戦士は、我が民族の利益を武力を持って実現しなければならない。東部地域ではスターリンが行ったような非情な措置で初めて目的を達成できる。私は、ナチスがそこで50年間努力をすれば、完全にゲルマン化できると確信している。⁽¹⁵⁾」

「東方地域に入植する帝国農民（ドイツ人農民）は、素晴らしい居住地に住むようにしなければならない。都市の中心には総督の宮殿があり、その周りに官庁とドイツ人の職場が建設される。この都市の周囲30 kmから40 kmに、ドイツ人入植者の村々が環状に設けられ、それらは立派な道路で結ばれる。そのはるか彼方にロシア人の居住地域があり、我々が彼らを支配する。反乱が起これば、爆弾を2、3発落とせば、それで片がつく。イギリスにとってのインドが、我々にとっては東方地域である。

我々は、ゲルマン人をアメリカに移住させるべきではない。ノルウェー人、スウェーデン人、デンマーク人、オランダ人は東方地域に招聘すべきである。彼らは、我々の帝国の手足となるであろう。⁽¹⁶⁾」

これは、あくまでもヒトラーが抱いていた東方ゲルマン植民帝国のイメージであるが、実際にハインリヒ・ヒムラーが指揮するナチ親衛隊（SS）によって、その実現のための計画は進められていた。ヒムラーは1939年10月7日、ヒトラーからドイツ民族強化帝国全権委員（RKFDV:Reichskommissar für die Festung deutschen Volkstums）に任命された。RKFDVに与えられた任務は次の通りである。

総統の基本方針によって、親衛隊帝国指導者には次の責務が付与された。

- 1) 最終的に帰国が見込まれる外国に居住するドイツ帝国国籍、あるいは民族ドイツ人をドイツ帝国に帰還させること。
- 2) ドイツ帝国とドイツ民族共同体に有害な異分子の悪影響を排除すること。
- 3) 外国から帰還するドイツ人、及び民族ドイツ人が居住するための入植地を建設すること。

親衛隊帝国指導者（SS長官）には、その実行に必要なあらゆる権限を付与する⁽¹⁷⁾。

これを受けて、RFKDV 担当部局は親衛隊内で重要な部署に発展し、ナチスの東方政策の立案と実行の中心的な存在になっていく。まずヒムラー SS長官は、ドイツ帝国に併合された東方地域、ポーランド総督領、更に1941年以降はソ連占領地を含めて、どのような入植地を建設するかをSS隊員でベルリン大学教授のコンラート・マイヤー・ヘトリンク (Konrad Meyer-Hetling) をリーダーとする研究チームを RFKDV 内に創設した。このチームが作成したのが、「東方総合計画 (Generalplan Ost)⁽¹⁸⁾」であり、これが東方ゲルマン植民帝国の青写真であった。マイヤーのチームメンバーは、農業政策、地域開発、都市計画等の専門家達で、東方地域を農業を中心とするドイツ民族の生存圏、かつゲルマン民族の繁栄と純血化する地域と捉えていた。東方総合計画の第1次案は1940年の1月に、第2次案は1941年6月に、第3次案は1942年5月に完成した。ところが東方総合計画には国家保安本部 (RSHA) が作成した別の案が存在した。RFKDV のマイヤーが作成した計画案は、東方地域の農業、地域開発、都市計画、建設、建築、財政等を包含する文字通りの総合計画であったが、国家保安本部が作成した案は、同本部の任務が元々ドイツ帝国の治安、警察、人種政策の元締めであったために、その内容は、民族政策、強制移住、植民を主対象としたものであった⁽¹⁹⁾。いずれの計画も対象となる地域は、最終計画の最大範囲で、ポーランド以東の北はバルト海から南は黒海まで、東はウラル山脈に至る広大な地域であった。ここに500万人のドイツ人入植者を頂点に、ゲルマン人入植者、さらにその下に7,000万人のスラブ人が居住することになる。ただし7,000万人のスラブ人の内、3,100万人は追放か抹殺することになっていた。ドイツ人

入植地は武装農村で、更に36カ所の防衛基地が設けられ、一度反乱が発生すれば、ここから直ちに武装警察であるSS部隊が急行して鎮圧することになっていた。更にドイツ人入植地はドイツ本国と高速鉄道とアウトバーン（自動車専用道路）で結ばれることになっていた⁽²⁰⁾。

この東方ゲルマン植民帝国建設の構想は単なる幻想でもファンタジーでもなかった。ヒトラーとナチス指導部にとっては、数百年前のドイツ騎士団の東方植民に始まり、第一次大戦時のオーバー・オストの実験を経て、最終的なナチズムの理想郷としてなんとしても実現しなければならない政治的な使命の核心であった。しかし、その実現のためには、まずソ連へ武力侵攻して、ソ連を打倒しなければならなかった。そのためには、ドイツ国防軍によるソ連軍の撃破と更にSS特別行動隊による東方ゲルマン植民帝国建設の下準備が必要であった。

第2章 対ソ連侵攻とドイツ陸軍

第1節 バルバロッサ作戦の立案と作戦準備

ヒトラーが対ソ連侵攻を決意したのは、1940年7月頃と言われている。すなわち、1940年5月イギリス軍をダンケルクで大陸から駆逐した後もイギリスの強固な対独抗戦意志に直面したヒトラーは、危険性の高い対英上陸作戦の実施に躊躇し、イギリスの大陸における唯一の希望であるソ連を打倒する事によってイギリスの継戦意志を最終的に奪う決心をしたと言うのである⁽²¹⁾。

しかし、これはヒトラーの対ソ連侵攻の決心の単なる表面的な説明に過ぎない。ヒトラーはすでに1927年刊『わが闘争』第Ⅱ巻の中で生存圏の確保とロシア・ボルシェビズム（ユダヤの世界支配の陰謀）の打倒は、ナチズムに課せられた歴史的使命であると明言しており、その生存圏を実現できる唯一の空間はヨーロッパ・ロシアであった。このヒトラーの構想は、1928年に纏められた『ヒトラー第二の書(Zweites Buch)』（未公刊）でも確認することができる⁽²²⁾。しかもドイツの東方進出は、すでに第1章で見てきたように、ドイツ人にとって数百年にもわたる壮大な夢であった。そして、その夢を実現すべきロシアの地は、世界支配を企む国際ユダヤ主義による二十世紀最大の実験とも言うべきボルシェビズムによって支配されているのである。ヒトラーにとって、ナチズムに課せられた二つの使命（生存圏の確保とロシア・ボルシェビズム、すなわちユダヤ人の打倒）を達成するために是非とも対ソ連侵攻を行う必要があった。ソ連に侵攻して、まずソ連軍を撃破してソ連国家を打倒し、ユダヤ人を殲滅して、その地に大ゲルマン植民帝国を建設しなければならないのである。

ヒトラーは1940年7月31日、南ドイツ・オーバーザルツベルクにある自分の山荘ベルクホーフにおいて国防軍首脳に対して対ソ連侵攻の必要性を説明するとともに、陸軍参謀総長フランツ・ハルダー(Franz

Halder) 上級大将に対して次の通り作戦立案の指針を示した。

「作戦目的：ロシアの国力の破砕

- 1) ドニエプル川沿いにキエフを攻撃する。
- 2) バルト諸国を攻略してモスクワ方向への攻撃を実施する。

じ後、南北から挟撃を実施する。その後、バクー油田地帯に対する作戦を実施する。その際フィンランドとトルコの参戦を誘致する。⁽²³⁾」

ヒトラーの指示を受ける約一ヶ月前の6月末に外務省から対ソ連侵攻の示唆を受けた陸軍参謀総長ハルダー上級大将は、参謀本部作戦課に対ソ連侵攻作戦の研究を開始させ、それに平行して隷下各級司令部にも対ソ連侵攻作戦の研究を実施させ意見を聴取した。その際最も卓越していた第18軍参謀長エーリヒ・マルクス(Erich Marcks)少将に対して、現職のまま参謀総長特別補佐官として作戦計画草案の立案を命じた。マルクス少将は8月5日「東方作戦計画草案」を提出した⁽²⁴⁾。一方、9月3日第1参謀次長(作戦担当)に就任したフリードリヒ・パウルス(Friedrich Paulus)中将は、10月29日参謀本部内で進められていた諸作業を総合して参謀総長に提出した。ハルダー上級大将は、提出された二案を基に11月末から12月初めに3回にわたり、第一線部隊各級司令部の参謀も召集して図上演習を実施した⁽²⁵⁾。また、各軍集団司令部に対して、各個に東方作戦の問題点について研究させた。

陸軍参謀本部の東方作戦計画最終案は、12月5日陸軍総司令官ヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ(Walter von Brauchitsch)元帥と参謀総長ハルダー上級大将からヒトラーに報告された。⁽²⁶⁾

ヒトラーは一応ハルダーの案に同意したものの、参謀本部作戦計画案とは別に国防軍最高司令部作戦部に作成させた東方作戦計画案を修正して、

12月18日、国防軍に対して対ソ連侵攻の準備を命ずる総統指令第21号「バルバロッサ事案」を発令した。この指令は対ソ連侵攻作戦の目的、各期の作戦指導等を示した重要な指令であり、その骨子は以下の通りである。

「 総統指令 第21号

1940年12月18日

ドイツ国防軍は、対英戦が終結していない場合であっても、迅速なる作戦によって、ソ連を打倒する準備を進める事（バルバロッサ作戦）。

ドイツ陸軍は、すでに占領している地域には必要最少限の兵力を残して全兵力を本目的に投入すべきである。

ドイツ空軍は、地上作戦を迅速ならしめ、敵空軍の攻撃を阻止し得る強大な戦力を持って陸軍を支援すべき事。

(中略)

1 全般企図

西部ロシアに所在するソ連陸軍主力を、数個の装甲部隊の突進によって殲滅する。広大なロシア領内での戦闘力を持った敵部隊の退却は阻止すべき事。

本作戦の到達目標は、ソ連空軍がドイツへの攻撃が不可能となるボルガ河～アルハンゲリスクを結ぶ線とし、更にここからソ連・アジア部を牽制する。

(中略)

3 各作戦の指導

(1) 陸軍

作戦予定地域は、プリピャト沼沢地によって南北に二分されるので、当該地域に各1個軍集団、計2個軍集団をもって作戦を行う。

南方の軍集団は、強大な装甲化、及び自動車化部隊をもって、

ワルシャワ付近から出撃し、白ロシアにある敵部隊を撃破する。その後、東プロイセンから出撃してレニングラード方向に作戦中の北方軍集団と協力してバルト海沿岸地域の敵部隊を撃滅する。その後、ソ連の中枢であるモスクワ攻略の作戦を継続する事。

(以下、空海軍部分、注意事項等は省略) ⁽²⁷⁾ 」

ヒトラーはこの指令で国防軍に対して、1941年5月15日までに諸作戦の準備を完了する事を命じていた⁽²⁸⁾。

この指令に基づき国防軍最高司令部及び陸軍総司令部・参謀本部は作戦準備を迅速に進めさせる為に前進指令を作成して、2月3日ハルダー上級大将はヒトラーに対して、その前進指令「バルバロッサ」(案)の報告を行った⁽²⁹⁾。ヒトラーは直ちにこれを承認し、1月31日に遡って前進指令が発令された。

陸軍総司令部指令第50号前進指令「バルバロッサ」(1月31日付)は、その後攻撃部隊が2個軍集団から3個軍集団に増強される等の数次にわたる改訂が行われたが、6月22日から開始されたバルバロッサ作戦の根幹をなす命令であるので、その骨子を示す。

「1 任務

対イギリス戦終結前にソ連に対して迅速なる打撃を加える。本作戦の重点は、数次の装甲打撃により西部ロシアにおいてソ連軍主力を殲滅し、その一部のソ連領内深部への後退を阻止する。

2 敵情

ソ連は二次に渡る防御線と河川を利用して私の侵攻を迎撃し得る。また、バルト地域及び黒海地域を海空軍基地として長期保持に努めると予想される。ソ連は緒戦が不利な場合は有力なる機甲部隊による逆襲に

よって、ドニエプル—デユナ川の線で防御を企図する可能性がある。

3 我が企図

ドイツ陸軍はプリピャチ沼沢地南北の二地域において強大なる機動部隊をもってソ連軍主力を殲滅する。南方軍集団はプリピャチ沼沢地南方において迅速な突破によってキエフ及びドニエプル川渡河点を占領し、じ後の作戦を準備する。中央軍集団はその北方において、スモレンスク方向へ突破を行い、じ後北方への方向転換により東プロイセンからレニングラード方向へ前進する。北方軍集団と協同してバルト地域のソ連軍主力を殲滅する。これらの作戦終了後モスクワへの攻勢を計画する。

4 参加各部隊の任務

a 南方軍集団

キエフ方向に攻勢を行ない、ドニエプル川以西においてソ連軍主力を殲滅し、速やかにドニエプル川渡河点を占領する。

b 中央軍集団

両翼攻撃により白ロシアにあるソ連軍を撃破してスモレンスク地域を速やかに占領する。じ後、一部をもって北方軍集団と協同してバルト地域及びレニングラード地域のソ連軍撃滅の条件を作為する。

c 北方軍集団

バルト地域のソ連軍を撃滅するとともに、バルト諸港、レニングラード、クロンシュタットを占領して、ソ連海軍の根拠地を喪失させる。

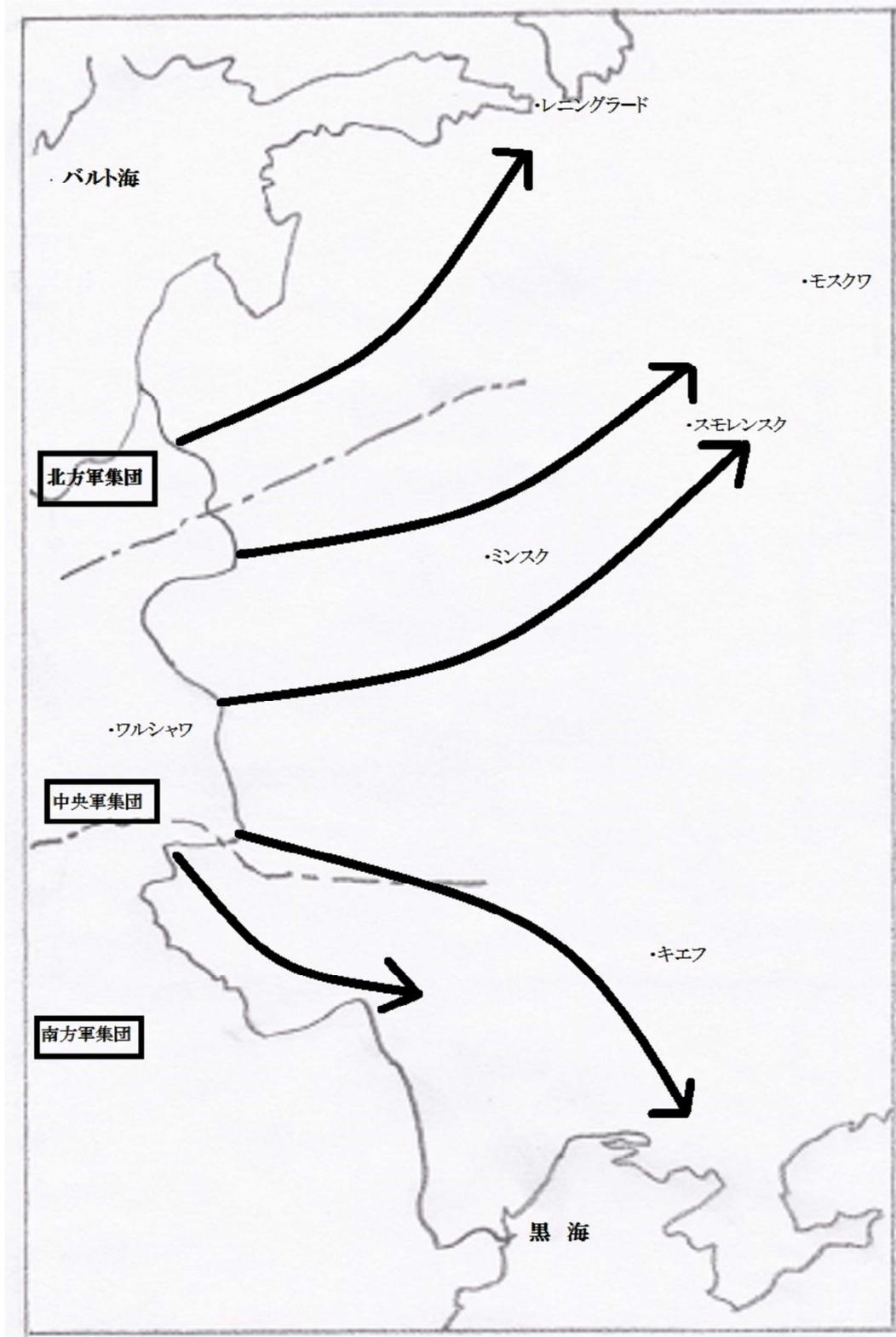
5). 6). 7). 8).

(以下省略)

(30)」

前進計画に付けられた付図は次の頁に示す通りである。

第1図：バルバロッサ作戦前進計画



(MGFA, Der Angriff, S. 245. を参考に著者作成)

北方、中央、南方の各軍集団は、この指令に基づき作戦準備を進めたが、3月27日にユーゴスラビアのベオグラードで突如発生した反ドイツ・クーデターによって親独政権が倒れ、バルバロッサ作戦の準備は大きな影響を受ける事になった。すなわち、従来から計画されていた「マリタ計画」（ギリシャ侵攻）と同時にユーゴスラビア侵攻作戦も発動する必要が生じ、それにはバルバロッサ作戦で使用すべく陸軍総司令部が控置していた戦略予備である第2軍(AOK 2)の一部をバルカン作戦の増援に充てざるを得なくなったのである⁽³¹⁾。その結果、このギリシャ、ユーゴスラビア方面の作戦が順調に進展したとしても、バルバロッサ作戦の開始は約6週間延期せざるを得なくなり、4月30日陸軍参謀総長ハルデー上級大将はヒトラーにその旨意見具申を行いヒトラーもそれに同意した⁽³²⁾。

バルカン作戦は順調に推移し、ドイツ軍はユーゴスラヴィアを占領し、ギリシャでは山岳地帯で多少苦戦はしたもののギリシャ軍とイギリス軍を撃破し、ギリシャ全域からイギリス軍を駆逐した。しかしながら、それによってバルバロッサ作戦の開始は予定より遅れ、この遅れが後々バルバロッサ作戦の成否に大きな影響を及ぼすことになる。

かくしてバルバロッサ作戦に参加するドイツ陸軍部隊の東部の集結地域への鉄道輸送は6月5日に完了し、同じくバルバロッサ作戦に参加するドイツ空軍部隊、すなわち第1、第2、第4航空艦隊も東方の発進地域に戦闘展開を完了した⁽³³⁾。6月14日、ヒトラーはベルリンの総統官邸に国防軍の高級指揮官と各軍集団及び軍の参謀長を集合させ、各軍集団の最終的な作戦準備の状況に関する報告を聞いた後⁽³⁴⁾、最終的にバルバロッサ作戦の開始日時を6月22日0300（午前3時）にすると決心した。この決定に基づきバルバロッサ作戦に参加するドイツ国防軍の大部隊は、満を持して独ソ境界線沿いの攻撃開始地域に展開して、すべての準備を完了した。

第2節 東部作戦軍の編成と作戦

1941年6月22日0300（午前3時）、ドイツの対ソ連侵攻（バルバロッサ作戦）は計画通りに開始された。0315（午前3時15分）から1時間に及ぶ砲兵による攻撃準備射撃実施後、バルト海から黒海に及ぶ1,600Kmの正面で、ドイツ空軍の3個航空艦隊に支援された3個軍集団、総計145個師団、総兵力320万人のドイツ陸軍東部作戦軍（Ostheer）は独ソ境界線（分割線）を突破して、ソ連領内への進撃を開始した⁽³⁵⁾。

ドイツ陸軍の基本的な部隊編成単位は、上級の部隊から軍集団（Heeresgruppe）＞軍（Armee）＞軍団（Korps）＞師団（Division）＞連隊（Regiment）＞大隊（Bataillon）＞中隊（Kompanie）＞小隊（Zug）＞分隊（Gruppe）の順である。装甲集団（Panzergruppe）は軍と同格であるが自隊では兵站支援の能力がなく隣接の軍の兵站支援に依存していた。そのため作戦遂行に困難を感じた陸軍総司令部は、各装甲集団を1941年秋から翌1942年の元日にかけて、逐次自前の兵站能力を有する装甲軍（Panzerarmee）に昇格させた。

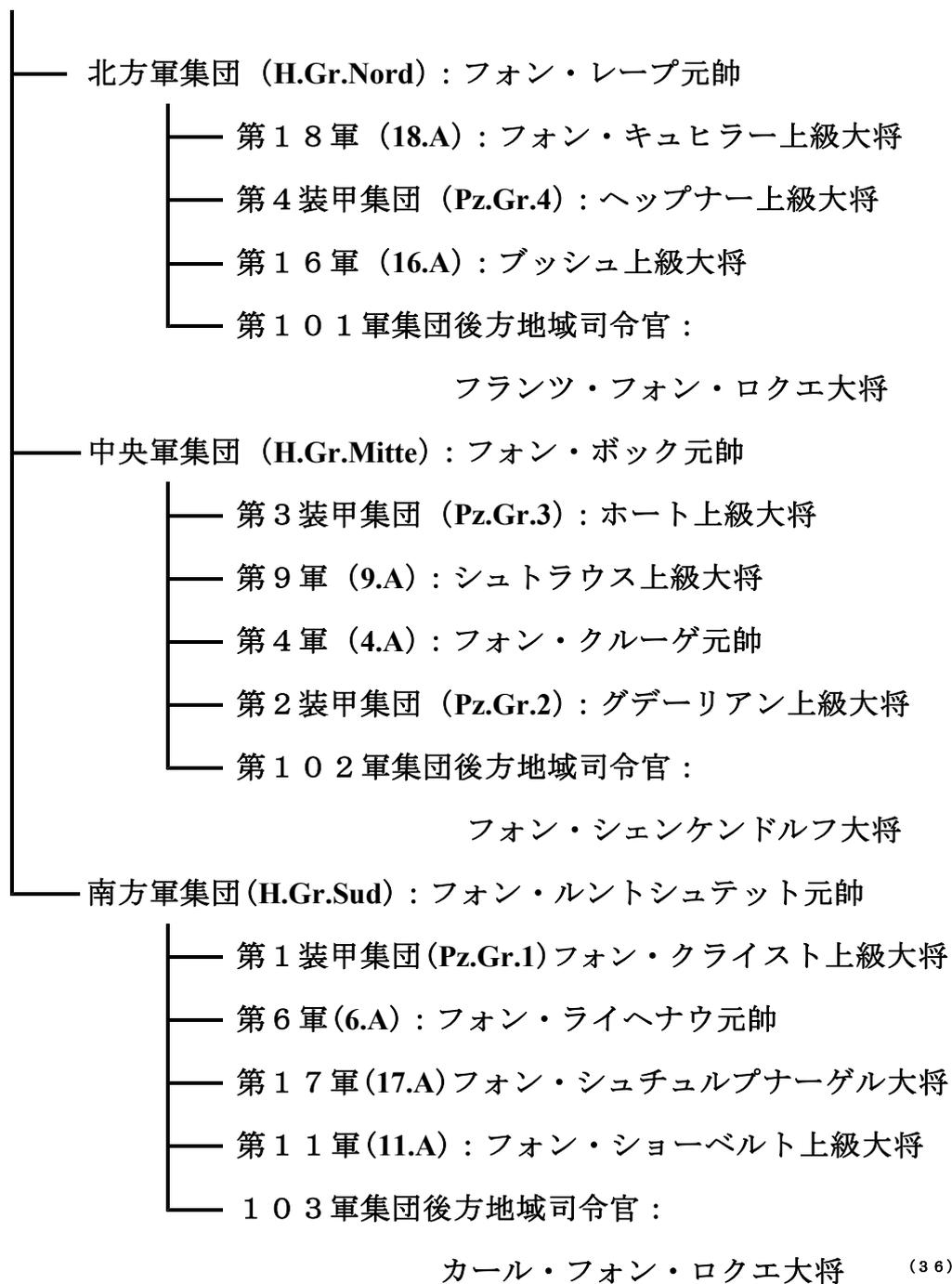
東部作戦軍の軍以上の編成と指揮系統は、次に示す通りである。

なお東部作戦軍（Ostheer）と言うのは東部戦線（ロシア戦線）に所在するドイツ陸軍部隊の総称であって、統一された部隊は存在せず、東部戦線全体を指揮する司令官も司令部も存在しなかった。つまりドイツ東部作戦軍の北方、中央、南方の3個軍集団（H.Gr.）は、それぞれ直接ドイツ本国の陸軍総司令部（OKH）・陸軍参謀本部の指揮を受けていたのである。

陸軍総司令官：フォン・ブラウヒッチュ元帥

参謀総長：ハルダー上級大将 OKH 総予備：第2軍(AOK 2)

(東部作戦軍: Ostheer)



[各装甲集団 (Pz.Gr.) は次の時期に装甲軍 (Pz.AOK) に昇格した。第1 : 11月5日、第2 : 9月末、第3・第4 : 1942年1月1日]

上記のドイツ東部作戦軍の外に、東部戦線には枢軸国同盟軍としてハンガリー軍4個旅団、ルーマニア軍2個軍が国境警備に就いていた。

ドイツ東部作戦軍の中で、南方軍集団だけは他の2個軍集団と異なりドイツ陸軍部隊の外、2個武装SS師団、ルーマニア軍を含む混成であった。特に第11軍は当初から1個ルーマニア山岳軍団及び騎兵軍団の外、ドイツ軍軍団内にも3個ルーマニア師団及び2個騎兵旅団を含み、7月12日以降は更にルーマニア2個軍及び1個軍団を指揮下に入れたので⁽³⁷⁾、指揮は一層複雑になったと思われる。

ルーマニア軍はドイツ軍に協力的で任務に忠実ではあったが、ドイツ陸軍に比し運用思想、装備とも旧式で訓練不足と実戦経験の無さから戦闘能力は低く、その為戦闘に際して過度の損害を被り士気も低下した。人員構成も下士官と有能な下級将校の不足と言う大きな問題を抱えていた。その上ルーマニア人が元々抱えているロシア人に対する恐怖感は、ソ連軍との戦闘に際してしばしばパニックを引き起こす原因になった。そもそもルーマニアが対ソ連戦に参戦した理由はベッサラビア地方の奪回であり、それが実現した後は、特にブーク川以東の作戦に対しては、消極的であり、更にその東方のドニエプル川以東の作戦には、強い抵抗感があったと言われている⁽³⁸⁾。その為、第一線でのソ連軍との苛烈な戦闘状況下での信頼性は低かった。

一方ドイツ東部作戦軍に対するソ連の西部国境沿いに展開していたソ連軍の兵力は西北、西部、西南及び南部の4个方面軍、計188個師団、総兵力450万程度であったと思われる⁽³⁹⁾。

ドイツ東部作戦軍は、作戦開始後ほぼ数日で国境付近のソ連軍を撃破し、7月初旬には、各軍集団とも旧ソ連・ポーランド国境沿いにソ連が構築した防御陣地線(スターリン・ライン)を突破した。その後、北方軍集団は、

バルト海沿岸地域を前進し、8月下旬にはレニングラード郊外に到達した。更にこれを包囲したものの、レニングラードの占領は達成できず戦闘は膠着状態に陥った⁽⁴⁰⁾。

中央軍集団はバルバロッサ作戦での攻勢戦略の主力であり、他の軍集団と違って強力な2個装甲集団が配置されて、ソ連の首都モスクワの攻略を企図していた。そこで7月中旬にはスモレンスクを占領して、モスクワへの攻撃を準備したが、ヒトラーは陸軍指導部及び東部作戦軍首脳の見解を退け、戦略攻撃目標をモスクワから、クリミア、ドネツ地域へ変更するに決した。その結果、中央軍集団の第2装甲集団を南へ旋回させ、南方軍集団の第1装甲集団とともに、キエフ東方でソ連軍南西方面軍主力を包囲殲滅した。その後、第2装甲集団の主攻撃方向を再びモスクワに指向したが、12月5日に同集団の第2装甲師団の先鋒が、モスクワ市街に数十Kmまで迫ったものの、中央軍集団は遂に寒さと補給の困難によりそれ以上の前進はできなかった⁽⁴¹⁾。

キエフ殲滅戦終了後の南方軍集団は、第11軍をもってクリミア半島の攻略に当たらせるとともに、主力部隊を南方軍集団の戦略目標であるロストフへ指向した。しかし、12月に至り第11軍は、クリミア半島の大部分は占領したもののセバストポリ要塞は遂に陥落せず、翌年の攻撃再開を待つ事になった。また、南方軍集団主力も11月末ロストフを一旦占領したもののソ連軍の反撃を支えきれずに12月初め、これを放棄した⁽⁴²⁾。

1941年末の段階でのドイツ東部作戦軍の態勢は、北方軍集団がレニングラード外縁で包囲の態勢、中央軍集団はモスクワ前面で停止、南方軍集団はクリミア半島のセバストポリとロストフの前面において極寒と補給の停止等の理由で停止していた。今度は、攻守の立場を変えてドイツ軍が、1942年の春まで続くソ連軍の冬の反攻に耐えなければならなかったのである。

第3節 東部作戦軍部隊の指揮官達

対ソ連侵攻（バルバロッサ作戦）開始時（1941年6月22日）の東部作戦軍の各部隊の指揮官は、次の通りである。

（1）北方軍集団

軍集団司令官：フォン・レープ元帥

第18軍司令官：フォン・キュヒラー上級大将

第4装甲集団司令官：ヘップナー大将

第16軍司令官：ブッシュ上級大将

第101軍集団後方地域司令官：フランツ・フォン・ロクエ大将

軍集団司令官のヴィルヘルム・リッター・フォン・レープ (Wilhelm Ritter von Leeb) 元帥（1876年～1956年）は、バイエルンの古い軍人家系の出身で、1895年にバイエルン砲兵連隊に士官候補生として入隊し、第一次大戦に参加した後1919年に反革命義勇軍に参加、その後は陸軍将校として1929年少将に1934年には大将に昇進した。1940年のフランス侵攻作戦でC軍集団司令官を務め、その功績で陸軍元帥に昇進した。フォン・レープは、バルバロッサ作戦では北方軍集団司令官として、軍集団をレニングラードまで進撃させたが、冬の到来により前進できず、ヒトラーにレニングラード地区からの後退を進言して1942年1月18日に罷免された。その後現役に復帰することはなかった⁽⁴³⁾。

第18軍司令官のゲオルク・フォン・キュヒラー (Georg von Küchler) 上級大将（1881年～1968年）は、ヘッセンの軍人家系の出身で1900年に士官候補生としてヘッセン第25野戦砲兵連隊に入隊し、騎兵に転科後、第一次大戦に参加、戦後は部隊指揮官として昇進を続けて、対ポーランド戦では第3軍司令官、西方作戦では第18軍司令官としてオランダを攻撃、バルバロッサ作戦でも引き続き第18軍を指揮した。レニング

ロードまで進撃したが頓挫、ソ連軍の反撃に翌年1月まで耐えた。フォン・レープの軍集団司令官解任によりその後任になった。1942年6月には元帥に昇進したが、1944年に作戦指導方針の意見の違いから解任された。戦後ニュルンベルク国際軍事裁判で禁固20年の判決を受け、1968年に死亡した⁽⁴⁴⁾。

第4装甲集団司令官のエーリッヒ・ヘップナー(Erich Hoepner)大将(1886年～1944年)は、フランクフルト・アン・デア・オーデルの生まれで、装甲部隊指揮官として、対ポーランド戦、対フランス戦で活躍し、バルバロッサ作戦では、第4装甲集団司令官として部隊をレニングラード近郊まで進撃させ、次いでモスクワを目指したがソ連軍の反撃で頓挫し、その責任を問われて1941年12月に罷免された。その後、国防軍内の反ヒトラー運動に参加して1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件に荷担し、同年8月8日に処刑された⁽⁴⁵⁾。

第16軍司令官のエルンスト・ブッシュ(Ernst Busch)上級大将(1885年～1945年)は、軍人家系ではなくエッセンの孤児院長の息子として生まれ、プロイセン陸軍士官学校に入学、中尉として第一次大戦に参加、第一線部隊指揮官として戦い抜き、第一次大戦時の最高勲章であるブルー・ラ・メリット勲章を受章している。戦後はワイマール期の陸軍に残留し、中隊長を振り出しに部隊指揮官と幕僚勤務を務め、その後参謀本部勤務、対ポーランド戦では大将になり、対フランス戦では第16軍司令官として、マジノ線とフランス南部を攻撃した。その功績により上級大将に昇進、バルバロッサ作戦でも引き続き第16軍を指揮してバルト海沿いに前進した。1943年には元帥に昇進して1944年まで中央軍集団を指揮したが、ソ連軍の攻勢を阻止できずに解任され、その後ノルウェー駐留軍司令官になるが、1945年イギリス軍に降伏して捕虜収容所で死亡した⁽⁴⁶⁾。

第101（北方）軍集団後方地域司令官のフランツ・フォン・ロクエ（**Franz von Roques**）歩兵大将（1877年～1967年）は、1877年ヘッセンの小都市トロイサで医者の子として生まれ、1896年ヘッセン第81歩兵連隊に2年志願兵として入隊した。ポツダム士官学校へ進み、第一次大戦では西部戦線で部隊参謀を務めた。戦後も国防軍に残り、ロクエはゼクトを見習い非政治的な将校であった。対ポーランド戦と対フランス戦で予備歩兵師団長を務め、対ソ連侵攻作戦では、北方軍集団の兵站支援を行う第101（北方）軍集団後方地域司令官に就任し1943年まで務めて退役した。戦後、軍集団後方地域司令官として戦争責任を問われたが、再審で無罪となり、故郷に帰って1967年に90歳で死亡した⁽⁴⁷⁾。

（2）中央軍集団

軍集団司令官：フォン・ボック元帥

第3装甲集団司令官：ホート上級大将

第9軍司令官：シュトラウス上級大将

第4軍司令官：フォン・クルーゲ元帥

第2装甲集団司令官：グデーリアン上級大将

第102軍集団後方地域：フォン・シェンケンドルフ大将

軍集団司令官のフェードル・フォン・ボック（**Fedor von Bock**）元帥（1880年～1945年）は、プロイセン貴族の代々軍人家系の出身で、典型的なプロイセン貴族将校である。1898年にプロイセン近衛歩兵第5連隊に士官候補生として入隊し、1912年から1919年まで参謀本部と部隊参謀を歴任し、第一次大戦では最高勲章のプール・ラ・メリート勲章を受賞し、戦後も将校として勤務して昇進を続け、1938年には第8

軍司令官としてオーストリアに進駐し、対ポーランド戦では北方軍集団を指揮し、対フランス戦では B 軍集団を指揮して元帥に昇進した。バルバロッサ作戦では中央軍集団司令官としてモスクワ攻略を目指すが失敗して解任された。1942年に南方軍集団を指揮するが、ヒトラーと意見対立して解任、退役させられた。1945年5月の空襲で死亡した⁽⁴⁸⁾。

第3装甲集団司令官のヘルマン・ホート(Hermann Hoth)上級大将(1885年～1971年)は、1885年軍医の息子として生まれ、1904年に士官候補生としてチューリングゲン歩兵連隊に入隊した。陸軍大学卒業後、第一次大戦では、東プロイセンの第8軍司令部でヒンデンブルク、ルーデンドルフの下で作戦参謀を務め、タンネンベルクでの勝利を体験した。その後大尉で参謀本部で勤務し、戦後はメッカー義勇軍で勤務した後、国防軍で勤務し、ナチス政権下でも昇進を続けた。対ポーランド戦ではフォン・ライヘナウの第10軍で第15自動車化軍団長を務め、対フランス戦でも第15自動車化軍団を指揮して、アルデンヌを突破して英仏海峡に到達した。対フランス戦後に上級大将に昇進し、バルバロッサ作戦では中央軍集団の2本の装甲部隊の楔の片方である第3装甲集団司令官としてモスクワへ突進したが、果たせなかった。その後第4装甲軍司令官として、包囲されたスタリングラードの第6軍の救出を図るが失敗する。その後、ドニエプル河の防衛に任ずるが、キエフの喪失により解任された。戦後戦犯として有罪の判決を受けて服役する。ホートも有能な装甲部隊指揮官の一人であった⁽⁴⁹⁾。

第9軍司令官のアドルフ・シュトラウス(Adolf Strauß)上級大将(1879年～1973年)は、1879年プロイセンの役人の息子として生まれ、1898年士官候補生としてニーダーザクセン第2歩兵連隊に入隊し、陸軍大学卒業後に参謀本部で勤務した。第一次大戦では部隊指揮官と参謀として勤務し、戦後は国防軍に残り、歩兵学校で勤務後、中隊長から大隊

長、連隊長等を歴任して1934年には少将に昇進した。対ポーランド戦では、第2軍団長としてモドリン要塞を攻略した。対フランス戦で第9軍司令官に任命され、その後イギリス侵攻作戦を準備するが中止され、第9軍司令官としてバルバロッサ作戦に参加し、スモレンスク、ウヤジマと進撃するが、厳冬とソ連軍の反撃に見舞われ、1942年1月にモーデル大将と交代する。1944年東方要塞司令官に任命されるが、終戦時イギリス軍の捕虜となり、マンシュタイン達とともに戦犯裁判をうけるが釈放されて故郷に帰り、1973年94歳で死亡した⁽⁵⁰⁾。

第4軍司令官のギュンター・ハンス・フォン・クルーゲ(Günter von Kluge)元帥(1882年～1944年)は、1882年ポーゼンで市民出身のプロイセン軍将校の息子として生まれ、1901年士官学校修了後、少尉としてニーダーザクセン第46砲兵連隊に勤務する。陸軍大学卒業後、参謀本部で勤務し、第一次大戦では東部戦線と西部戦線の両方で司令部参謀を務めた。戦後は国防軍に残り、順調に昇進し、対ポーランド戦と対フランス戦で第4軍を指揮し、フランス戦後元帥に昇進した。バルバロッサ作戦でも第4軍を指揮してモスクワ前面まで進撃したが、後退を余儀なくされた。しかしながら、巧みな後退指揮で解任を免れ、フォン・ボック元帥の後を襲って中央軍集団司令官に任命された。1944年7月には、フォン・ルントシュテット元帥に代わって西方総軍司令官に任命されたが、反ヒトラー派として暗殺未遂事件への関与を疑われて自殺した⁽⁵¹⁾。

第2装甲集団司令官のハインツ・グデーリアン(Heinz Guderian)上級大将(1885年～1954年)は、ドイツ陸軍の装甲部隊生みの親であり、最も有名な装甲部隊指揮官である。1935年のドイツ陸軍での最初の装甲師団創設に尽力し、1939年には装甲兵総監に就任した。対ポーランド戦では、第19装甲軍団長としてドイツ装甲部隊の威力を遺憾なく発揮し、対フランス戦でも第19装甲軍団長としてアルデンヌを突破し英仏海

峽に到達してドイツの勝利に大きく貢献した。バルバロッサ作戦では第2装甲集団司令官としてモスクワ攻略を目指して進撃するが果たせず、ヒトラーとの意見の対立から1941年12月に解任された。しかし1943年2月装甲兵総監として呼び戻されてドイツの劣勢の挽回に努力し、1944年7月には陸軍参謀総長に就任して東部戦線を指導するが、再びヒトラーと対立して1945年3月に解任された⁽⁵²⁾。

第102(中央)軍集団後方地域司令官のマックス・フォン・シェンケンドルフ(Max von Schenckendorff)歩兵大将(1875年～没年不明)は、1875年ベルリン近郊の13世紀から続く格式の高いプロイセン貴族の長男として生まれ、1894年ポーゼン第14歩兵連隊に入隊した。陸軍大学卒業後、第一次大戦では第64歩兵連隊の中隊長として戦い、戦後も部隊指揮官として勤務し、対ポーランド戦では第13国境警備隊司令官、対フランス戦では第35軍管区司令官を務め、対ソ連戦では、この部隊の司令部が第102(中央)軍集団後方地域に移行したために、シェンケンドルフ大将がその司令官に就任した。彼は1943年までこの部隊の司令官を務めた⁽⁵³⁾。

(3) 南方軍集団(H.Gr.Süd)

軍集団司令官：フォン・ルントシュテット元帥

第1装甲集団司令官：フォン・クライスト上級大将

第6軍司令官：フォン・ライヘナウ元帥

第17軍司令官：フォン・シュチュルプナーゲル大将

第11軍司令官：フォン・ショーベルト上級大将

フォン・マンシュタイン上級大将(9月以降)

第103軍集団後方地域司令官：カール・フォン・ロクエ大将

軍集団司令官のゲルト・フォン・ルントシュテット (Gerd von Rundstedt) 元帥 (1875年～1953年) は、「最後のプロイセン人」との綽名が示すとおり⁽⁵⁴⁾、古いプロイセン陸軍の伝統を受け継いだユンカー出身の正統派の将軍であった。12歳でプロイセン陸軍幼年学校に入り、士官学校、陸軍大学と進み、第一次大戦では、少佐で参謀として勤務し、戦後は参謀、師団長、軍管区司令官として勤務した。1932年には歩兵大将に昇進した。ナチス政権下でも60歳を過ぎても勤務を続け、ヒトラーもその能力を高く買い対ポーランド侵攻作戦では最重要の南方軍集団の指揮を任せ、1940年の対フランス侵攻の功績で元帥に昇進させ、バルバロッサ作戦に際しても引き続き南方軍集団の指揮を執らせた。しかし、1941年11月ヒトラーは南方軍集団の攻勢の行き詰まりを理由にフォン・ルントシュテット元帥を解任しフォン・ライヘナウ元帥をその後任にした⁽⁵⁵⁾。その後、フォン・ルントシュテット元帥は西方総軍司令官に就任し、1944年6月のノルマンディー防衛作戦、12月のアルデンヌの反攻を指揮し、1945年5月にイギリス軍の捕虜になった。戦後、西方占領地での強制労働関与の疑いでイギリス軍の戦争裁判にかけられたが病気と高齢で釈放された。しかし、フォン・ルントシュテット元帥の東部戦線での事が問題になる事はなかった⁽⁵⁶⁾。

第1装甲集団司令官のエバルト・フォン・クライスト (Ewald von Kleist) 上級大将 (1881年～1954年) は、1881年ブラウンフェルトの学者の息子として生まれた。1900年士官候補生として第1ブラウンシュバイク野砲兵連隊に入隊したが、騎兵に転科して第一次大戦では軽騎兵連隊で戦った。戦後は装甲部隊の育成に尽力し、1940年の対フランス戦では装甲軍団を指揮してアルデンヌを突破し勇名を馳せた。1941年4月のユーゴスラビア侵攻作戦後、バルバロッサ作戦では南方軍集団唯一の装甲集団を指揮して軍集団の突進力の中心となった。1942年のドイ

ツ軍二度目の攻勢ではA軍集団司令官としてコーカサスへの攻勢を指揮し、スターリングラード戦の後、1944年まで東部戦線で指揮を執った。戦後ユーゴスラビアでの戦争裁判後ソ連に引き渡され、1954年にソ連抑留中に死亡した⁽⁶⁷⁾。

第6軍司令官ヴァルター・フォン・ライヘナウ(Walter von Reichenau)元帥(1884年～1942年)は、1884年バーデンの陸軍中将の息子として生まれ、ギムナジウム卒業後、1903年士官候補生としてベルリンの第1近衛野砲兵連隊に入隊し、第一次大戦では、主に東部戦線で部隊参謀として勤務した。戦後も部隊参謀として勤務したが、ワイマール共和国時代からヒトラーとナチ党を支持した数少ない国防軍高級将校の一人であり、ヒトラーの政権獲得直後の1933年2月1日から国防大臣フォン・ブロンベルク元帥の下で官房長を努めた。1934年6月30日のレーム事件に際しても一貫してヒトラーを支持し、1935年には中將に昇進して第7軍管区司令官になり、SSに対して軍事訓練を施した。また、フォン・ライヘナウは国防軍の三軍統合司令部の設置にも熱心で、それは1938年に国防軍最高司令部(OKW)として実現するが、やがてカイテル元帥を長とするヒトラー崇拜の個人幕僚部になる。フォン・ライヘナウ自身はナチスへの貢献にもかかわらず要職に就いたわけではないが、第二次大戦の勃発とともに第10軍司令官としてポーランドへ侵攻し、フランス侵攻では第6軍司令官となり元帥に昇進した。バルバロッサ作戦では引続き第6軍司令官として出陣するが、1941年11月フォン・ルントシュテット元帥解任後ようやく元帥職である南方軍集団司令官に就任した。しかし僅か2カ月後に病死した⁽⁶⁸⁾。対ソ連侵攻でナチズムに深く関与したフォン・ライヘナウ元帥を司令官に頂く第6軍が軍事作戦のみならずヒトラーのイデオロギー戦争にも深く関わった事は想像に難くない。

第17軍司令官のカール・ハインリヒ・フォン・シュチュルプナーゲル

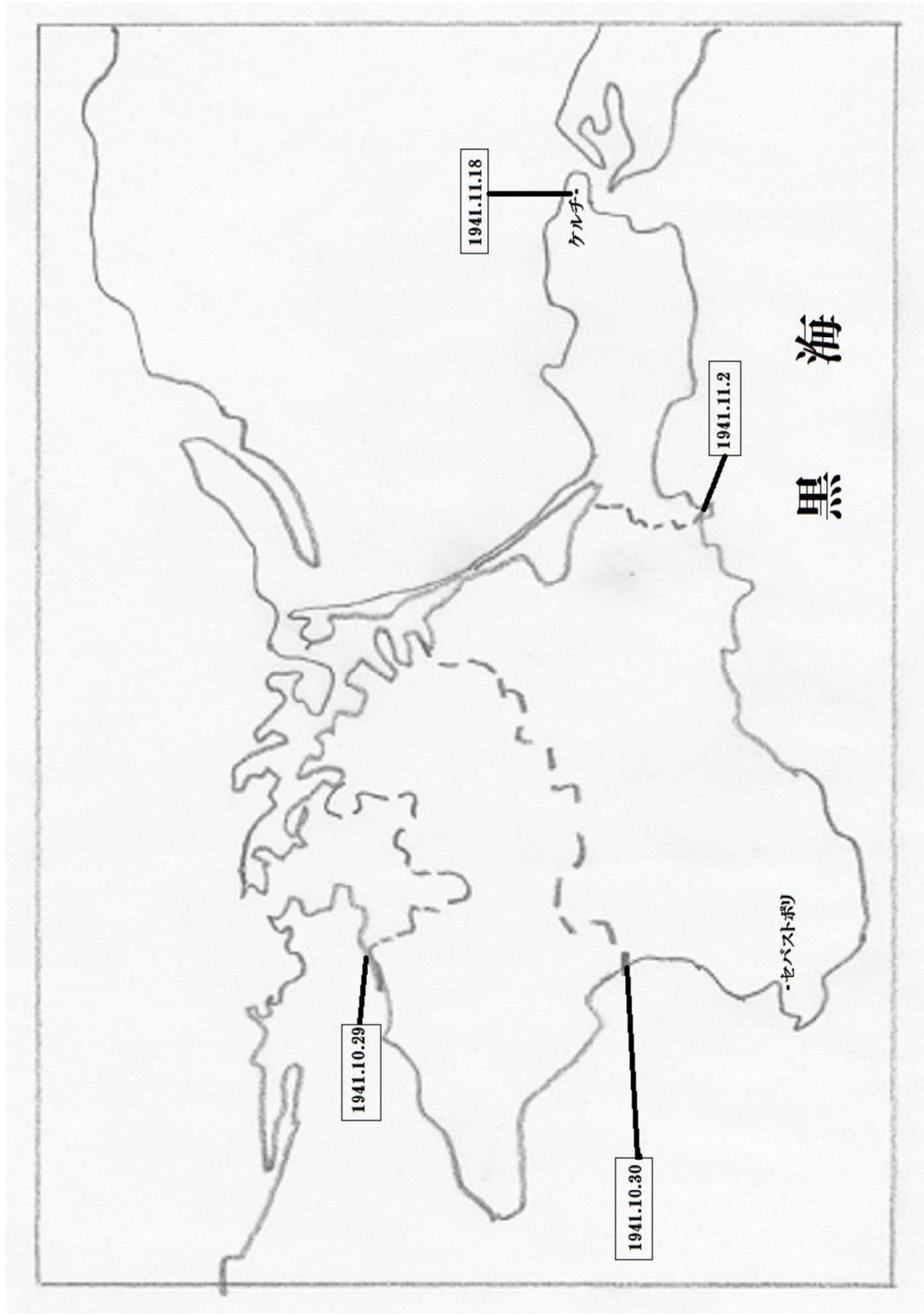
(Karl Heinrich von Stuelpnagel)大将(1886年～1944年)は、1938年から1940年まで陸軍参謀本部に勤務した後、対フランス休戦委員会委員を務めバルバロッサ作戦では1941年10月まで第17軍を指揮した。1942年2月に再びフランスへ戻り軍政司令官に就任する。フォン・シュチュルプナーゲル大将はヒトラー政権成立後の早い時期からナチズムに対して批判的で1944年の7月20日事件ではフランスで大きな役割を果たすが、事件失敗後民族裁判所による有罪判決を受けて処刑された⁽⁵⁹⁾。

第11軍司令官のオイゲン・リッター・フォン・ショーベルト(Eugen Ritter von Schobert)上級大将(1883年～1941年)は、バルバロッサ作戦準備期から第11軍の指揮を執り、作戦開始後、国境での会戦、スターリン・ライン突破、キエフ包囲戦を指導したが、9月12日シュトルヒ機で前線視察中に地雷原に不時着して爆発、死亡した。その為に第56装甲軍団長のフォン・マンシュタイン上級大将が第11軍の指揮を執る事になった⁽⁶⁰⁾。

エーリヒ・フォン・マンシュタイン(Erich von Manstein)上級大将(1887年～1973年)は古くからのプロイセン軍人名家出身の参謀将校で、12歳でプロイセン陸軍幼年学校に入学して士官学校に進み、18歳でプロイセン第3近衛歩兵連隊の士官候補生となり、第一次大戦には連隊付中尉として参加、東部戦線で重傷を負った。終戦時は第213歩兵師団参謀として勤務し、戦後は、いくつかの部隊で参謀と指揮官として勤務し、ナチス政権下では軍管区参謀長等として勤務して昇進を続け、1938年には中将で第18歩兵師団長を務め、対ポーランド戦ではフォン・ルントシュテットの南方軍集団の参謀長となり、1940年の対フランス侵攻作戦準備期のA軍集団参謀長時代、アルデンヌ地方を突破する有名な「マンシュタイン計画」を立案してヒトラーに注目された。バルバロッサ作戦で

は北方軍集団第4装甲集団第56装甲軍団長としてレニングラードに向けて進撃中であったが、9月12日に前述の通り戦死したフォン・ショーベルト上級大将の後任として第11軍司令官に就任した。この時ヒトラーが南方軍集団に示していた戦略目標は、ドネツ地域、クリミア半島及びロストフであった。その為マンシュタインの第11軍も1個軍団(第54軍団)をもってペレコプ地峡の突破に当らせ、軍主力をもってドネツ、ロストフ方向への攻勢を実施した。しかしながらクリミア半島のソ連軍の抵抗は激しく、その為10月初めに第11軍は軍の全力を挙げてクリミア攻略に当たる事になった⁽⁶¹⁾。

第2図：クリミア半島の攻略



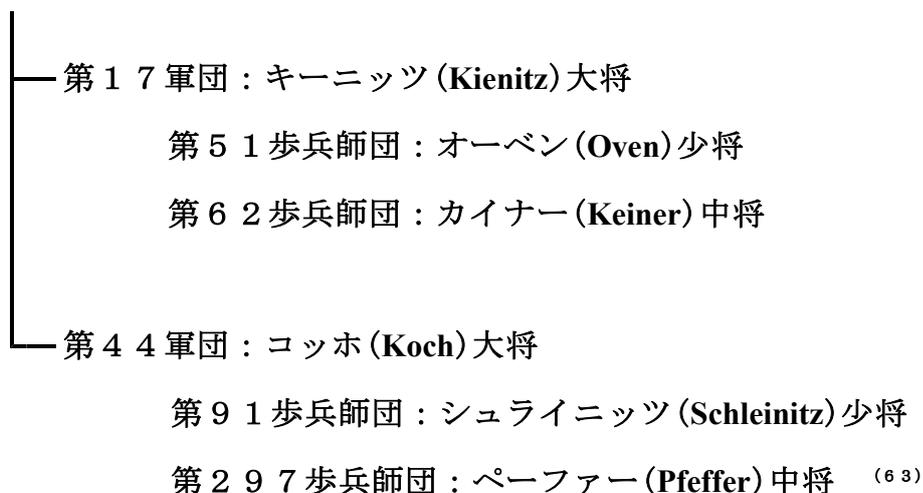
(MGFA, Der Angriff, Beiheft Nr.14. を参考に著者作成)

第11軍は改編された3個軍団（第30，42，54軍団）及びルーマニア山岳軍団をもってクリミア半島のソ連軍主力を駆逐し、11月中旬にはセバストポリ要塞地域を除く全てを占領した。12月中旬から軍主力をもってセバストポリ要塞に対する第1次攻撃を開始したが、冬将軍が災いして遂に陥落させる事はできなかった。その間、クリミア東部ケルチ半島に対するソ連軍の反攻が開始され、1個師団でケルチ防衛に当たっていた第42軍団長シュポネック中将は、ソ連軍による退路遮断を恐れ独断で後退し、その結果罷免のうえ軍法会議で有罪となった。第11軍は翌1942年5月にケルチ半島を奪回し、6月第2次セバストポリ要塞攻撃を開始し超重砲の支援を受けて7月初めに陥落させ、第11軍はようやくクリミア半島を完全に制圧した。マンシュタインは、その功により元帥に昇進した。その後8月のレニングラードへの攻撃、ドン軍集団司令官としてスターリングラードの救出作戦、1943年のハリコフ及びクルスク戦、更にドニエプル川への南方軍集団の後退作戦を指揮したが、1944年3月ヒトラーとの統帥上の意見対立から軍集団司令官を罷免され再び現役に復帰する事はなかった⁽⁶²⁾。

エーリヒ・フォン・マンシュタイン元帥は、数百年続くプロイセン貴族軍人家系出身の正統派の軍人であり、作戦遂行能力、戦歴から言ってもグデーリアン上級大将、ロンメル元帥と並ぶ第二次大戦におけるドイツ陸軍を代表する名将の一人に数えられている。その栄光に包まれたフォン・マンシュタイン元帥の指揮した第11軍と早くからヒトラーとナチスを支持し親ナチス将軍の筆頭に数えられたフォン・ライヘナウ元帥が指揮した第6軍が、戦線後方で忌まわしいユダヤ人殺戮を行ったSS特別行動隊との関係を考える上で焦点になってくる。

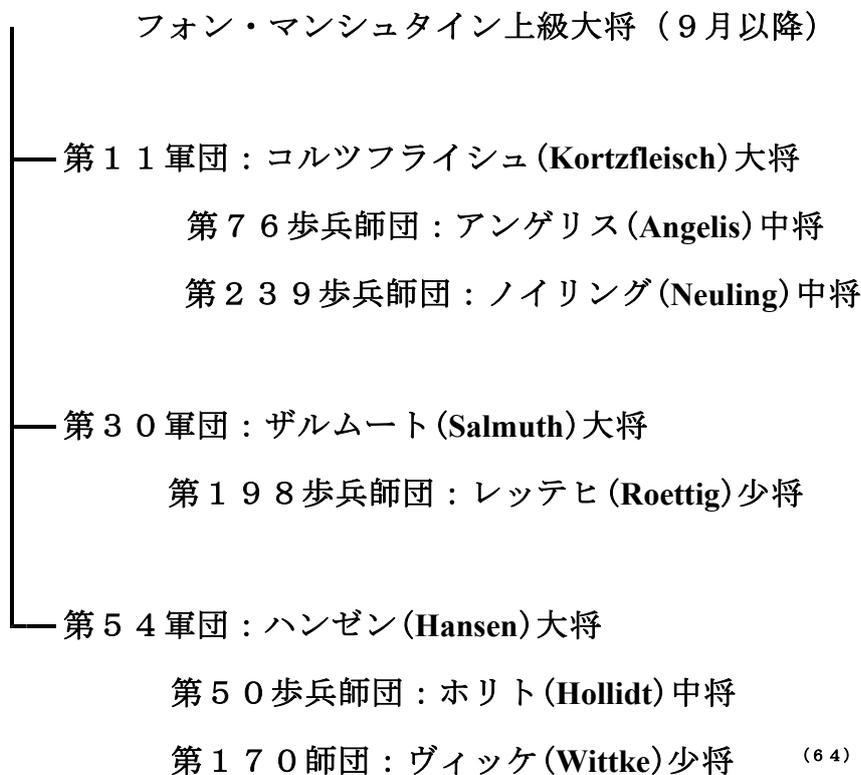
開戦時の第6軍と第11軍の編成は次の通りである。

第6軍：フォン・ライヘナウ元帥



開戦後、陸軍総司令部 (OKH) の予備であった第51軍団：ハンス・ラインハルト (Hans Reinhard) 大将が第6軍に編入された。

第11軍：フォン・ショーベルト上級大将



第103（南方）軍集団後方地域司令官のカール・フォン・ロクエ(Karl von Roques)歩兵大将（1880年～1949年）は、1880年フランクフルト・アム・マインで、1685年フランスからドイツに亡命してきた貴族で代々軍人の家系に生まれた。彼は1899年に第83歩兵連隊に士官候補生として入隊した。陸軍大学卒業後参謀本部に勤務し、第一次大戦では西部戦線で軍団、師団の参謀を務め、戦後は国防省に勤務したが、1933年に予備役に編入された。しかしながら1939年9月の対ポーランド戦で、中将の第142歩兵師団長として動員され、対フランス戦では第3軍管区所属となり、対ソ連戦では、同軍管区から編成された第103（南方）軍集団後方地域司令官に就任して1942年まで務めた。戦後はニュルンベルク国際軍事裁判で戦犯として追及されたが、重病のために釈放された直後に死亡した⁽⁶⁵⁾。

これまで見てきた様に東部作戦軍の軍集団司令官や軍司令官（軍集団後方地域司令官を含む）級の高級指揮官達は、18名中12名までがプロイセンを始めとするドイツ邦国の貴族で代々軍人の家系の出身である。そして、その全員が10代で陸軍に入隊して、その伝統の下で数十年を軍で勤務し教育と訓練を受けてきた。また第101軍集団後方地域司令官及び第103軍集団後方地域司令官の両フォン・ロクエ大将は、共に17世紀にフランスで迫害されてプロイセンに逃れてきたユグノー教徒の子孫であるが、自分達を受け入れてくれたプロイセンに報いるために代々軍人として忠節を尽くしてきた。つまり彼らはヒトラーやナチス指導者とは全く異なる出自、社会階層、経歴の持ち主であり、第6軍司令官のフォン・ライヘナウ元帥を特殊な例外とすれば、彼らは、大衆に基盤を置く現状変革の政治運動であったナチスの政治イデオロギーには共鳴するはずのない人々であった。この事を前提として、彼らの東部戦線での行動、態度、更にSS

特別行動隊との関係を考えていく必要がある。

第3章 ソ連占領地

第1節 占領政策

東部作戦軍は、6月22日の攻撃開始以来、半年間で約900Kmソ連領内を前進したが、その結果東部作戦軍は広大な地域を占領した。東部作戦軍の作戦地域を含むこの占領地は、次の三つのカテゴリーに分けられた。

- 1) 隣接国あるいはドイツ本国の行政区に編入された地域
- 2) 東方占領省の管轄下に新設された特別民政行政区である帝国全権委員領（ライヒスコミッサリアート：Reichskommissariat）に編入された地域
- 3) ドイツ国防軍の軍政下の地域（東部作戦軍作戦地域）⁽⁶⁶⁾

ソ連占領地の区分は次の頁の「第3図：ソ連占領地区分」に示した通りである。

1) に該当するのは、占領地の西端の地域でビャリストック (Bialystok)、ガリチア (Galizien)、ベッサラビア (Bessarabien) 及びトランスニストリア (Transnistrien) で、ビャリストックは8月1日に東プロイセン領へ、ガリチアは8月1日にポーランド総督領へ、ベッサラビアは7月27日に、トランスニストリアは8月19日に共にルーマニア領に編入され、それぞれの国の領土の一部となり、通常の行政が実施された⁽⁶⁷⁾。

第3図：ソ連占領地区分



(MGFA, Der Angriff, Beiheft Nr. 27. を参考に著者作成)

2) は、アルフレート・ローゼンベルクを担当大臣として東方占領地域を統治するために設立された東方占領省の指揮下に新たに設けられた民政行政区である帝国全権委員領（ライヒスコミッサリアート：**Reichskommissariat**）に編入された地域で、ライヒスコミッサリアート・オストラント（**Reichskommissariat Ostland**）〔帝国全権委員ヒンリヒ・ローゼ（**Hinrich Lohse**）〕とライヒスコミッサリアート・ウクライナ（**Reichskommissariat Ukraine**）〔帝国全権委員エーリヒ・コッホ（**Erich Koch**）〕の二つが設立された。オストラントは更に四つの支行政区：白ロシア（9月1日成立）、リトアニア（7月25日～8月1日）、ラトビア（9月1日）及びエストニア（12月5日）に分けられ、ウクライナは、ボルヒニア・ポドリア（9月1日）、ニコライエフ（10月20日）、ジトミール（10月20日）、キエフ（10月20日）、ドニエプルペトロスク及びタウリア（11月15日）の六つの支行政区に分けられた。ただこれらの地域の中で、白ロシアについてはベレジナ東方地域が、ウクライナについてはハリコフ地域が、軍事上の重要性からライヒスコミッサリアートへは移管されずに国防軍の軍政地域に残された。ローゼンベルク東方占領大臣は、更にライヒスコミッサリアート・モスクワとティフリスの二つを、更にウクライナには八つの支行政区の設立を計画していたが遂に実現しなかった⁽⁶⁸⁾。これらの東方占領省指揮下の帝国全権委員領（ライヒスコミッサリアート：**Reichskommissariat**）こそ、東方全般計画によって建設される事になっていた東方ゲルマン植民帝国の基礎をなすものであったが、帝国全権委員ローゼとコッホには、その前にやらなければならない仕事が山積していた。

東方占領大臣に任命されたアルフレート・ローゼンベルクは、バルト三国の一つエストニア出身のいわゆるバルト・ドイツ人で、ナチズムの理論家としてヒトラーの運動に1919年の初期の段階から参加していた。反

ユダヤ主義の論客として有名で、1930年にはナチズムの理論的なバイブルとなる『20世紀の神話』を出版し、ナチ党の国会議員として活躍したが、第二次大戦が始まってからは、ほとんど出番がなかった。しかし、ドイツの対ソ連侵攻の計画が進められるに及んで、彼がバルト・ドイツ人である事が考慮されて東方占領大臣に任命された。

ローゼンベルクは、彼なりに将来の東方地域の構想を抱いていた。それは、ソ連を大ロシア、白ロシア、バルト地域、ウクライナ（クリミアを含む）、ドン地域、コーカサス、中央アジア、トルキスタンの七つに分けて統治し、ユダヤ・ボルシェビズムの排除と広域経済圏の設立によって大ロシアの弱体化を図るものであった。彼は早い段階から、国防軍、軍需省、経済省、四カ年計画委員会、宣伝省等の関係部門との調整を開始し、対ソ連開戦時にはすでに体制を整えていた。そして開戦後まず行ったのがライヒスコミサリアート・オストラントとウクライナの創設である。それは9月1日に実現した。その際与えた任務は、ドイツ本国への食料・原料の供給とドイツの戦争遂行への協力であったが、彼の指揮下の帝国全権委員（ライヒスコミッサール）達はそれでは済まなかった。特にウクライナの帝国全権委員（ライヒスコミッサール・ウクライナ）のエーリヒ・コッホは、ローゼンベルクと鋭く対立して、ウクライナに独善的で傲慢な独裁者として君臨し、ユダヤ人の殲滅、住民の迫害、資源、食料の収奪、労働者のドイツへの強制連行（東方労働者：Ostarbeiter）等の残忍で過酷な政策を容赦なく押し進めた⁽⁶⁹⁾。

第2節 軍政組織

前節の3)のドイツ国防軍軍政地域とは、ドイツ国防軍(陸軍)が直接統治し、そこで部隊が作戦行動を取り、それを支援する兵站活動を行い、治安維持と住民統治の全責任を負う地域で、この地域の行政、司法の全権限を軍が持っていた。この地域は言い換えれば東部作戦軍(Ostheer)の作戦地域(Operationsgebiet)であり、まず北方、中央、南方の三つの軍集団の作戦地域に分けられ、各軍集団の作戦地域は、前方の戦闘地域(Gefechtsgebiet)と後方の後方地域(Rückwärtiges Gebiet)に分けられていた。前方の戦闘地域は、軍団と師団以下の部隊の作戦地域であり、後方地域は、軍後方地域(Rückwärtiges Armeegebiet)とその後方に位置する軍集団後方地域(Rückwärtiges Heeresgebiet)に分けられて各軍と軍集団に対して後方支援(兵站支援、後方連絡線の維持・確保、治安維持)を実施した。軍後方地域(Rückwärtiges Armeegebiet)は、師団長相当の軍後方地域司令官(Kommandant des rückwärtigen Armeegebietes)を長とし、三ケタ番号を付してKorückと呼称され(例えば第11軍に配属されたのは、Korück 553)、配属先の軍司令官の指揮下に置かれた⁽⁷⁰⁾。

軍集団後方地域(Rückwärtiges Heeresgebiet)は、軍団長に相当する軍集団後方地域司令官(Befehlhaber des rückwärtigen Heeresgebietes)を長とする部隊で、軍集団司令官の指揮下に置かれた。⁽⁷¹⁾軍集団後方地域も当初、三ケタ番号を付して(北方-101、中央-102、南方-103)呼称されていたが、対ソ連開戦後に北方、中央、南方軍集団後方地域司令官(Befehlhaber des rückwärtigen Heeresgebiete Nord, Mitte, Süd)に改称された⁽⁷²⁾。

各軍集団後方地域司令官は、陸軍兵站総監(Generalquartiermeister des Heeres)エドアルト・ヴァグナー(Eduard Wagner)少将の統制下に置かれていた。軍集団後方地域内には、上級地区司令部(Oberfeldkommandanturen)

とその指揮下に地区司令部(Feldkommandanturen)が置かれて占領地での軍政業務を担当した。⁽⁷³⁾更に各軍集団後方地域には地域内の治安維持の為に3個の警備師団(Sicherungsdvision)が配置されていた⁽⁷⁴⁾。

各軍集団後方地域に配置された警備師団は以下の通りである。

北方軍集団後方地域司令官：フランツ・フォン・ロクエ大将

第207警備師団：師団長ティーデマン(Tiedemann)中将

第281警備師団：師団長バイヤー(Bayer)中将

第285警備師団：師団長フォン・ポルトー(von Polto)少将

中央軍集団後方地域司令官：マックス・フォン・シェンケンドルフ大将

第221警備師団：師団長プルークバイル(Pflugbeil)中将

第286警備師団：師団長ミューラー(Müller)中将

第403警備師団：師団長フォン・ディトフルト(von Ditzfurth)少将

南方軍集団後方地域司令官：カール・フォン・ロクエ大将

第213警備師団：師団長ド・オム・デ・クビエ

(del'homme de Courbiere) 中将

第444警備師団：師団長ルスブルム(Russwurm)中将

第454警備師団：師団長クランツ(Kranz)少将 ⁽⁷⁵⁾

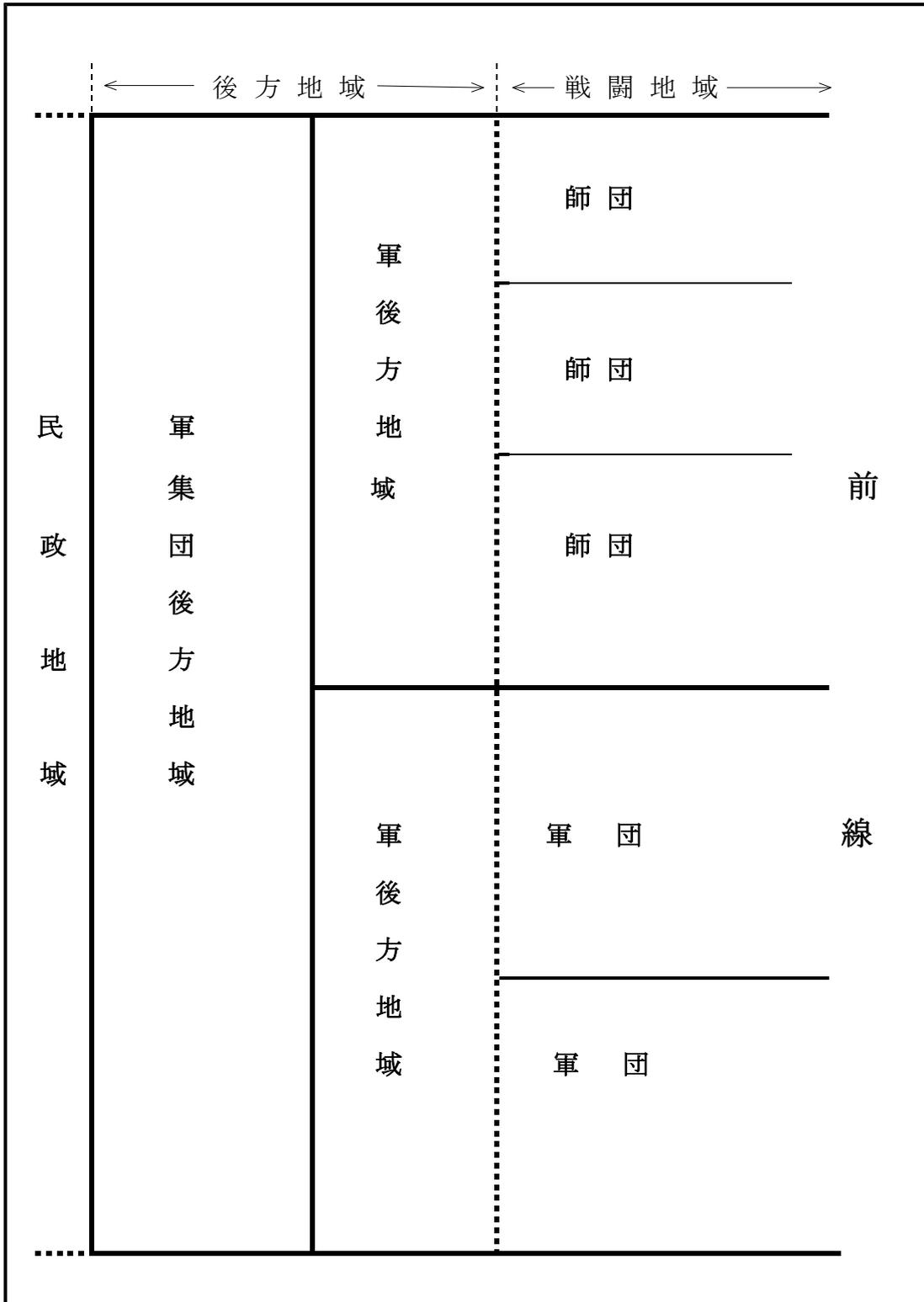
これらの警備師団が軍集団後方地域において直接、治安の維持、後方交通路(道路、鉄道等)の安全確保、住民対策に当たった。やがてソ連側のパルチザン活動が始まると対パルチザン戦を実施したが、ドイツ側の兵力不足は否めず、それを補う為に各警備師団には次の様にドイツ警察(秩序警察)大隊が配属されて治安維持活動にあたった。

第 2 0 7 警備師団：第 1 1 2 警察大隊
第 2 8 1 警備師団：第 1 3 2 警察大隊
第 2 8 5 警備師団：第 6 1 警察大隊
第 2 2 1 警備師団：第 9 1 警察大隊
第 2 8 6 警備師団：第 1 3 4 警察大隊
第 4 0 3 警備師団：第 1 1 1 警察大隊
第 2 1 3 警備師団：第 3 1 8 警察大隊
第 4 4 4 警備師団：第 3 1 1 警察大隊
第 4 5 4 警備師団：第 8 2 警察大隊 ⁽⁷⁶⁾

ドイツ陸軍警備師団とドイツ秩序警察大隊は、後方地域での対パルチザン戦、治安及び住民対策で、やがて軍野戦憲兵隊、秘密野戦警察、SS特別行動隊との協力、あるいは共同作戦を実施するようになった。

現在、ドイツの制服通常警察である秩序警察(Orpo)のソ連占領地でのユダヤ人や一般住民殺害等の犯罪について、いくつかの研究結果が公刊され、更なる研究が進みつつあるが、本論文では、研究の主題はドイツ陸軍とSS特別行動隊との関係、及びドイツ陸軍のユダヤ人殺害への関与に関するものなので、研究対象はドイツ陸軍警備師団に止め、ここでは扱わない。

第4図：ドイツ陸軍作戦地域区分



(Handbook on German Military Forces, S. 44. を参考に著者作成)

第3節 パルチザン戦

ドイツ軍のソ連への侵攻に対して、ソ連側は正規軍（ソ連軍）以外の武装小集団による占領軍に対する抵抗や小部隊による襲撃、破壊等による後方攪乱等の不正規戦を繰り広げた。これがゲリラ戦であり、ソ連、東欧地域では、このゲリラ実施部隊はパルチザンと呼ばれた。ドイツ軍侵攻の初期にパルチザン戦を展開したのは、ドイツ軍に撃破されたソ連軍の残存部隊とパラシュートで後方地域に降下して潜入した特別部隊、更に夜間浸透潜入したパルチザン部隊であった⁽⁷⁷⁾。

独ソ戦初期、ドイツ軍に撃破されたソ連軍部隊は膨大な数の捕虜を出したが、残りは様々な単位の部隊が武装したままドイツ軍の後方地域に取り残される結果となった。彼らは、各地域でそれぞれの指揮官の指揮で後方地域のドイツ軍兵站部隊を襲撃したり、施設を攻撃した。一方ソ連軍司令部から派遣されてパラシュート降下等でドイツ軍後方地域に侵入した6名～8名から成る特別部隊は、あらかじめ計画したドイツ軍の兵站、鉄道、トンネル、橋梁、道路、通信線、パイプライン等を攻撃し破壊し、更に重要施設を爆破してドイツ軍と住民にパニックを起こさせた。三つ目の部隊は、1部隊が数十名から成るパルチザン部隊で、夜間にドイツ軍占領地域に浸透潜入して破壊工作のみならず住民工作を行い、情報網を組織してドイツ軍への協力者を通報させ、それらを殺害した。この部隊は地域のソヴィエト共産党の指揮下で活動した。この部隊は、特にドイツ東部作戦軍北方軍集団作戦地域で活発に活動した⁽⁷⁸⁾。

やがてパルチザン部隊は、ソヴィエト共産党を最高指導部にしてソ連軍司令部とNKWD（内務人民委員部）の指導下に統一組織化されてドイツ軍占領地域での破壊活動を一層激化させていく。その中核部隊が、パルチザン戦闘大隊とパルチザン殲滅大隊である。一方ドイツ軍占領地の各地域では、ソヴィエト共産党の指令によって現地住民で編成されたパルチザン

部隊とは別にドイツの過酷な占領政策とユダヤ人殺戮に反発して自発的に組織された現地住民であるロシア人、白ロシア人、更にユダヤ人によるパルチザンも存在し、これらの部隊は主に森林地帯に潜んで破壊活動を行った。これらの部隊は主にドイツ東部作戦軍中央軍集団作戦地域内の白ロシア、ウクライナ北部で活発に活動した⁽⁷⁹⁾。これらのパルチザンも、開戦数ヶ月後には次第にソヴィエト共産党の地方組織の指導下に統一されてドイツ占領軍に対する組織的な破壊、妨害活動を展開していった。

パルチザン活動の第2段階では、統一組織化された各種、各様のパルチザン部隊が各地域でソ連軍の作戦と連携して、中央のソヴィエト共産党内に設けられたパルチザン活動本部の統一指揮下で、ドイツ軍後方地域で、交通・通信の遮断、鉄道、道路、橋梁、トンネル、駅、港、飛行場の破壊による遮断、弾薬、燃料、補給品の破壊、焼尽、司令部の破壊、ドイツ軍の指揮官の暗殺、ドイツ軍将兵の殺害等の作戦を展開して行くことになった。その際、ドイツ軍占領地域の住民に対する宣伝工作、更に対独協力組織、協力者の破壊、殺害も積極的に行った⁽⁸⁰⁾。

このようなパルチザン活動の激化によって、ドイツ軍占領地域では、後方地域にある補給・兵站施設が襲撃、破壊され、ドイツ軍人が殺傷され、補給幹線が脅かされ、通信が遮断される事態が頻発し、それによってドイツ軍の第一線戦闘部隊への支援活動に支障を来すようになり、その結果第一線部隊の戦闘力の維持に影響が出てきた。その為ドイツ占領軍にとってパルチザンを討伐し、後方地域の治安維持、兵站活動の安全を確保する事は最優先課題であった。その任務は軍集団後方地域では警備師団と警察部隊が、軍後方地域では後方地域部隊が遂行したが常に兵力不足に悩まされた。その為、ドイツ警察やSS等の部隊、現地の対独協力者、自警団等のあらゆる組織を総動員せざるを得ず、これらとの共同行動がドイツ軍自身のユダヤ人や一般住民の殺害へと繋がっていく事になった⁽⁸¹⁾。

第4章 国家保安本部とSS特別行動隊

第1節 国家保安本部の設立

ドイツの対ソ連侵攻において、ナチ・イデオロギー（反ユダヤ主義）実現の為の政治戦争を遂行したSS特別行動隊を指揮し、軍事作戦を遂行した東部作戦軍にとっての陸軍総司令部・参謀本部に当たる中枢機関が国家保安本部（RSHA:Reichssicherheitshauptamt）である。国家保安本部は1939年9月27日にSS大将ラインハルト・ハイドリヒの下に、保安警察とSS保安情報部（SD:SS-Sicherheitsdienst）〔以下SDと略する〕から成るナチ党と国家の混成組織として設立された。国家保安本部の組織は、次の通りである。

保安警察・保安情報部長官：ハイドリヒSS大将

- 第I局（総務・法務）：ベストSS少将〔国家警察，SD混成〕
- 第II局（思想調査）：ジックスSS大佐〔SD要員〕
- 第III局（国内情報）：オーレンドルフSS大佐〔SD要員〕
- 第IV局（秘密国家警察）：ミュラーSS少将〔国家警察官〕
- 第V局（刑事警察）：ネーベSS少将〔国家警察官〕
- 第VI局（国外情報）：ヨストSS少将〔SD要員〕⁽⁸²⁾

国家保安本部内の党、国家機関の別は構成人員から明かな様に、第I局が中間で、第II，III，VI局が党機関、第IV，V局が国家機関であった⁽⁸³⁾。この様に複雑な組織構成はSSを始めとするドイツ第三帝国内のナチ党に由来する諸機関に共通の物で、国家における位置付けを曖昧なものとしている。この事を理解する為には、SSの発展過程、SSと警察の関係、更にSDの発展過程、SDと国家警察、特に秘密国家警察(Gestapo)との関係を明らかにする必要がある。

ナチ親衛隊(SS:Schutzstaffel)は、1923年11月のミュンヘン一揆失敗後、再びナチ党内の支配権を確立する必要があったアドルフ・ヒトラーが、1925年4月にユリウス・シュレック(Julius Schreck)の下に自分だけに忠誠を誓う身辺警護隊(8名)の編成を命じた事に始まる。SSは、1929年1月に新隊長ハインリヒ・ヒムラーの指揮下に280名まで成長し、1930年のベルリンSA(突撃隊)による反ヒトラー暴動に際してヒトラー個人の警護隊からナチ党内の警察としての地位を獲得した。1933年1月のヒトラー政権成立後、1934年6月のレーム事件(SAの粛清)に際しては、SA幹部の粛正に中心的役割を果たしたSSは、ナチ党内で完全な独立組織として大きく飛躍する事になった。

ナチ国家において国家の敵を撃滅するためには警察を手中にする必要性を痛感していたSS長官ヒムラーは、SSによる警察への浸透を強化し、1936年6月17日遂にSS長官兼ドイツ警察長官として全警察組織を掌握するに至った。しかし、これでSSと警察が融合・統一された訳ではなかった。基本的には、SS高級将校が警察の重要ポストに就くか、SSにとって信頼に足る警察幹部をSSに入隊させる事によってSSが警察を吸収しその支配を進めて行ったのである⁽⁸⁴⁾。

ドイツ警察はヒムラーの指揮下に秩序警察(Orpo:Ordnungspolizei)と保安警察(Sipo:Sicherheitspolizei)に再編成された。秩序警察(Orpo)は警察大将ダリュージェの指揮下に通常の制服警察、行政警察等をもって構成され、保安警察(Sipo)はSS中将ハイドリヒの下に秘密国家警察(Gestapo)と刑事警察(Kripo)で組織された。すでに1931年以来SD長官であったハイドリヒは、保安警察とSDの長官を兼任する事になった⁽⁸⁵⁾。

SDは、本来1931年にIc-Dienstと言う名称で設立されたSSの情報機関で、ナチ党に対する敵対勢力のみならずナチ党内の反ヒト

ラー派の監視にも当たっていた。ヒトラー政権成立後の1933年11月にSD局に昇格したが、当時ハイドリヒはバイエルン政治警察長官を兼務していたので、政治警察が主として国家の敵（共産主義者、ユダヤ人）を対象とし、SDは国家機関及びナチ党内の敵の監視に当たるという任務分担が行われた。レームとSAによる危機が浮上してくるとSDの情報機関としての重要性が増大し、1934年6月9日には副総統ヘスによってナチ党内での唯一の情報機関である事が公認された。やがて全国家警察、特に秘密国家警察とSDとの任務分担が次の様に定められた。

- 「1） 秘密国家警察は国家の敵を撃滅する。
- 2） SDはナチ・イデオロギーへの反対者に関する情報を収集し、秘密国家警察に通報する。⁽⁸⁶⁾」

すなわち秘密国家警察が国家の敵に対する実力機関であり、SDは情報専門機関とされたのである。

しかし、その後SDにはナチズムに共鳴する野心家で高学歴の若い世代が続々と入隊し、秘密国家警察が国家の司法・行政の必要性から生まれた体制防衛の為に執行機関で警察官僚の集合であるのに対して、SDは法を超越してナチズムの理想の実現の為に働くナチ・イデオロギーの体現者の若者の集団へと発展して行く。しかし、保安警察とSDの両方を掌握したハイドリヒにとって、SSと警察の統合という大きな目標の中での自分の果たすべき役割は、まず保安警察とSDの統合であると考えていた。そこでSDと秘密国家警察との任務の競合が大きな問題となる状況の下で、ハイドリヒはSDの今後の発展の為に、SDが将来果たすべき任務として次の三つを考えた。

- 1) ナチ・イデオロギーの敵に関する長期的な調査と研究
- 2) 国外情報収集機関への発展
- 3) 国内のあらゆる分野を対象とした民心動向調査⁽⁸⁷⁾

これらをすべて網羅し保安警察と統合された、ナチズムの目標達成の為の新しい政治組織こそ国家保安本部に外ならなかった。その国家保安本部内でSDの任務に関して、1)を担当するのが第II局、2)を担当するのが第VI局、3)を担当するのが第III局であった。

こうしてヒトラー—ヒムラー—ハイドリヒという指揮系統の下に、もはや国家からもナチ党からも制約を受けない国家と党を包括したナチズムの実現の為の新組織が出現したのである。それは、第二次世界大戦の勃発と期を一にしていたが、この戦争がヒトラーによるナチズムの政治目標実現の為の戦争であったことを考えると当然の事と言えよう。当然の事として、ナチズムの目標実現の為の政治イデオロギー戦争の実行部隊は、この国家保安本部の指揮下に編成されたのである。それがSS特別行動隊であった。

第2節 SS特別行動隊の創設と対ソ連侵攻準備

来るべき対ソ連侵攻に備えて4個のSS特別行動隊(A～D)の編成が決定された。1941年4月、ハイドリヒは国家保安本部幹部を前にソ連との戦争における保安警察・保安情報部の任務をロシアの「安定と鎮静化」と婉曲な表現を使ったが、「その任務の完遂の為に真の兵士を必要とし、保安警察・保安情報部の一員として真価を証明せよ。」と訓辞した。これに対して第V局長ネーベSS少将は直ちに応じ、こうして初代SS特別行動隊長の一人が直ちに決まった。しかし、ネーベ以外の隊長はそう簡単には行かなかった。SS特別行動隊A隊長に決まったヴァルター・シュターレッカーSS少将は、当時ハイドリヒと対立して外務省に出向中であった

が国家保安本部への返映きを狙って指名に応じた。SS特別行動隊Cの隊長Dr. エミール・オットー・ラッシュSS少将も東プロイセンに左遷中であつたが、同じ理由で指名に従つた。SS特別行動隊Dの隊長に指名されたオットー・オーレンドルフSS大佐は、当時国家保安本部第Ⅲ局長であつたが、東部戦線従軍を二度まで拒否した後、三度目には臆病の謗りを恐れて承諾した。こうして4人のSS特別行動隊隊長は決定された⁽⁸⁸⁾。

他の要員も将校は所謂インテリを中心に選抜され博士号を持った法律家、官僚出身者、弁護士、牧師、挙げ句はオペラ歌手まで含れていた。しかし、呼び掛けに応じて自ら志願する者は皆無で、遂に業を煮やしたハイドリヒは保安警察(Sipo)、SD、刑事警察(Kripo)に各々人員を割当てて強制的に選抜し、更に不足を秩序警察(Orpo)と武装親衛隊(Waffen-SS)から補充せざるを得なかつたのである。かくして5月には約3,000名から成るSS特別行動隊の編成が完結した。また、各SS特別行動隊の兵力はA:1,000名、B:655名、C:700名、D:600名であつた⁽⁸⁹⁾。その構成は、SS特別行動隊Aを例に取れば、9%が秘密国家警察(Gestapo)、3.5%がSD、4.1%が刑事警察、3.4%が秩序警察、8.8%が外国人補助警察、3.4%が武装親衛隊、残りが技術者、事務官、運転手、通訳等である⁽⁹⁰⁾。SS特別行動隊の編成単位はSS特別行動隊(Einsatzgruppe) > 特別中隊(SK:Sonderkommando) または特別行動中隊(EK:Einsatzkommando) > 小隊(Teilkommando)であつた。ただし小隊は特に必要のある場合のみ独立して行動した。更にこれらの外に特にモスクワの占領に備えて、SS特別行動隊Bには先遣中隊モスクワ/特別中隊7c(Vorkommando Moskau/ Sonderkommando 7c)が編成されていた。特別中隊(SK)と特別行動中隊(EK)の主たる相違点は、SS特別行動隊が軍作戦地域を行動する場合に特別中隊(SK)は軍作戦地域で、特別行動中隊(EK)は軍集団後方地域で行動する事であつた。

対ソ連侵攻開始時のSS特別行動隊の編成は次の通りである。

国家保安本部（RSHA） 第IV局：局長 ミューラーSS少将

- SS特別行動隊A： シュターレッカーSS少将
 - 特別中隊1 a： ザントベルガー
 - 特別中隊1 b： エーリングガー
 - 特別行動中隊2： バーツ
 - 特別行動中隊3： イェガー
- SS特別行動隊B： ネーベSS少将
 - 特別中隊7 a： ブルーメ
 - 特別中隊7 b： ラウシュ
 - 先遣中隊 モスクワ／特別中隊7 c： ジックス
 - 特別行動中隊8： ブラドフィッシュ
 - 特別行動中隊9： フィルベルト
- SS特別行動隊C： ラッシュュSS少将
 - 特別中隊4 a： ブローベル
 - 特別中隊4 b： ヘルマン
 - 特別行動中隊5： シュルツ
 - 特別行動中隊6： クレーガー
- SS特別行動隊D： オーレンドルフSS大佐
 - 特別中隊10 a： ゼーツェン
 - 特別中隊10 b： ペルステラー
 - 特別中隊11 a： ツァップ
 - 特別中隊11 b： ブラウン（10月から）
 - 特別行動中隊12： ノスケ ⁽⁹¹⁾

（中隊長は概ねSS少佐であった。特別中隊11b初代中隊長は不明。）

国家保安本部（RSHA）の担当局（第IV局）の局長ハインリヒ・ミュラー（Heinrich Müller）SS少将は、ドイツ第三帝国におけるユダヤ人問題の実行責任者であった。ワイマール期からの警察官僚で、ナチスの政権獲得後も警察官僚として秘密国家警察（Gestapo）を統括し、ヒムラーとハイドリヒに忠実に仕えて、官僚としての能力を発揮してナチスの独裁体制を維持した。東部戦線でのSS特別行動隊の作戦を指揮した後は、ドイツの敗戦までドイツ第三帝国のホロコーストを強力に推進した。ミュラーは、ドイツの敗戦時に行方をくらませ未だにその消息は不明である⁽⁹²⁾。

SS特別行動隊Aの隊長フランツ・ヴァルター・シュターレッカー（Franz Walter Stahlecker）SS少将は、1900年生まれで、チュービンゲン大学で法学博士号を取得して弁護士をしていた。ナチスの政権獲得の前年の1932年にナチ党とSSに同時に加わった。国家保安本部ではIV局Aの課長を務めていた。1942年3月に東部戦線で戦傷死した。彼はナチズムを信奉して進んでSSに入隊した高学歴で学位も持った若きナチ・エリートの人であった⁽⁹³⁾。

SS特別行動隊Bの隊長アルトゥール・ネーベ（Arthur Nebe）SS少将は、1894年生まれの警察官で、ワイマール期から刑事警察畑を歩み、1941年には刑事警察のトップである国家保安本部第V局長のポストにあった。東部戦線から帰還後、反ヒトラー派の抵抗運動に参加して、1944年7月20事件に連座して逮捕され、1945年3月に処刑された⁽⁹⁴⁾。

SS特別行動隊Cの隊長オットー・ラッシュ（Otto Rasch）SS少将は、1891年生まれで、ライプチヒ大学で言語学、法学等を学び、二つの博士号を持ち弁護士をしていた。1931年にナチ党に入党し、1933年にSSに入隊し、主にSDで勤務した。彼も高学歴で学位も持った若きナチ・エリートの人である。戦後、1948年のニュルンベルク継続裁判で裁かれ7年の禁固刑に処されたが、獄中で病死した⁽⁹⁵⁾。

SS 特別行動隊Dの隊長オットー・オーレンドルフ (Otto Ohlendorf)

SS 大佐は、1907年生まれで、ゲッチンゲン大学とライプチヒ大学で法律を学び、キール大学の助手になった。彼は、1925年に18歳でナチ党とSSに同時に加わっている。前職は弁護士であった。国家保安本部では第Ⅲ局長 (SD : 国内情報) を務めていた。戦後はニュルンベルク継続裁判で裁かれ、1948年に死刑判決を受けて1951年に執行された。彼もSDで勤務した高学歴の若きナチ・エリートの一であったが、特に1925年の早い時期に18歳でナチス運動に参加した強固なナチズム信奉者であった⁽⁹⁶⁾。

SS 特別中隊1 a の中隊長マルチン・ザントベルガー (Martin Sandberger) は、1911年生まれで、1931年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊した。フライブルク大学、ミュンヘン大学、ケルン大学、チュービンゲン大学で学び、博士号を取得して弁護士をしていた。1948年のニュルンベルク継続裁判で終身刑の判決を受けたが、1953年に減刑されて釈放されている⁽⁹⁷⁾。

特別中隊1 b の中隊長エーリヒ・エーリングガー (Erich Ehrlinger) は、1910年生まれで、1931年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊している。キール大学、ベルリン大学、チュービンゲン大学で学び博士号取得して前職は弁護士であった。国家保安本部では第Ⅰ局 (人事・総務) の局長を務めた⁽⁹⁸⁾。

特別行動中隊2の中隊長ホルスト・バーツ (Horst Barth) は、1890年生まれで、1937年にナチ党に入党し、1938年にSSに入隊している。大学で法律を学び博士号を取得して弁護士をしていた。戦後1961年に刑事訴追された際に自殺した⁽⁹⁹⁾。

特別行動中隊3中隊長カール・イエガー (Karl Jäger) は、1888年生まれで、1930年にナチ党に入党し、1933年にSSに入隊している。

実業高校を卒業して会社員をしていた。戦後1959年に自殺した⁽¹⁰⁰⁾。

特別中隊7 aの中隊長ヴァルター・ブルーメ(Walter Blume)は、1906年生まれで、1933年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊している。エアランゲン大学、ボン大学、イエナ大学、ミュンスター大学で法律を学び、博士号を取得して弁護士をしていた。1948年のニュルンベルク継続裁判で終身刑の判決を受けたが、減刑されて釈放された⁽¹⁰¹⁾。

特別中隊7 bの中隊長ギュンター・ラウシュ(Günter Rausch)は、1909年生まれで、1930年にナチ党に入党し、1931年にSSに入隊している。ベルリン大学とイエナ大学で経済学を学び、国家保安本部第II局で勤務していた。戦後訴追は受けず、1964年に死亡した⁽¹⁰²⁾。

先遣中隊モスクワ/特別中隊7 cの中隊長フランツ・ジックス(Franz Six)は、1909年生まれで、1930年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊している。ハイデルベルク大学で学び博士号を取得し、更に教授資格も取得した最高のインテリである。国家保安本部VII局長を務めた。1948年のニュルンベルク継続裁判で20年の禁固刑の判決を受けるが、減刑されて1952年に釈放された⁽¹⁰³⁾。

特別行動中隊8の中隊長オットー・ブラドフィッシュ(Otto Bradfisch)は、1903年生まれで、1931年にナチ党に入党し、1938年にSSに入隊している。フライブルク大学とライプチヒ大学で学び、博士号を取得して弁護士をしていた。1941年にはSDで勤務していた。1948年のニュルンベルク継続裁判で13年の禁固刑の判決を受けるが、6年で釈放された⁽¹⁰⁴⁾。

特別行動中隊9の中隊長アルフレート・フィルベルト(Alfred Filbert)は、1905年生まれで、1932年にナチ党とSSに加わっている。ギーセン大学とハイデルベルク大学で学び、博士号を取得して弁護士をしていた。国家保安本部ではVI局 B(国外情報)の課長を務めた。1961年

に終身刑の判決を受けた⁽¹⁰⁵⁾。

特別中隊4 aの中隊長パウル・ブローベル(Paul Blobel)は、1894年生まれで、1931年にナチ党とSSに同時に加わった。職業学校を出て建築士をしていた。入隊後はSDで勤務した。ブローベルは、後に特別中隊1005の中隊長も務めた。1948年のニュルンベルク継続裁判で死刑の判決を受けて1951年に執行された⁽¹⁰⁶⁾。

特別中隊4 bの中隊長ギュンター・ヘルマン(Günter Herrmann)は、1908年生まれで、1933年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊した。キール大学、ゲッチング大学、ミュンスター大学で学び、弁護士をしていた。入隊後はゲシュタポとSDで勤務した。1973年に7年の禁固刑に処された⁽¹⁰⁷⁾。

特別行動中隊5の中隊長エルビン・シュルツ(Erwin Schulz)は、1900年生まれで、1933年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊した。ベルリン大学に2学期在学して、警察官になった。1948年のニュルンベルク継続裁判で20年の禁固刑の判決を受けたが、15年で釈放された⁽¹⁰⁸⁾。

特別行動中隊6の中隊長エルハルト・クレーガー(Erhard Kröger)は、1905年生まれで、1938年にSSに入隊し、ナチ党には、その2年後の1940年に入党している。チュービンゲン大学とケーニヒスベルク大学で学び、博士号を取得して弁護士をしていた。1969年に禁固3年に処されている⁽¹⁰⁹⁾。

特別中隊10 aの中隊長ハインツ・ゼーツェン(Heinz Seetzen)は、1906年生まれで、1933年にナチ党に入党し、1935年にSSに入隊した。マールブルク大学とキール大学で学び弁護士になり、入隊後は保安警察、ゲシュタポで勤務した。1945年9月に自殺している⁽¹¹⁰⁾。

特別中隊10 bの中隊長アロイス・ペルステラー(Alois Persterer)は、

1909年生まれで、1930年にナチ党に入党したが、SS入隊年は不明である。オーストリア出身で1933年まではオーストリア陸軍で勤務していた。小学校しか出ておらず、自動車整備工をしていた。1945年に殺害されている⁽¹¹¹⁾。

特別中隊11aの中隊長パウル・ツァップ(Paul Zapp)は、1904年生まれで、1937年にナチ党に入党したが、SS入隊年は不明である。大学卒業後は会社員をしていた。国家保安本部ではSDで勤務していた。1970年に終身刑に処されている⁽¹¹²⁾。

特別中隊11bの中隊長ヴェルナー・ブラウン(Werner Braune)は、1909年生まれで、1931年にナチ党に入党し、1934年にSSに入隊している。イエナ大学、ボン大学、ミュンヘン大学で学び、博士号を取得して弁護士をしていた。入隊後はSDに勤務した。1948年のニュルンベルク継続裁判で死刑判決を受けて1951年に執行された⁽¹¹³⁾。

特別行動中隊12の中隊長グスタフ・ノスケ(Gustav Nosske)は、1902年生まれで、1933年にナチ党に入党したが、SS入隊年は不明である。大学卒業後弁護士になり、ゲシュタポとSDで勤務した。1948年のニュルンベルク継続裁判で終身刑の判決を受けるが、その後10年に減刑されている⁽¹¹⁴⁾。

以上見てきた様に、SS特別行動隊の中隊長以上の指揮官達は、全22名中4名を除いた全ての者が大学を卒業しており、その大部分が博士号を持ち、弁護士資格も持っていた。中でもジックスは教授資格も持ち、ラウシュは博士号を二つも持っていた。彼らは異例の高学歴のインテリ、エリート集団であり、軍の高級指揮官達とは全く違った経歴、価値観を持った集団であった。

ソ連に侵攻するSS特別行動隊はこの様に編成されたが、SS特別行動隊が編成されたのは、対ソ連侵攻時が最初ではなかった。1938年3月

ドイツによるオーストリア併合（Anschluß）の際に最初のSS特別行動隊が編成された。ヒトラーの特別命令によって保安警察と秩序警察で編成されたこの警察 - 特別行動隊は、オーストリアへ進駐するドイツ陸軍の先遣隊に後続してオーストリアへ入り、予め指示された重要政治文書・物件の押収と敵対者の逮捕を迅速に行い、更に保安警察・保安情報部がオーストリアに本格的な組織を確立するまでの間、先遣出先機関として機能し、組織確立後はその一部に組み入れられた⁽¹¹⁵⁾。

1938年10月のズデーテンラント進駐の際も同様に秘密国家警察 - 特別行動隊が進駐する陸軍部隊に後続して主に共産主義者の摘発に当たった。1939年3月のチェコ併合の際は保安警察 - 特別行動隊が編成され陸軍部隊に続きチェコに入った。進駐6日後には「特別行動隊Ⅰ・プラハ」と指揮下の4個特別行動中隊（プラハ、ブドバイス、コーリン、パルドビッツ）、及び「特別行動隊Ⅱ・ブルン」と指揮下の3個特別行動中隊（ブルン、オルミューツ、ツリン）、更に「特別中隊ピルゼン」が編成された。その活動についての報告は現存しないがドイツに対する敵対者の摘発に当り、チェコでのベーメン・メーレン保護領成立後は現地の保安警察・保安情報部に編入された。これらの行動に際してドイツ陸軍進駐部隊による戦闘が発生しなかった事もあり、SS特別行動隊は軍の統制を受ける事はなかった⁽¹¹⁶⁾。

チェコ併合から半年後の1939年9月の対ポーランド侵攻では、SS特別行動隊に対してより大きな活動の舞台が準備されていた。1939年8月初め保安警察・保安情報部長官ハイドリヒと陸軍兵站総監ヴァグナー少将との間で「外地の陸軍作戦地域における保安警察・保安情報部部隊の行動規定」という協定が結ばれ、6個のSS特別行動隊が保安警察、保安情報部及び一般親衛隊によって編成された。

その編成は次の通りである。

S S 特別行動隊 I : シュレッケンバッハ S S 少将
(4 個 特別行動中隊)

S S 特別行動隊 II : D r . シェーファー S S 中佐
(2 個 特別行動中隊)

S S 特別行動隊 III : D r . フィッシャー S S 中佐
(2 個 特別行動中隊)

S S 特別行動隊 IV : ボイテル S S 少将
(2 個 特別行動中隊)

S S 特別行動隊 V : ダンツォーク S S 少将
(3 個 特別行動中隊)

S S 特別行動隊 VI : ナウマン S S 上級大佐
(2 個 特別行動中隊) ⁽¹¹⁷⁾

S S 特別行動隊 I ~ V は、各々次の様にドイツ陸軍ポーランド侵攻部隊の各軍に配属され各軍の統制下で行動した。

S S 特別行動隊 I : 第 1 4 軍

S S 特別行動隊 II : 第 1 0 軍

S S 特別行動隊 III : 第 8 軍

S S 特別行動隊 IV : 第 4 軍

S S 特別行動隊 V : 第 3 軍 ⁽¹¹⁸⁾

S S 特別行動隊 VI だけは軍には配属されず、後にドイツ帝国に併合されるポーゼン地域で独立して行動した。また各特別行動中隊は陸軍の各軍団に配属された。これらの部隊は、武装親衛隊の前身である親衛隊特務部隊

(SS-Verfügungstruppe)の軍服を着用し、左袖にSD記章を付けていた。

9月1日SS特別行動隊(I～V)は陸軍部隊とともに国境を越えた。その任務は今後のドイツによるポーランド支配にとって邪魔になるユダヤ人の排除とポーランドの指導者層(官吏、教師、僧侶、医師、地主、大商人等々)の絶滅であったが、この時ハイドリヒは国防軍に対してSS特別行動隊の任務を詳しくは説明していなかった。

SS特別行動隊は予め準備していたリストに従ってポーランド人を次々に逮捕し、その多くは処刑された。9月1カ月に数万人以上がSS特別行動隊の犠牲になり、9月27日ハイドリヒは、「ポーランド占領地で生き残っている上流階級は僅か3%に過ぎない。」と公言した⁽¹¹⁹⁾。

しかし、SS特別行動隊の残虐非道な行動はすぐに国防軍の知るところとなり囂々たる非難を巻き起こした。結局、SS側は国防軍に屈服せざるを得なかったが、ヒトラーの決定によって国防軍の優位も長続きはしなかった。すなわち、ポーランド占領地は直ちに軍政から民政へ移管される事になり、それは10月中旬に実施された。ダンチヒ、西プロイセンは、新たに設立されたヴァルテラント・ガウとなり、ポーゼンは上シュレージェンと共にドイツ帝国領に編入された。残りのポーランドの大部分はポーランド総督領(Generalgouvernement)となり、Dr. ハンス・フランク(Hans Frank)の下に置かれた。その結果、国防軍の占領軍としての発言権は著しく弱まったのである⁽¹²⁰⁾。

ハイドリヒは9月21日SS特別行動隊に対して、陸軍兵站総監ヴァグナー少将の事前承認の下にユダヤ人の処置に関する新たな指示を発した。その内容は「地方に住むユダヤ人を速やかに都市の一区画に移動させ、その場所も今後の移送に便利な様に鉄道近くに選定せよ」と言うものであった。それによって、本来のユダヤ人居住地区としてのユダヤ人ゲッターとは違ったSSが管理する外界と隔離された新たなユダヤ人ゲッターが誕

生した。更にハイドリヒは、ゲットー内のユダヤ人を纏める為にユダヤ人評議会の設置を命じ、ゲットーの管理、ユダヤ人移送の為の準備、給養等を行わせた⁽¹²¹⁾。

余りにも早い軍政から民政への移行に、種々の行政上の不都合が生じたが、保安警察・保安情報部の活動には何の障害もなかった。SS特別行動隊の活動は一応の成果を達成し、民政の成立に伴って各地区の保安警察・保安情報部に編入されてその活動を終了した。しかし、ポーランドの苦悩はこれで終わったわけではなく1944年の解放まで保安警察・保安情報部による暴虐は続き、その上、ポーランドはユダヤ人大虐殺実行の舞台となったのである。

1939年ポーランドでのSS特別行動隊の活動は国防軍の不評を買う結果となったが、ヒムラーとハイドリヒはそこから幾多の教訓を得る事ができ、そのSS特別行動隊の活動も新たに開始されるソ連での作戦で次の段階を迎える事になった。

1941年5月、ハイドリヒはエルベ川畔のプレツチュ（ライプチヒの北北東 約50km）にある国境警察学校に、編成を完結したSS特別行動隊を集合させソ連での活動の為の教育・訓練を開始させた。その後、ハイドリヒはプレツチュの古城にSS特別行動隊の中隊長以上を集めて、ソ連での任務を下達した。それは「東方におけるユダヤーボルシェビズムの一扫」であった⁽¹²²⁾。更にSS特別行動隊D隊長オーレンドルフSS大佐は後のニュルンベルク軍事裁判において、東部戦線への出撃の3～4日前に国家保安本部第I局長ブルノ・シュトレッケンバッハ（Bruno Streckenbach）SS少将から「すべてのユダヤ人を殲滅せよ。」という内容を含む総統命令を口頭で下達されたと証言している⁽¹²³⁾。しかし、1955年ソ連抑留から帰国したシュトレッケンバッハはそれを否定し、誰が、いつ、どの様な形でユダヤ人絶滅に関する総統命令をSS特別行動隊に下

達したかは明かでない。しかし、いずれにしても1941年7月末から8月末までの一ヶ月間のいずれかの日に総統命令としてすべてのユダヤ人の絶滅が命じられたのはほぼ間違いないと思われる⁽¹²⁴⁾。これに対して、SS特別行動隊A 1 a 中隊長ザントベルガー、D隊長オーレンドルフを含む何人かが抗議したと伝えられているが、結局は国家を代表する総統の命令には官吏として従わざるをえないと言う結論に達した。こうして、6月中旬ハイドリヒはプレツチュ近郊のバド・ドゥベンにおいてSS特別行動隊全部隊の観閲式を行い、一人の脱落者もなく全部隊がバルバロッサ作戦開始地域へ前進した。1941年6月23日、ドイツ軍部隊が攻撃を開始した翌日に、約3,000名のSS特別行動隊は100万人以上のソ連のユダヤ人を求めてソ連領内へ前進を開始した。

第3節 SS特別行動隊のソ連における作戦

北方軍集団に配属されたシュターレッカーSS少将の指揮するSS特別行動隊Aは、東プロイセンから出撃してリトアニア、ラトビア、エストニア、更にレニングラードへ前進を続けた。中央軍集団に配属されたネーベSS少将の指揮するSS特別行動隊Bは、ポーランド総督領北部から出撃して白ロシアを主作戦地域として、ミンスク、スモレンスク、更にモスクワへと向かった。南方軍集団に配属されたラッシュSS少将の指揮するSS特別行動隊Cはシュレジエンを出撃して北部ウクライナを作戦地域としてロブノ、キエフ、クルスク、ハリコフへと前進した。南方軍集団第11軍に配属されたオーレンドルフSS大佐の指揮するSS特別行動隊Dは、ルーマニアから出撃して南ウクライナとクリミア半島を作戦地域としてオデッサ、ニコライエフ、更にクリミア半島へと向かった⁽¹²⁵⁾。

基本原則に従えば、東部作戦軍各1個軍集団にSS特別行動隊1個が配属されることになっていたが、南方軍集団では、SS特別行動隊Cに加え

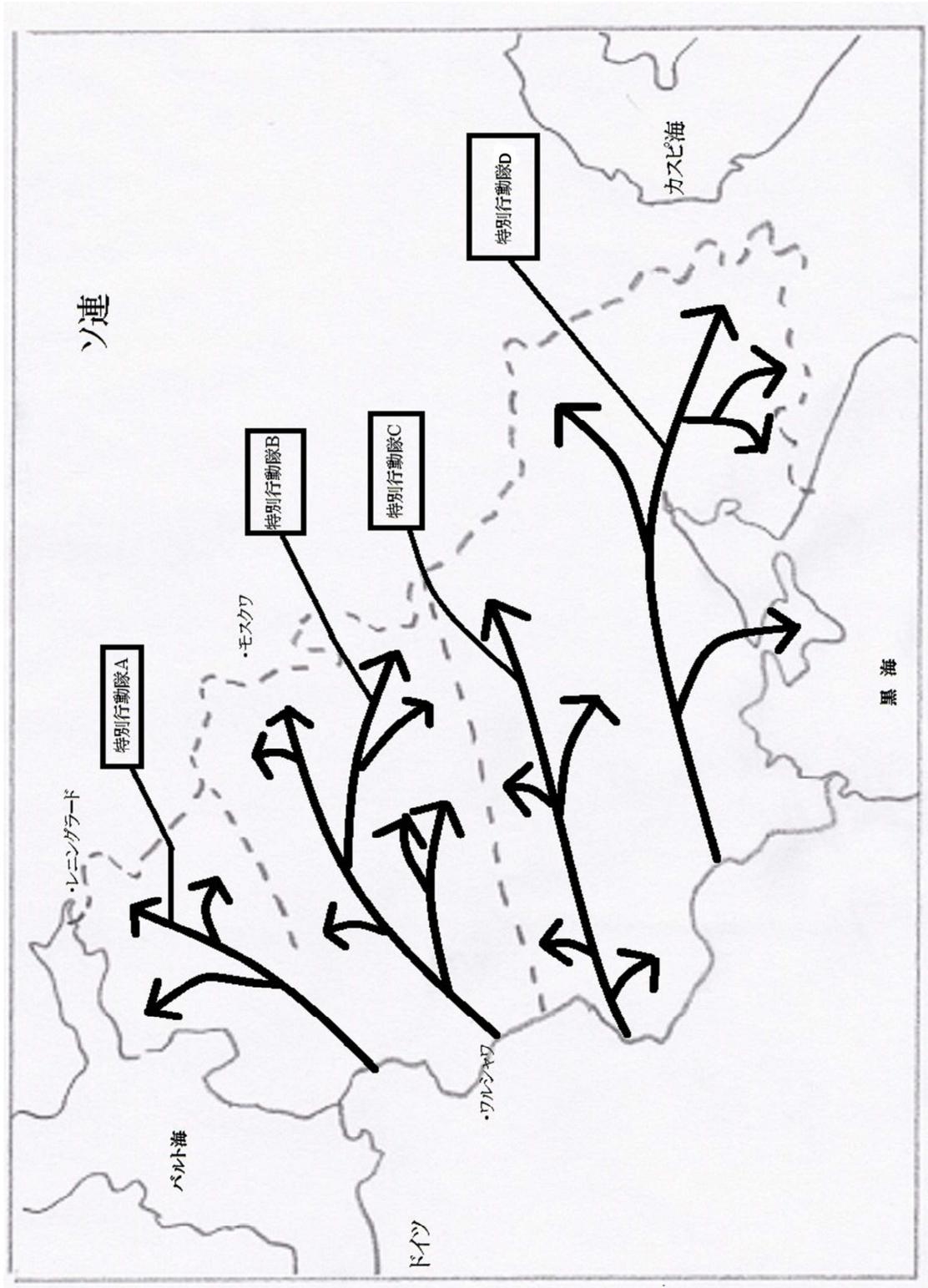
て更に第11軍にSS特別行動隊Dが配属されていた。しかし、それには理由があった。すなわちウクライナには、ソ連領内で最も多くのユダヤ人が住んでいたからである。ウクライナには古代からユダヤ人が住んでいたが、急速に人口が増えたのは13世紀のポーランド・リトアニア時代であった。1264年ポーランドのボレスワフ敬虔王はユダヤ人保護令を出して、税金を払えばユダヤ人を保護し自由な経済活動も保証した。14世紀末にはリトアニアのヴィタウタス大公も保護令を出し、その結果当時リトアニア領であったウクライナにドイツやポーランドのユダヤ人が大量に移住してきたのである。ユダヤ人はまず、都市の商人や手工業者になり、やがて農村にも進出した。彼らは金銭感覚に優れ事務能力が高かったので、貴族の荘園の管理人になり、農民を支配し金も貸した⁽¹²⁶⁾。当時のポーランド・リトアニアは「ユダヤ人の楽園⁽¹²⁷⁾」と呼ばれるほどであった。それでも16世紀初めにポーランド・リトアニアに住んでいたユダヤ人は合わせて約2万人程度であったが、17世紀中頃には50万人に達し、更に大量のユダヤ人がドイツから流入した。彼らは農民からは封建領主の手先と見なされていた。19世紀末には、ロシア帝国全土で520万人のユダヤ人が住んでおり、その内200万人がウクライナに住んでいた。その大部分が都市住民であり、ウクライナの都市人口の53%がユダヤ人であったと言われている。更にウクライナでは、カトリック教徒のポーランド人と東方正教団徒のウクライナ人の間に挟まれる存在となり、やがてポグロムと呼ばれる大規模なユダヤ人迫害に直面することになった⁽¹²⁸⁾。しかし彼らにとって想像を絶する悲劇が、はるか後の世の1941年の夏に訪れたのである。

SS特別行動隊はソ連領内でユダヤ人への攻撃で奇襲効果を上げる為に前進する陸軍部隊の前衛のすぐ後方を追及した。ユダヤ人の90%は都市に集中していた為、一刻も早く都市を占領してユダヤ人を捕捉する必要が

あったからである。多くの場合陸軍部隊が都市の郊外でまだソ連軍と交戦中にもかかわらずSS特別行動隊は既にユダヤ人の掃討を開始していた。ジトミールでは陸軍の尖兵戦車中隊に続いてSS特別行動隊Cの先遣隊が街に突入し、ロブノ、リガ、キエフでは陸軍部隊とほぼ同時に街に突入した⁽¹²⁹⁾。

大部分のソ連にいるユダヤ人は、まったく無防備、無警戒であったので捕獲活動の効果は絶大であった。元々スターリン体制下のソ連では反ユダヤ主義が表に出る事はなかったし、ソ連のマスコミもドイツ第三帝国におけるポグロムについては殆ど報道していなかった。ウクライナのユダヤ人はドイツ陸軍部隊を第一次大戦当時のカイザーの軍隊と同じく解放者として歓迎した程であった。街に入ったSS特別行動隊は直ちにユダヤ人を集め、数百人単位で一挙に殺害していった⁽¹³⁰⁾。

第5図：SS特別行動隊の作戦



(Encyclopedia of the Holocaust, S. 437. を参考に著者作成)

SS特別行動隊から国家保安本部に送られた行動報告によれば、行動開始から約一カ月間のユダヤ人の殺害結果は次の通りであった。

SS特別行動隊Aの場合は、6月28日：1,000人以上(ロブノ)、7月4日：200人(ロブノ)、7月6日：526人(リガ)、7月7日：400人(リガ)、7月16日：1,150人(デュナブルク)、7月18日：80人(ラトビア)であり、SS特別行動隊Bは、7月6日：2,000人(ルック)、7月13日：1,000人(ミンスク)であった。SS特別行動隊Cは、7月11日：これまでの累計240人(ロブノ)、1,327人(トラノポール)、7月12日：27人(ロブノ)、7月16日：これまでの累計7,000人(白ロシア)、7月22日：187人(ジトミール)であった。SS特別行動隊Dは、ルーマニア軍・警察によるユダヤ人殺害の報告が続いたあとで、8月1日：682人(チェルノフツィ)、150人(ホテイン)であった⁽¹³¹⁾。

このようにソ連でユダヤ人殺戮を重ねていったSS特別行動隊もやがてその任務遂行が難しくなって来る。その理由は、SS特別行動隊の活動に関する情報がユダヤ人逃亡者、ロシア人住民、目撃したドイツ陸軍兵士等を通じてロシア・ユダヤ人の間に急速に広がり、ドイツ陸軍部隊やSS特別行動隊の接近を知るとユダヤ人は蜘蛛の子を散らすように姿を消してしまったからである。SS特別行動隊がロシアのある村に入った時には、ユダヤ人はすでに姿を消し、通りを歩いていたのは赤ん坊を抱いた女一人であった。SS特別行動隊員は腹いせにその赤ん坊の足を掴んでドアに叩き付けた⁽¹³²⁾。

SS特別行動隊は、この事態に対処する為に新しい方策を考え出した。占領地の町村にユダヤ人殺害の噂を否定し、住民調査・登録と新居住地への移送のために荷物をまとめて集合する事を告げたポスターを掲示した。結果は予想以上で、多数のユダヤ人が指定された集合場所に集まった。キ

エフでは5,000～6,000人を予想していたが、実際は30,000人以上が集まった。SS特別行動隊は彼らをいくつかのグループに分け、所持金をすべて没収して処刑場所に連行し墓穴を掘らせた後、殺害した。この方法は効果を上げたが、SS特別行動隊にとっても重労働となった。集合場所から数km離れた処刑場所まで、日に何度も数百人単位のユダヤ人を逃亡を防ぎながら徒歩で護送しなければならなかったからである。キエフの場合は処刑終了までに数日を要した⁽¹³³⁾。

これらの困難にも拘らず1942年春までにSS特別行動隊が殺害したソ連領内のユダヤ人の総数は、SS特別行動隊A：248,468人で、B：71,455人、C：106,737人、D：91,728人、合計518,388人に及んだ⁽¹³⁴⁾。しかし、この途方もない殺戮が総員僅か3,000名のSS特別行動隊だけで実行された訳ではない。SS特別行動隊は予備警察大隊と多数の現地人補助警察の支援を受けていた。更にバルト三国地域とウクライナでは現地の一般住民による積極的な協力もあった。

ここでSS特別行動隊は新たな問題に直面した。SS特別行動隊員は6月23日の行動開始以来、半年にわたる連日の処刑に疲労困憊し、特に精神的に忍耐の限度を超えつつあった。元々SS特別行動隊の参加に乗り気でなかった先遣中隊モスクワ/SK7c中隊長ジックスは8月20日に任務を放棄し、SS特別行動隊C隊長ラッシュは9月末休暇から勤務に復帰しなかった。SS特別行動隊Bの隊長ネーベも神経衰弱に陥り、彼の運転手であった刑事警察官のケーンはユダヤ人虐殺による幻影に脅えて自殺した⁽¹³⁵⁾。

エリートとして選ばれ筋がね入りのナチ・イデオロギーの旗手として鍛えあげられたSS隊員達も、祖国を遠く離れたロシアの地で途方もない大量殺戮の重圧と望郷の念に戦意を喪失しつつあった。対ソ連侵攻に先立ち

ハイドリヒは保安警察・保安情報部隊員は東部戦線に参加する事によって、ナチズム体制における新しい貴族階級・エリートとして、その中でもナチズムの理想実現の中核たる保安警察・保安情報部隊員としてその真価を証明する事を要求した。しかし、あまりにも厳しい現実の前にその理想の幻影も崩れつつあった。かつてヒトラーも武装親衛隊(Waffen-SS)に対して、戦火の洗礼を受ける事によって鍛えられ鉄の意志を持ったナチズムの政治的軍隊に成長して、ドイツ帝国と東方ゲルマン帝国での武装警察部隊の役割を果たす事を望んだが、武装親衛隊は、東部戦線での苛酷な戦闘を経験してナチズムを信奉する政治的軍隊ではなくドイツ国家の軍隊として目覚めた。この様にしてヒトラーの目論見は外れたのである。

S S長官ヒムラーにはS S特別行動隊員の精神的苦悩が良くわかった。ヒムラーは機会あるごとにS S特別行動隊員に「全ドイツ民族の将来のために己を犠牲にして任務を完遂せよ」と叱咤激励した。1941年7月末もしくは8月初めにヒムラーはS S特別行動隊Bの活動の現場を視察した。その際、女、子供を含む一群のユダヤ人の射殺に立ち会い、犠牲者の脳漿を顔に浴びて嘔吐してしまった⁽¹³⁶⁾。これを機会に隊員の精神的負担を軽減するためにガストラックの導入が検討されたが、これも殺害後汚物に塗れた死体をトラックから引きずり卸さなければならず、隊員は否応なく自からの所業を目にする結果となった。

これに対して、S S特別行動隊長達はむしろ精神的重圧による部隊の規律の弛緩が心配で、隊員への重圧を軽減する方策を考えていた。D隊長オーレンドルフは軍隊式のやり方で上官の命令によって迅速に処刑を実行させて隊員に考える時間を与えず、C隊長ラッシュは恐怖の共通体験によって隊員相互の連帯感を強めて困難を克服しようとした。しかし、あらゆる努力にも拘らず誰も精神的苦痛から逃れる事はできなかった。S S特別行動中隊4 a 指揮官ブローベルは戦後、犠牲者よりも死刑執行人の方がはる

かに精神的負担が大きく、真に不運だったのは殺戮者自身であったと証言している⁽¹³⁷⁾。

このSS特別行動隊隊員の心の葛藤と言うテーマは、ヨーロッパではドイツ以外でも関心が高く、フランスの作家ジョナサン・リテル(Jonathan Littell)は、SS特別行動隊に参加した一人のSS将校の精神的な苦悩を小説のモチーフにした『慈しみの女神たち(Les Bienveillantes)⁽¹³⁸⁾』と言う千頁を超える大著を著している。

しかしSS特別行動隊の任務も終わりを迎える事になる。SS特別行動隊Aは武装親衛隊第3SS「トーテンコップ(髑髏)」師団と共にレニングラード入城を期していたが、レニングラードは陥落しなかったため、レニングラード正面の戦局の安定化を待つA隊長スターレッカーはライヒスコミッサリアート・オストラントの保安警察・保安情報部司令官に転出し、SS特別行動隊Aの部隊もバルト三国地区の残敵掃討の為にSS特別中隊1aと2bを残して解隊されて地区保安警察・保安情報部本部に吸収された。SS特別行動隊B～Dも1942年夏以降オストラントとウクライナでの作戦終了後に占領地の地区保安警察・保安情報部に吸収された。SS特別行動隊の各隊長を始め上級指揮官の多くが国家保安本部に復帰した⁽¹³⁹⁾。

しかし、これでソ連でのSS特別行動隊の仕事が全て終わったわけではなかった。最後に最も不気味な仕事が残されていた。大量の不完全な死体処理による環境汚染が問題化し、また1943年以降ドイツ側の形勢が次第に不利になって来た為に、大規模なユダヤ人死体の再処理による大量殺戮の証拠隠滅が開始された。この作戦は、その発端となったドイツ外務省から国家保安本部第IV局へ出されヴァルテガウで現れた大量のユダヤ人死体の処理を要望する文書の番号から1005号作戦(Aktion 1005)と名付けられた。その作戦の実行部隊であるSS特別中隊1005

が1942年7月に編成されて、特別中隊4 aの中隊長を務めたパウル・ブローベルが再度中隊長に任命された。この部隊は1943年8月には更に増強されSS特別中隊1005 AとSS特別中隊1005 Bとなり、大量の囚人やユダヤ人を使って死体を掘り出し、それを焼いて骨を粉末にし、撒いて大量殺戮の痕跡を消した。更に作業に従事したユダヤ人達も殺害して口封じを図ったが、少数の逃亡者によってこの作戦の存在が暴かれた。しかし、1005号作戦が実施された事によってソ連でのユダヤ人の正確な犠牲者の総数は今だに不明である⁽¹⁴⁰⁾。

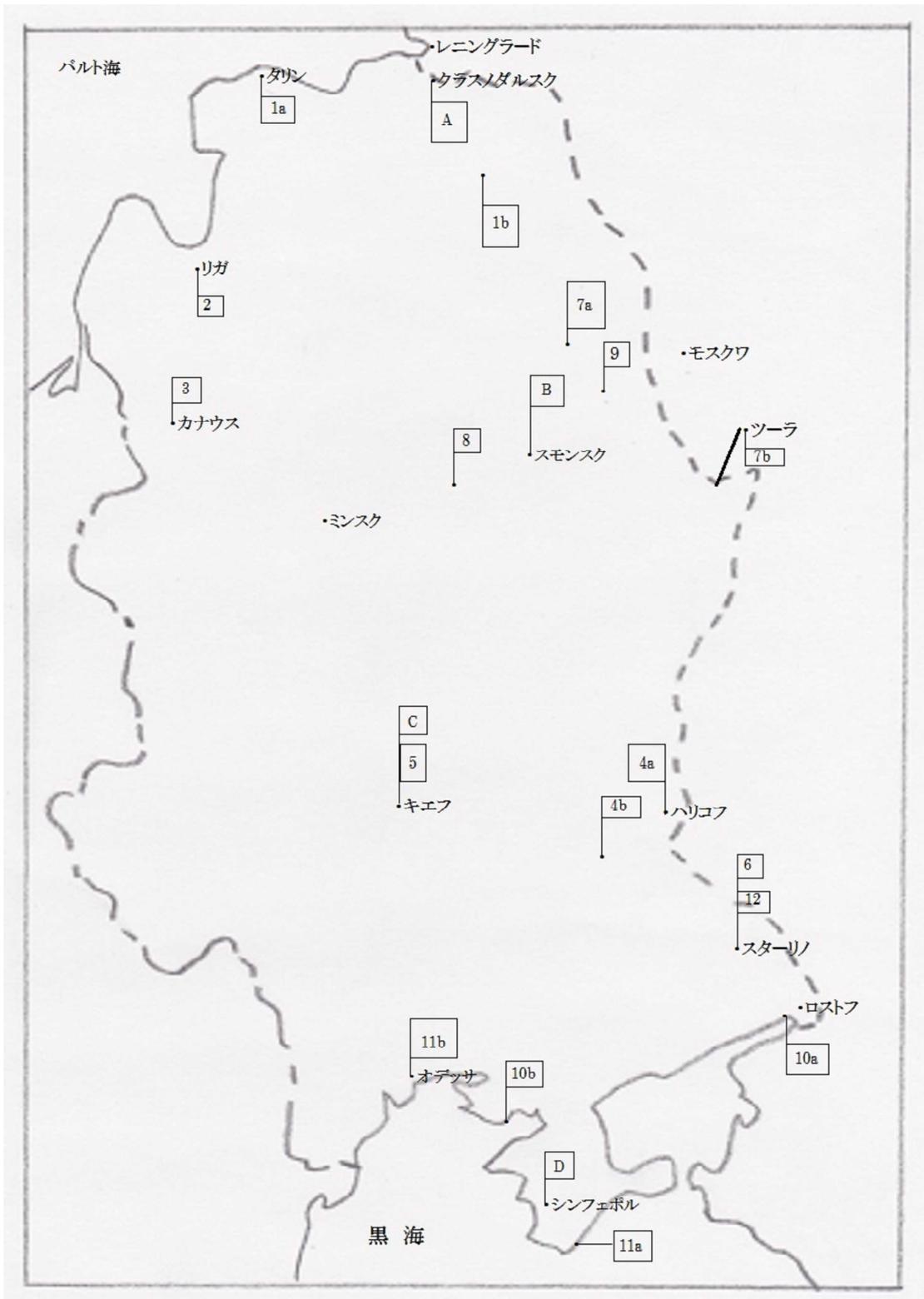
第二次世界大戦大戦終結後、ドイツ・ニュルンベルクでドイツ第三帝国の指導者達の戦争責任を裁くニュルンベルク国際軍事裁判が行われたが、それに引き続き米国単独によるニュルンベルク継続裁判が行われ、その9番目の裁判においてSS特別行動隊の隊長4名を含む中隊長、及び中隊長付SS将校等、総計23名が東部戦線でのユダヤ人の大量殺害事案の被告として責任を追及された。この裁判は、SS特別行動隊Dの隊長オットー・オーレンドルフを代表者に進められたので、「オーレンドルフ裁判」、もしくは「SS特別行動隊裁判」と呼ばれている。その判決結果に基づき、1951年6月7日、D隊長オットー・オーレンドルフ、特別中隊4 a及びSS特別中隊1005中隊長パウル・ブローベル、特別行動中隊11 b中隊長ヴェルナー・ブラウン、Bの2代目隊長エーリヒ・ナウマン、SS本部の経済管理局長オズワルト・ポールの5名が絞首刑となり、残りの者は無期禁固もしくは有期刑となったが、殆どが後日減刑されて、保釈もしくは釈放された⁽¹⁴¹⁾。

この戦争裁判では、ドイツ第三帝国の国策で、それを遂行する為の命令、すなわち国家の命令であったとはいえ、被告23名中、5名が死刑と言う判決は、ユダヤ人の大量殺戮と言う未曾有の非人道的な犯罪の実行者に対する刑罰としては、あまりにも軽い刑であった。更に判決後に2回にわた

って無期もしくは有期刑になった被告の再審査が行われた結果、大幅な減刑や恩赦が実施された。

1941年11月の時点でのSS特別行動隊のソ連での配置は次の頁の
に示す通りである。

第6図：SS特別行動隊の1941年11月の態勢



(Hilberg, Der Vernichtung der europäischen Juden, S.314.を参考に著者作成)

第5章 ドイツ陸軍とSS特別行動隊の公式の関係

第1節 陸軍総司令部と保安警察

1941年の対ソ連侵攻時のドイツ陸軍部隊とSS特別行動隊の公式の関係は、保安警察・保安情報部が真の任務を隠して行動した為にドイツ陸軍側から強い反発を受けた1939年の対ポーランド戦の時とは大きく異なっていた。

ヒトラーは1940年12月18日に、来たるべき対ソ連戦、すなわちバルバロッサ作戦の基本的な軍事戦略を示した総統指令第21号「バルバロッサの場合」を発令して国防軍に作戦準備を開始させ、更に1941年3月13日に、その指令を政治面での任務を補足する補足総統指令「特殊分野に関する命令」を発して来るべき対ソ連侵攻作戦での陸軍作戦地域内における陸軍部隊とSSを始めとする諸機関との関係を規定する指針を示した。日く「陸軍作戦地域においてSS長官は総統の命により政治的行政措置の準備の為に要求される特別任務を遂行する。その特別任務は二つの異なる政治体制間で不可避の最終闘争から生じるものである。SS長官は上記諸任務の達成の為に、その範囲内において自己の責任において独立して行動する。しかしながら、それは陸軍総司令官とその隷下部隊の権限を侵害するものではない。SS長官は任務遂行にあたり、陸軍部隊の作戦に支障がない様に留意すべきである。細部については陸軍総司令部とSS長官の間で調整するものとする。⁽¹⁴²⁾」

これによってSS側は総統から東部作戦軍の作戦地域内で行動する事ができる御墨付を得たのである。

その上SS長官ヒムラーの政治的な立場は対ポーランド戦の時より著しく強化されていた。すなわちヒムラーは1939年10月7日、ヒトラーの命令により「ドイツ民族強化の為に帝国全権委員(RKFDV:Reichskommissar für die Festigung des deutschen Volkstums)」に就

任し、ドイツ民族の移民・植民に関する全権限が与えられていた。この事によりヒムラーは、ドイツ警察長官として対ソ連侵攻作戦での陸軍部隊の作戦地域内での陸軍部隊の支援の為に、行う警察活動に対する権限に加えて、将来のドイツ民族の東方植民政策の実施準備に関する発言権も得たのであった⁽¹⁴³⁾。

ヒムラーに東方地域での特別任務を指示した補足総統指令は明らかにドイツ陸軍の東方での特権的地位を犯すものであったが、それによって陸軍は自分が望まない現地住民対策、対情報活動等の汚い仕事に手を染める必要がなくなると言う利点もあったので、ドイツ陸軍側からはこれと言った不満の声は出なかった。

第2節 ヴァグナー・ハイドリヒ協定

ドイツ陸軍部隊とSS保安警察・保安情報部部隊との東部戦線での新たな公式関係は、前記の補足総統指令を根拠にした1941年3月に陸軍兵站総監エドワルト・ヴァグナー少将と保安警察・保安情報部長官ハイドリヒSS大将との間で締結された「東部戦線における保安警察・保安情報部との協力」に関する合意に基づいている。この合意は、同年4月28日に陸軍総司令官ヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ元帥の通達の形で東部作戦軍各隷下部隊に下達された⁽¹⁴⁴⁾。この「陸軍部隊における保安警察・保安情報部の行動規定」と題された通達によれば、陸軍諸部隊による通常の保安警察業務の範囲を越える事項に関しては、陸軍は作戦地域内で保安警察特別部隊（SS特別行動隊）の出動を必要とする。作戦地域内での保安警察・保安情報部特別部隊は、保安警察・保安情報部長官の同意により、以下の規定通り行動するものとされた。

「1）任 務

a 軍後方地域において

S S 特別中隊は、行動開始に先立ち特定の重要物件（ドイツに敵対する諸組織、団体等の文書、記録等）及び重要人物（亡命者の指導的人物、破壊工作員、テロリスト等）⁽¹⁴⁵⁾を確保する。軍司令官は、軍作戦地域内でのS S 特別中隊の行動が軍の作戦行動に支障を及ぼす場合には、これを禁止できる。

b 軍集団後方地域において

S S 特別行動隊は、敵国軍隊以外によるドイツ帝国に対する敵対行為を摘発し、これを粉碎する。その際、政治的状況については軍集団後方地域司令官に通報するものとする。軍情報参謀（防諜担当）及び軍情報部との協力関係については、1937年1月1日に国防省情報部において締結された協定「秘密国家警察(Gestapo)と国防軍情報部門(Abwehr)との協力に関する原則」に基づく。

2) S S 特別中隊と軍後方地域諸部隊との協力関係

保安警察・保安情報部特別中隊は、自己の責任において任務を遂行する。ただし、部隊移動、補給、宿営に関しては軍の指揮を受ける。しかしながら規律の維持、裁判権の行使に関しては、保安警察・保安情報部長官の指揮を受けることを妨げない。特別中隊は、任務に関する指示は保安警察・保安情報部長官から受けるが、その活動に関し必要な場合は軍の限定的指示に従う。各軍作戦地域において特別中隊を統括するため保安警察・保安情報部長官の代理者を置く。この代理者は長官の指示を軍司令官に伝達する義務を負う。軍司令官は軍作戦地域内で作戦行動上の障害を排除する必要がある場合は、この代理者を通じて指示を発することができる。この指示は他の全てに優先する。保安警察・保安情報部代理者は、軍情報参謀と緊密な連絡を保持し、軍側の要求があれば連絡将校を派遣する。

軍情報参謀は、特別中隊の任務と軍事上必要な防諜、秘密野戦警察（G F P）の活動及び作戦上の要求を調整する。特別中隊は、示された任務の範囲内で自己の責任において一般住民に対して法的措置を執行できるが、その際、軍情報部（防諜担当）と緊密に協力しなければならない。ただし、その措置が軍の作戦行動に影響を及ぼす場合は、軍司令官の承認が必要である。

3) S S 特別行動隊及び特別行動中隊と軍集団後方地域司令官との協力関係

S S 特別行動隊及び特別行動中隊は軍集団後方地域において行動する。同部隊は、軍集団後方地域司令官に同行する保安警察・保安情報部代理者の指揮下に置かれ、部隊移動、補給、宿営に関し軍集団後方地域司令官の指揮を受ける。同部隊は任務に関する指示を保安警察・保安情報部長官から受ける。命令伝達に関して、他に手段のない場合に限り固有の無線機による通信を行い、暗号を使用する。通信規定は陸軍の通信規定を使用する。保安警察・保安情報部代理者、必要に応じ特別行動中隊指揮官は、自己に明示された指示に関し所在の警備師団指揮官に対し正確な通報の義務を負う。緊急事態に際しては、軍後方地域司令官は限定的指示を発し、この指示は全てに優先する。

S S 特別行動隊及び特別行動中隊は自己の任務の権限内において、自己の責任により一般市民に対して法的措置を執行できる。この際、軍情報部（防諜担当）と緊密に協力する。

4) S S 特別行動隊、特別行動中隊及び特別中隊と秘密野戦警察（G F P）との任務境界の確定

陸軍部隊内の防諜警察任務及び部隊に対する直接的保全は、すべて秘密野戦警察の任務である。この件に関わる事項は、S S 特別行動隊、特別行動中隊及び特別中隊によって遅滞なく秘密野戦警察に通

報される。SS特別行動隊、特別行動中隊及び特別中隊の任務に関する事項は同様に通報される。その他の事項に関しては1937年1月1日の協定によるものとする。⁽¹⁴⁶⁾」

この規定により、SS特別行動隊との陸軍側の窓口とされたのは、軍集団及び軍司令部(AOK)情報部(Ic)の防諜担当参謀(AO)であった。まずここでドイツ陸軍各級司令部の幕僚組織を明らかにしておく必要がある。

一般的に幕僚とは、司令部内の参謀(Stab)と副官(Adjutant)を合わせた呼称であり、参謀は主として作戦に関係ある業務を担当して指揮官を補佐し、副官は人事、渉外、庶務を担当する事になっていた。また、ドイツ陸軍では参謀は、プロイセン陸軍以来の伝統により参謀科という独立した兵科に属し、参謀本部及び各級部隊の司令部で勤務した。参謀科将校は陸軍参謀本部により直接管理運用された。

ドイツ陸軍の各級部隊の司令部の幕僚組織は、規模が異なるものの基本的には陸軍総司令部(OKH)から軍集団司令部、軍司令部(AOK)、軍団司令部、師団司令部に至るまで同一で、参謀長(ただし師団司令部では欠)の統制下に、次に示す5部(I~V)から成っていた。

司令官(Befehlshaber)

参謀長(Chef des Stabes)

I a : 作戦部(Führungs-Abteilung)

I b : 兵站部(Quartiermeister-Abteilung)

I c : 情報部(Feindaufklärung und Abwehr)

I d : 教育・訓練部(Ausbildung)

II a : 第1副官部(1. Adjutant) : 将校人事担当

- II b : 第 2 副官部 (2. Adjutant) : 下士官・兵人事担当
- III : 法務部 (Gericht)
- IV a : 会計・監理部 (Intendant)
- IV b : 軍医部 (Arzt)
- IV c : 獣医部 (Veteritar)
- IV d : 軍僧部 (Geistlicher) : 従軍神父、従軍牧師
- V : 輸送部 (Kraftfahrwesen) ⁽¹⁴⁷⁾

この中で、I c (情報部) は、対敵情報 (Feindaufklärung), 防諜 (Abwehr) 及び士気の振作 (Geistige Betreuung) を担当していた。

ここで、軍と S S 特別行動隊との公式な関係を考える上で問題になるのは、軍司令部の軍情報部 (I c) の防諜 (Abwehr) 担当 (AO) であり、更にその指揮下にあつて、S S 特別行動隊と任務が近接している秘密野戦警察 (GFP: Geheime Feldpolizei) ⁽¹⁴⁸⁾ と国防軍野戦憲兵隊 (Feldgendarmerie) であった。

秘密野戦警察 (G F P) は、国家保安本部の指示により秘密国家警察 (Gestapo) から陸軍部隊に保安警察業務 (防諜) の実施のために派遣された警察部隊であり、野戦憲兵隊は、国防軍固有の軍事警察組織で、軍内の司法警察業務を行った。

両組織の軍集団後方地域における編成と任務は、次の通りである。

「1) 秘密野戦警察 (G F P : Geheime Feldpolizei)

a 編成

秘密野戦警察は警備師団に所在する野戦警察警視 (Leitender Feldpolizeidirektor) の指揮を受け、野戦警察警部 (Feldpolizei Kommissar) の指揮する中隊 (G r u p p e) 単位で行動する。

中隊は更に野戦警察警部補 (Feldpolizei Sekretar) を長とする小隊 (V o r k o m m a n d o) より成る。

b 任務

- a) 国家反逆罪を構成する犯罪、謀略、破壊工作、敵対宣伝、及び秩序の紊乱の摘発と破砕
- b) 部隊及び軍内組織のあらゆる保全的事項に対する助言
- c) 軍集団地域の保全のための措置の実施及びその監督
- d) 野戦憲兵隊及び保安警察任務に属さない保安警察業務の実施
- e) 特別状況下で必要な捜索活動の実施

2) 野戦憲兵隊 (Feldgendarmerie)

a 編成

野戦憲兵隊は陸軍固有の組織で、中・少尉の指揮する小隊毎に行動する。

- b 陸軍部隊内の規律秩序の維持、交通統制、捕虜の取扱い、及び民間人による部隊に対する、あるいは軍人の一般民間人に対する犯罪・非違行為の捜査、取締りを行う。

なお、野戦憲兵は陸軍の軍服を着用し、その際左の腕と袖に野戦憲兵記章を付け、職務執行時には、軽金属製の野戦憲兵標識を首に掛ける。野戦憲兵隊は、状況により現地の保安要員 (O d i) により増強される。⁽¹⁴⁹⁾」

更に、軍集団後方地域には野戦憲兵隊の他に緑色の制服を着用したドイツ警備警察 (Gendarmerie) が存在し、高級 S S - 警察指揮官 (H S S P F) の指揮を受けて同地域の秩序の維持に当たると共に軍集団後方地域の軍政から民政への移管の際の任務引継ぎの準備を行っていた⁽¹⁵⁰⁾。ドイツ警備警察 (Gendarmerie) は、ドイツ本国では、都市部での一般制服警察

である秩序警察（Orpo）に相当する地方、郡部における一般制服警察であった。

第3節 更なる協定の締結

前述のヴァグナー・ハイドリヒ協定によって、SS特別行動隊は正式に軍作戦地域内での行動が認められたが、第一線戦闘地域への立ち入りは実質的には認められていなかった。この事はハイドリヒにとってSS特別行動の任務遂行に関して大きな懸念事項であり、その打開の為の新たな交渉が5月から国家保安本部と陸軍兵站総監ヴァグナー少将との間で開始された。当初、国家保安本部側は第IV局長ミューラーSS少将がハイドリヒの代理として交渉にあたったが、その傲慢さが不評を買い、第VI局長ヴァルター・シェーレンベルク（Walter Schellenberg）SS少将に交替した。ハイドリヒはシェーレンベルクに対して、第一線戦闘地域でSS特別行動隊の行動が可能になれば、軍との関係においてSS特別行動隊の立場は強化され、資金面でも人員面でも有利になると説明して交渉にあたらせた。実際にSS特別中隊の第一線地域での行動は、ユダヤ人・ボルシェビキを早く捕らえる為に必要不可欠であった。

国家保安本部は総統命令を示し、これは総統の意志であるとして交渉を進め、5月末、両者はSS特別行動隊が軍団の完全な統制下で行動する事を条件に、第一線戦闘地域、すなわち軍団作戦地域での行動を承認する協定に調印したと言われている。残念な事にこの時に協定文書は未だに発見されていないが、戦後出版されたシェーレンベルクの回想録とニュルンベルク継続裁判でのシェーレンベルクの証言からその概要を知ることができる⁽¹⁵¹⁾。

この協定の締結によってSS特別行動隊の第一線戦闘地域での行動が認められた事により、SS特別行動隊は東部作戦軍の全ての作戦地域（戦闘

地域＝軍団作戦地域、軍後方地域、軍集団後方地域）での行動が可能となった。

更に各軍集団は、陸軍総司令官通達を敷衍する為にSS特別行動隊と東部戦線共通の行政協定を締結していた。その協定によれば、軍作戦地域においてSS特別行動隊は、将校10名、下士官・兵50名より成るSS特別中隊(SK)毎に行動するものとされ、軍団作戦地域では軍団に対して、その活動を通報し、その統制を受けた。軍集団後方地域においては、SS特別行動隊はSS特別行動中隊(EK)毎に行動することが認められ、軍集団司令官に対しては、軍団に対してよりもより独立的に行動できた。しかし、原則的には軍集団後方地域の警備師団に常時その行動を通報する事になっていた⁽¹⁵²⁾。

以上の様に、東部作戦軍作戦地域内では、当然の事ながら陸軍部隊の作戦行動が全てに優先し、これに関しては軍の司令官がSS特別行動隊に対して強力な統制権を持っていた。特に戦闘地域では、SS特別行動隊は完全に軍団の統制下にあり軍団の承認がなければ任務遂行も不可能であった。しかし、後方地域では軍の作戦行動を妨害しない限り、SS特別行動隊は軍の兵站上の統制を受ける外は保安警察・保安情報部長官の指示の下に比較的自由に政治的特別任務の遂行が可能であった。事実、後方地域では、定められた部隊単位での作戦境界の完全な通行の自由が保証されていた⁽¹⁵³⁾。

ちなみにSS特別行動隊が兵站面で完全に軍の支援に依存していた事は、双方の部隊末端での接触の機会を増大させ、やがて陸軍部隊側に微妙な意識の変化をもたらす事になる。

更に陸軍とSS特別行動隊との関係を考える上で考慮しなければならないのは、もう一つ別の指揮系統が存在した事である。東部作戦軍占領地域にはドイツ帝国やポーランド総督領の地域と同様に、SS長官兼ドイツ帝

国全国警察長官であるハインリヒ・ヒムラーの代理者として高級SS - 警察指揮官(HSSPF:Höherer SS-und Polizeiführer)が配置され、地域内の保安警察と秩序警察及び陸軍の指揮下にはない武装SS部隊を統括していた。SS特別行動隊も当然、保安警察の一部であるので高級SS - 警察指揮官の指揮を受ける事になっていた。しかしながら、作戦行動に関しては保安警察・保安情報部長官及び国家保安本部の指揮下にあったので、SS特別行動隊に対しては、SS長官ヒムラーから高級SS - 警察指揮官経由する指揮系統と保安警察・保安情報部長官・国家保安本部、つまりハイドリヒからの指揮系統の二重の指揮関係が存在したのである。

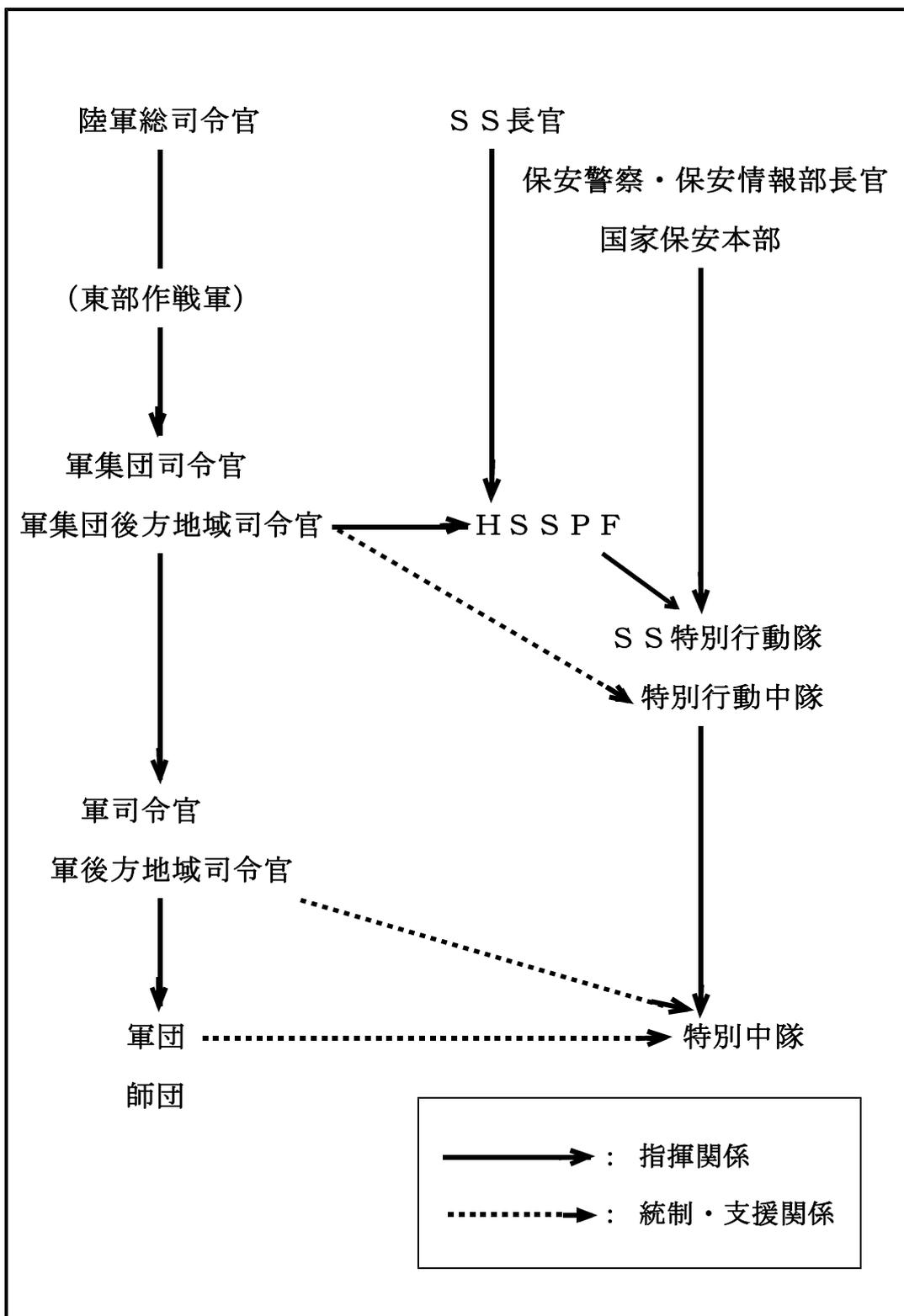
東部作戦軍作戦地域内での高級SS - 警察指揮官(HSSPF)は、各軍集団に1名ずつが配置され、それぞれ高級SS - 警察指揮官(北ロシア: HSSPF Rußland Nord、中央ロシア: Rußland Mitte、南ロシア: HSSPF Rußland Süd)と呼ばれた。軍集団内の高級SS - 警察指揮官は、各軍集団後方地域司令官の指揮を受ける事になっていたので、東部作戦軍とSS特別行動隊との関係はヴァグナー・ハイドリヒ協定の外に、この様に軍集団後方地域司令官から高級SS - 警察指揮官(HSSPF)経由の指揮系統も存在し、一層複雑なものとなっていた。

ちなみに、高級SS - 警察指揮官(南ロシア)は、SS・警察大将フリードリヒ・イエッケルン(Friedrich Jeckeln)であったが、階級の点からもSS特別行動隊隊長のSS少将・SS大佐より高位であり、公式の指揮関係以上に高級SS - 警察指揮官のSS特別行動隊に対する優位さが伺われる。これに対して各軍集団後方地域の司令官の階級は陸軍大将であり、また陸軍とSS・警察は元々別の組織であり、更に1941年の時点では軍作戦地域内での軍の他の組織に対する権威は絶対的であったので、軍集団後方地域での指揮関係については、いずれの軍集団でも軍とSS・警察と

の間で問題は生じなかったと考えられる。

東部作戦軍とSS特別行動隊の対ソ連戦開始時の公式の関係を図示すると次頁の様になる。

第7図：ドイツ陸軍とSS特別行動隊の公式の関係



(著者作成)

第6章 東部作戦軍とSS特別行動隊の実際の関係

第1節 軍集団及び軍集団後方地域

1941年9月24日、南方軍集団司令官フォン・ルントシュテット元帥は隷下部隊に対して、敵国軍隊以外の敵性勢力に対する措置に関する次の様な命令を下達した。

「 ドイツ帝国に対する敵性勢力との戦い

敵性勢力（共産主義者、ユダヤ人等）に対する調査と戦いは、それが敵国軍隊が関与したものでない限り、それに対する責任を有するSS特別行動隊の専管事項である。

国防軍軍人軍属各個の独断先行とユダヤ人住民に対するウクライナ人の暴力行為に荷担する事を禁止する。SS特別行動隊の職務遂行に際して、これを見物する事も写真撮影する事も禁止する。

この禁止事項は全部隊に徹底させ、その実行の責任は規律維持の責任を有する各級指揮官にある。違反行為は如何なる場合も調査し非違が明らかになれば厳罰に処する。

フォン・ルントシュテット (154)」

この命令は南方軍集団の非軍人たる敵性人（共産主義者、ユダヤ人等）対処の基本方針を定めたものであり、これら敵性人に対する措置はSS特別行動隊に全て任せ、軍は一切関与しないと言うものであった。生粋のプロイセン軍人であるフォン・ルントシュテット元帥にとって、非軍人敵性人に対して軍が直接手を下す事は栄光あるドイツ陸軍の伝統を汚す事に外ならないのである。しかし、事態はそれほど単純ではない。この命令を更に検討するといくつかの問題点が浮かんでくる。

まず、敵性勢力との戦いは敵国軍隊が関与しない限りSS特別行動隊に

任せると言う事は、それが敵国軍隊の関与があると判断されれば当然軍が直接対処すると言う事である。それは、対パルチザン戦の開始と共に大きな意味を持つ事になる。次に、ユダヤ人に対する不法行為に国防軍軍人軍属が個人で関与する事は禁止されているが、それは逆に命令による部隊行動であれば許容されるとも考えられる。これも、やがて現実の問題となってくる。

元々、共産主義者、ユダヤ人に対する措置は世に言う「コミッサール（政治委員）命令（Kommissarbefehl）」で定められていた。この命令は、ヒトラーが3月30日に総統官邸で東部作戦軍参加予定の高級指揮官に対して行った訓示を明文化したもので、その要旨は「相対立する二つの世界観の間の闘争で、ボルシェビズムは社会的犯罪であり未来にとってこの上なく危険なものである。それ故に抹殺されねばならない。その際ボルシェビキ政治委員と共産主義インテリは中核的腐敗毒であるから完全に殲滅しなければならない。これは軍法会議で処理する問題ではない。軍隊指揮官はその事を良く認識しなければならない。東方では非情さが未来の為の優しさである。」と言うものであった⁽¹⁵⁵⁾。

「コミッサール命令」では、具体的に次に掲げる者を戦時国際法上の戦闘員もしくは捕虜、あるいは非戦闘員として扱う必要はなく、犯罪者として直ちに処刑する事を命じていた。

- 「1） コミンテルンの全ての役員（共産主義職業政治家）
- 2） 共産党各級委員会の委員及び職員
- 3） 政治委員（コミッサール）
- 4） 共産党・国家に役職を有するユダヤ人
- 5） その他の急進分子⁽¹⁵⁶⁾」

ヒトラーは5月13日の指令において、軍構成員とその指揮下にある警察要員による即決処刑の実行について、軍の作戦を脅かす恐れのある場合を除き免責する事を明らかにしていた。

しかし、「コミッサール命令」は、少なくとも軍籍にあるソ連軍の政治委員（政治将校）を戦時捕虜として扱わないと言う点で西欧の伝統的戦争規範を破壊するものであり、当然国防軍首脳の反発を引き起こした。それにもかかわらず、軍の反対を押し切って「コミッサール命令」は1941年6月6日国防軍最高司令部からカイテル元帥名で下達され、その伝達も30部のみ軍集団司令部等に限定配布、それ以下へは口頭で行うものとされた⁽¹⁵⁷⁾。

南方軍集団では、6月18日軍集団参謀長ゲオルグ・フォン・ゾーデンシュテルン(Georg von Sodenstern)大将が隷下部隊の将官クラスの指揮官に対して口頭で下達した⁽¹⁵⁸⁾。軍がどの程度「コミッサール命令」を実行したか細部は今だに不明であるが、軍集団隷下部隊からの実行報告の存在から一部の部隊で政治委員の処刑が実行されたのは間違いない。また東部作戦軍内の一部では命令が伝達されなかったとも言われている。例えば中央軍集団第2装甲集団司令官グデーリアン上級大将は戦後の回想録で、第2装甲集団はこの命令には関与せず中央軍集団では隷下部隊に伝達されなかったと述べている⁽¹⁵⁹⁾。しかしながら、実際に、10月までに総計183件の第2装甲集団隷下の軍団によるソ連軍政治委員処刑実行報告が存在しており、グデーリアン上級大将の主張は信憑性がないと言わざるを得ない⁽¹⁶⁰⁾。

ここで「コミッサール命令」とフォン・ルントシュテット元帥の南方軍集団命令の関係を考えると、「コミッサール命令」ではソ連軍内の政治委員を軍人とは認めず犯罪者として即刻処刑する事になっていた。一方、ルントシュテット命令では敵国軍と関係のないユダヤ人、共産主義者には軍

は関与しないので、捕らえた政治委員を軍自ら処置する事は政治委員を敵国軍人と認めた事になり、しかも、それを捕虜として扱わず犯罪者として処刑するのは明白な戦時国際法違反になる。両者にはこの様に大きな矛盾があった。

しかし、そこには抜け道が存在した。「コミッサール命令」によれば、後方地域では捕らえた政治委員をSS特別行動隊に引き渡す事になっていたが、フォン・ルントシュテットの命令でも敵国軍に関わりのない敵性人はSS特別行動隊に任せるのであるから、軍が政治委員を軍人と認めないのであれば、当然後方地域ではSS特別行動隊に引き渡されSSの手によって処刑される事になる。

実際にドイツ陸軍部隊によって捕らえられたソ連軍捕虜の後送系統は次の通りであった。まず第一線部隊に捕獲された捕虜は、各部隊の捕虜収集所(Gefangenensammelle)に收容され、ここから軍後方地域の捕虜収集所(Armee-Gefangenensammelle)へ各部隊自身もしくは野戦憲兵隊によって後送され、ここから更に軍集団後方地域の捕虜移送收容所(Durchgangslager:Dulag)に後送されて警備師団の管理下に置かれる。その後、民政地域もしくは国防軍最高司令部(OKW)管理地域の捕虜收容所(Kriegsgefangenen-Mannschaftensstammle)へ後送されて收容される事になっていた⁽¹⁶¹⁾。

ここで「コミッサール命令」との関係で問題になるのは、捕虜後送過程での政治委員の選別であった。第一線部隊が捕獲する捕虜は時に膨大な数に上り(独ソ戦全期間のソ連軍捕虜の総数は約500万人と言われている)、尋問を行う十分な人手も時間もなかった。そこで主に選別が行なわれるのは後方地域の捕虜収集所及び移送收容所と言う事になる。

軍は独自に次の様な分類と取扱区分を定めていた。

- 1) 民族ドイツ人、ウクライナ人、バルト人： 通訳として使用可
- 2) アジア系人、ユダヤ人、ドイツ語を話すロシア人： ドイツへ後送しない
- 3) 政治委員、その他の過激分子：後送せず、所長の権限で処分
- 4) ソ連軍将校、その他：作戦上の必要がない限り民政地域へ後送
ただし、軍集団後方地域においては、3)についてはSS特別行動隊へ引き渡す。 (162)

しかしながら、この様な取り扱い区分が定められているにもかかわらず、多くの収容所では選別、処刑に消極的であり、SS特別行動隊の収容所内への立ち入り、選別の実施に際してもこれを妨害した。その結果、後方地域収容所内での政治委員の選別、処刑は少数に留まる結果となった。

更に第一線部隊からは敵の戦意を強めると言う理由で、軍捕虜収容所からも命令実施の凍結の要求が出されたが、ヒトラーはあくまでも命令の実行を要求した。そこで陸軍総司令部は10月7日、SS特別行動隊に対して収容所内への立ち入りと収容者の選別を認める通達を後方地域に下達した⁽¹⁶³⁾。これによってSS特別行動隊は、後方地域内の収容所から政治委員を選別、連行し、処刑ができるようになった。後方地域捕虜収容所におけるSS特別行動隊に対する協力は、陸軍のSS特別行動隊の諸活動に対する協力の第一歩であった。

しかし、軍集団後方地域司令官はすでに開戦の6日後の6月28日に「作戦境界閉鎖に関する命令」において捕らえたソ連軍捕虜の内、政治的に重要人物についてはSS特別行動隊に引き渡す事を命じていた⁽¹⁶⁴⁾。それを考えると軍集団後方地域内捕虜収容所でのSS特別行動隊に対する非協力は「コミッサール命令」そのものに対する嫌悪より、むしろSSが軍施設に立ち入る事に対する反発、すなわち軍の面子への拘りの様である。

ユダヤ人については、「コミッサール命令」では処刑すべき者として共産党、国家に役職を有する者に限定していたが、実際のSS特別行動隊の作戦では当初こそユダヤ人殺害は限定的だったものの、やがて無差別にユダヤ人を殺戮していったが、それが命令違反と言うわけではなかった。SS特別行動隊報告にはっきりと全てのユダヤ人と言う記述が現れる所から判断して⁽¹⁶⁵⁾、やはり開戦後にユダヤ人絶滅命令がSS特別行動隊に下達されたのは間違いないと思われる。しかし、現在までそれを裏付ける文書は発見されていない。

これに対して軍集団後方地域司令官は、隷下部隊にフォン・ルントシュテットの命令の主旨に則り国防軍軍人軍属のユダヤ人殺害への関与を禁ずる一方で、SS特別行動隊から要請があれば地域の封鎖等の支援と情報の提供を指示し、SS特別行動隊に対しては活動報告を軍集団後方地域司令部情報参謀へ提出する事を命じている⁽¹⁶⁶⁾。実際に軍集団後方地域司令部情報要約書には、ほぼ毎回清掃活動と言う項目にSS特別行動隊によるユダヤ人殺害報告が記載されており⁽¹⁶⁷⁾、軍集団後方地域は詳細にユダヤ人殺戮の実態を承知していた。

また軍集団後方地域内部隊による兵力提供等の協力も行われ、特にSS特別行動隊の報告には随所に「軍の緊密な協力の下に」と言う記述が現れる⁽¹⁶⁸⁾。しかし、陸軍部隊が直接手を下す事はあったが、その数はそれほど多くはなかった。すなわち軍集団及び軍集団後方地域はSS特別行動隊によるユダヤ人殺戮を良く承知し、ヴァグナー・ハイドリヒ協定に基づく兵站支援の外に部隊による間接的支援行動を実施し、直接殺害に荷担する事には消極的であったが、異議を唱える事はなかった。結局対ソ連侵攻初期の軍集団及び軍集団後方地域はSSのユダヤ人殺戮を黙認していたと考えられる。しかし、戦局の進展とともに事態は変わってくる。まず戦争遂行の為の人力確保の観点から軍はユダヤ人を労働力として活用する事を

考え、ユダヤ人の絶滅に反対する。

これに対してヒトラーは「ボルシェビキに対しては断固たる闘争が必要であり、その支持者たるユダヤ人に対しても同様である。そのため国防軍によるユダヤ人の使用はいかなる補助兵力としても禁止する。唯一の例外はドイツ人の監督下を実施する集団奴隷労働である。」と厳命しユダヤ人活用の道は閉ざされた⁽¹⁶⁹⁾。

次に問題になったのはパルチザンであった。軍集団後方地域にとって後方地域の安全の確保は兵站、特に補給、後方連絡線の確保の為の至上命題であったが、次第にパルチザンによる後方攪乱が激化し、その対策が急務となった。しかし、ドイツは対ソ連侵攻に300万以上の兵力を投入し、後方の警備は若干の警備師団と補助兵力に頼らざるを得なかった。実際に後方地域の警備に動員された戦力には、保安警察や秩序警察の警察部隊、武装SSの予備部隊、ナチ党の諸組織からドイツ消防連隊まで存在した。その様な状況で軍集団後方地域司令官がSS特別行動隊を活用しないわけがなかった。軍集団後方地域司令官は高級SS - 警察指揮官に対して警備任務を課し、その指揮下にあるSS特別行動隊に対しても任務分担がなされた⁽¹⁷⁰⁾。

しかし、SS特別行動隊の目論見は違っていた。SS特別行動隊は対パルチザン戦にはもちろん参加したが、対象のユダヤ人をパルチザンに加わっている者だけではなく全住民に拡大して殺戮に拍車をかけた。SSの主張はパルチザンは則ちユダヤ人であり、女子供もパルチザンの連絡員や情報収集員の役割を果している。それ故全員を抹殺しなければならないのである⁽¹⁷¹⁾。パルチザン戦の激化はSSにとって絶好の口実を与えたのみならず、やがて陸軍側へも影響を及ぼす事になる。

程なく、保安警察・保安情報部からパルチザン＝ユダヤ人が国防軍の襲撃を計画しているとの情報が寄せられるようになり、軍集団後方地域司令

官は軍集団後方地域の安全の確保の為自ら大規模な対パルチザン戦を計画して実施した。その際、SS特別行動隊のみならず軍集団後方地域内陸軍部隊によってユダヤ人殺害が実行されていった⁽¹⁷²⁾。この場合、殺害の対象となったのは本当にパルチザンに関わっていたユダヤ人だけではなく、パルチザンとは無関係な多数のユダヤ人一般住民であった。更に時としてそれはロシア人一般住民の大量虐殺にエスカレートし、その余りの残虐さにロシア人義勇兵が殺戮の中止を要求して戦闘への参加を拒否する程であった⁽¹⁷³⁾。しかし、陸軍部隊によるこのような活動も、パルチザン活動そのものがソ連軍の作戦に連携して実施されていると認識されていたので、ルントシュテット命令には抵触しないと考えられた。

軍は対ソ連侵攻当初、安全上の最大の脅威はユダヤ人であると言うSSの主張を本気では信じてはいなかった。しかし、パルチザンの脅威が現実のものになる中でボルシェビキとユダヤ人同一(ボルシェビキ=ユダヤ人)と言うナチ・プロパガンダの影響も災いして、脅威の対象をパルチザン-ユダヤ人、更に全ユダヤ人へと拡大する事になったのである⁽¹⁷⁴⁾。

もう一つの陸軍部隊によるユダヤ人殺害のケースは、ドイツ陸軍軍人に対するテロが発生した場合であった。ドイツ陸軍軍人が公然、非公然を問わず殺傷された場合、当然占領軍はそれに対する報復を実施した。その際、軍はユダヤ人をまず報復の対象とし、ドイツ兵死者一人に対して数十倍のユダヤ人を殺害した⁽¹⁷⁵⁾。これも軍にとってパルチザンとユダヤ人は同一(パルチザン=ユダヤ人)と言う図式が成立していたとすれば当然の帰結であったと考えられる。

軍集団及び軍集団後方地域でのドイツ陸軍によるユダヤ人殺戮に対する関与は、SS特別行動隊の活動への非協力から容認へ、更に間接的協力から直接強力、自らの参加へと進んでいった。

第2節 軍及び軍後方地域

軍の、特に軍の前方地域（戦闘地域）におけるSS特別行動隊に対する関係は、軍司令官の性格によって異なっていた。親ナチ将軍として有名だったフォン・ライヘナウ元帥が軍司令官であった第6軍では、10月10日「東方地域における部隊の態度」と題する軍命令を下達し、隷下部隊に対して東部戦線での精神的指針を示した。その内容は次の様なものであった。

「ユダヤ・ボルシェビズム体制に対する戦争の最重要目標は、その権力手段の破壊とヨーロッパ文化圏に対するアジア的影響力の根絶である。

その目標達成の為に、部隊は従来の軍人精神は捨てるべきである。東方地域における軍人は、単に戦術原則に従った戦士であるばかりでなく、仮借なき民族主義理念の担い手であり、ドイツとその血縁民族に加えられた蛮行に対する復讐者である。

それ故に、軍人はユダヤ劣等人種に対する厳しいが正当な懲罰を充分理解しなければならない。更なる目標は国防軍の後方での反乱の芽を摘み取る事であり、経験的に言ってその反乱を唆すのは常にユダヤ人である。

前線後方の敵に対する戦いは未だ充分ではない。腹黒く残忍なパルチザンと墮落した女達が戦時捕虜となり、不十分な制服や民間人の服装をした狙撃者や浮浪者が正式の軍人のように扱われ、捕虜収容所へ送られている。捕虜のロシア軍将校は、ソヴィエトの工作員が自由に通りを往来し、ドイツの野外給食を受けていると嘲笑している。このような部隊の態度は、思慮分別に欠けると言わざるを得ない。今や、軍の各級指揮官は現在の戦いの意義を喚起する時である。

国防軍により面倒を見る義務のない住民や戦時捕虜に対して軍の炊事所で給食する事は、煙草やパンを与えるのと同様に誤まった人道主義である。

故国では欠乏に耐えており、指導部は困難の打開に努力している時に、たとえそれが敵からの戦利品であっても敵に与える様な事があってはならない。それは、我々の補給にとって不可欠なものである。

ソヴィエト軍は、後退に際してしばしば施設に放火している。部隊は宿営施設として確保する必要がある限りにおいて消火に関心を持つべきである。それは絶滅戦争の中で、建物の形でのかつてのボルシェビズム支配の象徴の消滅である。東方では、これらの建物は歴史的にも芸術的にもこの際、何の役割も果たさない。戦時経済上重要な原材料と生産地については、指導部から指示が与えられる。

戦闘中の部隊の後方の住民を完全に武装解除する事は、長く脆弱な補給線を考慮すれば緊要な事である。可能な場所では捕獲した武器、弾薬は隠蔽し警備する必要がある。戦闘状況上それが不可能な場合は、それらは破壊しなければならない。軍の後方で、パルチザンによる武器使用事案が確認されれば厳格なる措置により秩序を維持すべきである。この措置は、その場に居れば陰謀を阻止できるか通報できたであろう男性住民に対して実施されねばならない。事態の推移を傍観する大多数の表面上だけの反ソ連勢力の無関心の態度は、ボルシェビズムに敵対する積極的な協力へと決心の変更を強要されねばならない。それでなければ、ソヴィエト体制の構成員と見なされ、そう扱われるのを覚悟すべきである。ドイツの報復への恐怖の方がボルシェビキの残敵の脅しより強力でなければならない。

軍人は将来の全ての政治的考慮の内、次の二点を実行しなければならない。

- 1) ボルシェビズムの誤謬とソヴィエト国家、その軍隊の殲滅
- 2) 異人種による陰謀と残忍な行為の一掃によるロシアにおけるドイツ国防軍の生命の安全の確保

これらの達成により、アジア・ユダヤ的危険からドイツ民族を救うと言う我々の歴史的使命を果たす事ができる。

フォン・ライヘナウ (176) 」

フォン・ライヘナウはこの命令によって、隷下部隊に完全にナチ・イデオロギーに基づく対ソ連戦の遂行を要求しているが、ドイツ国防軍最高司令部は対ソ連侵攻開始時に「ロシアにおける部隊の態度に関する指針」と題する次の命令をすでに参加部隊に下達していた。

- 「1) ボルシェビズムは国家社会主義のドイツ国民にとって不倶戴天の敵である。この破壊的世界観とその信奉者の存在がドイツにとっての戦争理由である。
- 2) この戦争はボルシェビキ扇動者、不正規兵、破壊工作者及びユダヤ人に対する情け容赦のない手段と顕在潜在を問わぬ全ての抵抗の一掃を要求する。
- 3) 赤軍の全ての構成員に関しては、それが捕虜であっても最大限の注意が要求される。何故ならば、卑怯な戦闘法が予想されるからである。特に赤軍のアジア人兵士は、頑固で予想外であり、更に卑劣で非情である。
- 4) 敵部隊を捕獲した場合は指揮官を直ちに部隊より分離すべきである。
- 5) ドイツ軍兵士は、ソ連では純粹単一な住民に直面する事はない。ソ連は多数のスラブ、コーカサス及びアジア人の統合国家形態であり、ボルシェビキ支配者の力によって統一されている。ユダヤ人はソ連での広範な代表者である。

6) 多数のロシア人住民、特にボルシェビズム体制にその場しのぎの田舎の住民は明らかにボルシェビズムに批判的である。

非ボルシェビキ・ロシア人の間では民族意識と宗教心が結び付いている。ボルシェビズムからの解放への喜びと感謝がしばしば宗教活動に表わされるであろう。感謝祭と行列祈祷式は妨害されたり邪魔されたりする事はない。

7) 住民との会話と婦人に対する態度は特に注意が必要である。多くのロシア人は話せなくともドイツ語を理解できる。

敵情報機関は既に占領地において軍事上重要な施設、手段に関する情報収集活動を開始している。

それ故に、いかなる不注意、目立った態度、愚鈍も重大な結果をもたらす可能性がある。

(以下省略)

フォン・ライヘナウ (177) 」

この命令は東部作戦軍に対してボルシェビズムとユダヤ人には厳しく対処し、ロシア人住民は寛大に扱うと言う基本方針を示している。各軍集団、軍も概ねこの基本方針に則り行動しているが、ただ前進速度が早く攻撃力の中心である装甲集団では後方地域を持たない事もあって、一般に野戦軍より住民及びユダヤ人対処が緩かであった。例えば、フォン・クライスト上級大将の第1装甲集団ではSS特別行動隊との接触をできるだけ少なくする為にSS特別行動隊指揮官の軍情報参謀訪問に限定し、それ以外の接触は秘密野戦警察を通じて行うように指示している⁽¹⁷⁸⁾。また中央軍集団はグデーリアン上級大将の第2装甲集団に対して、ユダヤ人も共産主義体制の下で辛酸を嘗めて来たのであるから、その対処は占領後に実施するように指示し、また共産黨員、コムソモール構成員についても共産党によ

って騙されて来たのは明らかであるので、彼らを免罪して危害を加えるのを禁止している⁽¹⁷⁹⁾。

それに比べてライヘナウ命令は遥かに厳しく、東部作戦軍の中で模範的な命令としてヒトラーに感銘を与えているだけに、フォン・ライヘナウは親ナチス將軍の面目躍如といった所であろう。実際に第6軍のSS特別行動隊に対する関係は緊密であり、対ソ連侵攻開始日の6月22日には軍情報参謀は隷下軍後方地域司令官に対して、ルブリンのSS特別中隊の軍作戦地域への配置とそれに対する支援を命じ、SS特別中隊に対しては連絡強化の為に連絡将校の軍司令部への派遣を要請している⁽¹⁸⁰⁾。またSS特別行動隊以外の特別部隊に対しても、SS特別中隊の任務に関する連絡と調整を軍司令部が実施している⁽¹⁸¹⁾。更に、フォン・ライヘナウは軍後方地域の安全確保の為にHSSPFイエッケルンSS・警察大将に対して指揮下のSS及び警察部隊の派遣を要請している⁽¹⁸²⁾。

この様にフォン・ライヘナウはSSを補助兵力として最大限利用する一方で、秘密野戦警察が捕らえた不審人物と女子供を除く捕虜収容所の被収容者のSS特別行動隊への引き渡しを命じ⁽¹⁸³⁾、隷下の第29軍団に対しては9月14日キエフ東方の包囲殲滅戦の最中にもかかわらず軍団作戦地域へのSS特別中隊4aの配属とその支援を命じている⁽¹⁸⁴⁾。また、ハリコフ戦の真っ只中の第55軍団に対しても、10月18日第29軍団と対してと同様の命令を出して⁽¹⁸⁵⁾、SS特別行動隊に対して最大限の協力を惜しまなかった。

これに対して、後に自分自身が反ヒトラー運動に参加する事になるフォン・シュチュルプナーゲル大将指揮下の第17軍は第6軍に比べてかなり緩かで、危険分子のSS特別行動隊への引き渡しの可能性は残しているものの、武器を使用した抵抗の生じた場合のみ大隊長以上の命によって武力制圧を認め、それ以外の一般住民への実力行使は禁止している⁽¹⁸⁶⁾。

第11軍司令官フォン・マンシュタイン上級大将も11月20日、ユダヤ・ボルシェビズム体制の殲滅を指示する命令を下達した。命令の大半は、ユダヤ・ボルシェビズムはドイツにとって相容れざる敵であるので容赦なく殲滅せよと言う「ライヘナウ命令」と基本的には同じだが、具体的に実行すべき事項は、夜間の兵の単独行動を禁止する、車両移動時には必ず武器を携行せよ等、自衛の為の注意事項が列挙されており「ライヘナウ命令」に比べればかなり緩かである⁽¹⁸⁷⁾。

そうは言っても軍作戦地域でのSS特別行動隊との実際の関係は極めて親密であった。なぜならば、第11軍には1個SS特別行動隊(D)が配属されていた為に、第11軍とSS特別行動隊との接触の機会は他の野戦軍よりも遙かに多かった。

ヴァグナー・ハイドリヒ協定では軍作戦地域で行動できるのは1個SS特別中隊とされており、対ソ連侵攻作戦当初は第11軍でもそれが遵守されていたが⁽¹⁸⁸⁾、7月12日SS特別行動隊D隊長オーレンドルフSS大佐は第11軍司令官フォン・ショーベルト上級大将と会談し、軍作戦地域に他のSS特別中隊及びSS特別行動中隊を展開する許可を得、それと引き替えに第11軍はこれらのSS特別中隊を自由に運用できる事になり、両者の緊密度は更に深まった⁽¹⁸⁹⁾。

1941年7月29日、第30軍団は、第11軍司令部に対してドニエプル川東方のヤムポール及びソロキ付近にルーマニアのベッサラビアを追放された大量のユダヤ人がいて、それが西へ向かっているのを発見したと報告した。それに対して第11軍司令部は、ドニエプル川渡河点でユダヤ人の移動を阻止して、その処置をSS特別行動隊に任せるように命じている⁽¹⁹⁰⁾。

8月7日、第11軍は第一線後方の平定、特に民間人の服装をしたロシア人パルチザンの掃討を命じ、関係隷下軍団とルーマニア軍団に対してそ

の旨を伝達している。また、隷下ルーマニア軍団に対しては特に政治文書、政治的不審人物を捕らえた場合はSS特別行動隊へ引き渡すように命じている⁽¹⁹¹⁾。

第11軍野戦憲兵隊は、捕らえたロシア人不審人物ウラジミール・ロマネンコの尋問とその処置をSS特別中隊11aに依頼し、これに対してSS特別中隊11aは9月9日ロマネンコを精神障害者で無益と判断して処刑した旨報告している。こうして殺害された精神障害者、ジプシー、アジア系住民の総数は数万人に及ぶと言われている⁽¹⁹²⁾。

この様に第11軍は、SS特別行動隊に活動の細部まで逐一報告させ、前進経路についても指定する等、SS特別行動隊を完全にその統制下に置いて前線後方の安全の確保の為に積極的に運用した。また、SS特別行動隊の任務の為に協力し、第553軍後方地域を通じて宿営、給養等の兵站支援も行っていた⁽¹⁹³⁾。

第11軍作戦地域ではルーマニア軍も行動していたが、実際にSS特別中隊10bは7月6日からルーマニア軍の指揮下に入った。ルーマニア軍はSS特別中隊に積極的に協力し、7月8日SS特別中隊が100人のユダヤ人を捕らえて処刑したのに対して、ルーマニア軍は自隊で7月8日、9日の両日で500人以上のユダヤ人を射殺している。この様にルーマニア軍及びルーマニア警察はユダヤ人殺害に積極的で単独でも大量のユダヤ人を殺害していた事がSS特別行動隊Dの状況報告によって明らかになっている⁽¹⁹⁴⁾。

これに対してドイツ同盟国軍の中で、イタリア軍はユダヤ人への措置に消極的であった。次の一例がそれを示している。8月8日、第11軍司令部はオルシャンカ地区で行動中であったSS特別行動隊Dに対して、イタリア軍はユダヤ人殺害を嫌悪しているので、イタリア派遣軍団が同地区へ進出して来るのを理由に、SS特別行動隊Dの同地区からの退去を命じて

いる⁽¹⁹⁵⁾。

更に軍後方地域で問題になるのは、軍集団後方地域の場合と同様に軍捕虜収容施設における「コミッサール命令」の実行である。軍後方地域でも軍後方地域捕虜収集所内での政治委員及びユダヤ人の軍自身による処刑は比較的少数に留まり、特別選別によるSS特別行動隊への引き渡しにも大抵の所長は消極的であり、その数もそれほど多くはなかった。コルガの軍捕虜収集所では10月11日～16日までの間に、32,682人の新たな収容者の内ユダヤ人としてSS特別行動隊に引渡されたのは75人にすぎない⁽¹⁹⁶⁾。また、SS特別行動隊による捕虜収集所への立ち入りも所長の抵抗に遭ってほとんど不可能の状態であった。しかし、10月の新協定成立後は軍集団後方地域の場合と同様にSS特別行動隊の捕虜収集所への立ち入りも次第に緩和されていった。

軍捕虜収集所、特に所長クラス（少佐・大尉）のSS特別行動隊に対する非協力あるいは嫌悪は、少数の例外（少数とは言えSS特別行動隊をはっきり拒否し上級部隊にその行動を抗議した将校がいた事は特記すべき事ではあるが）を除いて⁽¹⁹⁷⁾軍人倫理に基づく服従と良心の問題ではなく、むしろ面倒な事はできるだけ後に送ろうと言う事勿れ主義と軍の面子への拘りに起因していると考えられる。

軍後方地域内のSS特別行動隊は軍後方地域司令官の統制下にあり、行動地域、前進時期及び経路等を指定され⁽¹⁹⁸⁾、部隊の活動内容は全て軍後方地域司令部情報参謀に報告する事になっており⁽¹⁹⁹⁾、また、兵站面は軍後方地域兵站部隊から宿営、給養等の支援を受けていた。⁽²⁰⁰⁾軍後方地域司令官は後方地域の安全の確保の為にSS特別行動隊を運用し、関係部隊に通報するとともに地域内の野戦憲兵隊と秘密野戦警察に対してSS特別行動隊との連絡、調整を緊密にするように命じていた⁽²⁰¹⁾。また、SS特別中隊・SS特別行動中隊レベルでの軍後方地域でのカウンターパ

ートは軍政を実施する地区司令部であり、両者の関係も極めて緊密かつ良好であった⁽²⁰²⁾。

8月31日、ニコライエフの地区司令部 I / 853 は、8月末の1週間に同司令部の了解の下にSS特別行動隊によって地域内で直接軍には関係のない230人のユダヤ人が捕らえられて処刑されたが、軍施設への侵入により捕まった5人のユダヤ人は地区司令部に引き渡され、地区司令部自らの手で公開絞首刑に処した事を第553軍後方地域司令官に報告している⁽²⁰³⁾。

任務が近接していた秘密野戦警察とSS特別中隊はしばしば共同でユダヤ人狩りを行い⁽²⁰⁴⁾、野戦憲兵隊の場合は後方地域での巡察勤務がSS特別中隊の任務と競合した。そこで最終的には、敵国軍人及びドイツ軍に直接関わる民間人については野戦憲兵隊が対処し、ユダヤ人及びその他の民間人はSS特別中隊が処置する事になり、野戦憲兵隊が巡察中あるいは哨所で捕らえた民間不審人物とユダヤ人はSS特別中隊に引き渡された。

次は不審者処理の典型的な一例である。12月11日、第683野戦憲兵隊第1分遣隊は拘束している5人の不審人物の内、軍隊手帳を所持していた1人は軍人と判断して軍捕虜収集所へ後送し、ユダヤ人と思われる1人はSS特別中隊に引渡し、残る3人については軍人と推定されるが軍隊手帳を所持していないので軍人とは確認出来ず、引き続き取り調べる事にした⁽²⁰⁵⁾。

やがてパルチザンの脅威が増して来ると、大規模な掃討作戦が軍後方地域司令官の指揮下で実施された。その際陸軍警備部隊のみならずHSSPF指揮下の警察部隊、武装SS部隊、更にSS特別中隊も参加した⁽²⁰⁶⁾。小規模な対パルチザン作戦は各部隊毎にも実施されたが、しばしば地区司令部の主導下に野戦憲兵隊、秘密野戦警察及びSS特別中隊の三者共同の作戦が実施された⁽²⁰⁷⁾。その際、パルチザン被疑者のみならず多数のユ

ダヤ人一般住民も殺害された。

ドイツ兵に対するテロの発生に際しては、その報復として陸軍警備部隊の単独での住民殺害が行われ、ユダヤ人住民が人質としてまず最初に殺された⁽²⁰⁸⁾。

これらのユダヤ人殺害を通じて陸軍地区司令部は、SS特別行動隊やルーマニア軍による軍後方地域内でのユダヤ人大量殺戮の容認から⁽²⁰⁹⁾、更に無差別なユダヤ人殺戮への荷担へとエスカレートしていった。

9月19日、SS特別行動隊Cの特別中隊は地区司令部指揮下の警備部隊と60名のウクライナ民警の応援を得て、ジトミールでユダヤ人狩りを実施し3,145人を殺害している⁽²¹⁰⁾。その外にもSS特別行動隊報告には随所に陸軍部隊の協力の文字が見える⁽²¹¹⁾。

また、SS特別行動隊側から軍後方地域部隊への協力も行われていた。11月20日の第553軍後方地域司令部報告によればSS特別行動隊はパルチザンから押収した武器、弾薬を地区司令部に引き渡しており⁽²¹²⁾、12月にはユダヤ人から没収した衣類と靴を軍捕虜収容所に提供し⁽²¹³⁾、更に、1942年2月12日にはシンフェロポール地区司令部の要請によりSS特別行動隊Dはユダヤ人から没収した120個の時計を軍に提供している⁽²¹⁴⁾。

この様に軍後方地域とSS特別行動隊の関係は、最終的には互いに持ちつ持たれつの関係へと進んで行ったのである。これは、軍の情報分野では一層顕著であった。軍司令部及び軍後方地域司令部情報参謀は現地人を保安要員として使用する場合、その審査をSS特別行動隊に依頼していたが、このSS特別行動隊の協力に対して、やがて軍側も両者間の協定を越えてSS特別行動隊の「政治的特別任務」を積極的に支援して行くようになった⁽²¹⁵⁾。

一方占領地域内のユダヤ人の存在に不安を感じるようになった地区司令

部もその対策にSS特別行動隊の援助を求め、その結果地域内でのSS特別行動隊によるユダヤ人殺戮を容認する結果となった。

ところで、SS特別行動隊はルーマニア軍政地域でも行動していたが、表面上の良好な関係とは裏腹に、トランスニストリアではルーマニア軍政当局からドイツ第553軍後方地域司令官に対して、ドイツ警察あるいはSS特別行動隊がルーマニア軍憲兵司令官を拳銃で脅す等の横暴、非行を行い、今後その再発を防ぐ為にSS特別行動隊とルーマニア軍政当局との間の明確な任務分担を要望している⁽²¹⁶⁾。

第3節 軍団作戦地域（戦闘地域）

SS特別行動隊のいくつかのSS特別中隊(SK)は第一線軍団地域で行動したが、その戦力は兵力は70～80名、装備火器も小火器だけで、ドイツ陸軍の自動車化軽歩兵二分の一個中隊に相当する程度に過ぎず、軍事的には取るに足りないものであった。その為、前線でソ連軍とまともに衝突すれば一溜りもなかったと思われる。それでも、その様な危険を冒してもSS特別中隊が努めてドイツ陸軍部隊とともに前方への早期の進出を図ったのは、無防備、無警戒な状態のユダヤ人を一刻も早く、一人でも多く捕捉殲滅したかったからに外ならない。

北ウクライナのジトミール周辺では7月後半、SS特別行動隊によって大規模なユダヤ人、共産主義者掃討作戦が実施された。その際、第6軍隷下のハンス・ラインハルト(Hans Reinhard)大将の指揮する第51軍団の部隊が支援し、その結果約200人のユダヤ人、共産主義者が捕らえられて処刑されている。またラインハルト大将は、10月10日のフォン・ライヘナウ元帥の「東方地域における部隊の態度」命令の下达の際も、軍団内の全ての兵に至るまでこの命令を徹底させる様に命じており、南方軍集団の軍団長の中で最も強くフォン・ライヘナウ命令に共鳴した將軍の一人

であった⁽²¹⁷⁾。

南ウクライナでは10月の段階でSS特別行動隊Dの5個SS特別行動中隊・SS特別中隊の内、2個SS特別中隊が第一線軍団と行動を共にしていたが、第11軍司令部は隷下の第30軍団と第54軍団に対して、それぞれにSS特別中隊10aと11aの配属とこれらに対する支援を命じている⁽²¹⁸⁾。

第30軍団と行動を共にしていたSS大尉ゼーツェンの指揮するSS特別中隊10aは、8月初めコジマにおいて第30軍団と共同で大規模なユダヤ人掃討を実施している。発端は一人のウクライナ人農婦による第647秘密野戦警察へのユダヤ人の集会の通報であった。この情報を受け取った第30軍団司令部は直ちにSS特別中隊10aに通報し、SS特別中隊は1個小隊を急派してコジマのユダヤ人地区を偵察させた。その結果、情報の信憑性が確認されるとSS特別中隊10aと秘密野戦警察、更に軍団司令部から派遣された400名の陸軍部隊がユダヤ人地区を急襲し、約400人のユダヤ人男性を捕らえ、更に98人がウクライナ人の協力で捕らえられた。その内175人は人質としてドイツ陸軍捕虜収容所に送られ、高齢者が釈放された以外の者は、24名から成る陸軍の銃殺隊と12名から成るSS特別中隊の銃殺隊によって処刑された。SS特別中隊10aは、その後も第30軍団と行動を共にしドニエプル川東方でユダヤ人殺戮を続けた⁽²¹⁹⁾。

SS少佐ツァップの指揮するSS特別中隊11aは7月13日、第54軍団作戦地域に入り⁽²²⁰⁾、第54軍団司令部と共に旧ルーマニア領ベッサラビアのキシニョフを占領した。そこでSS特別中隊11aはドイツ陸軍部隊とルーマニア地区司令部と協同して街の一角にゲッターを設立し、約1000人の16歳から60歳までのユダヤ人男性を収容してドイツ陸軍あるいはルーマニア軍に必要な労働力を提供した。また、ドイツ陸軍部

隊に死傷者が発生するとゲットー内の人質のユダヤ人を100人単位で殺していった⁽²²¹⁾。

この時期のSS特別中隊11aとドイツ陸軍部隊及びルーマニア軍との関係は良好で、ドイツ陸軍野戦憲兵隊は7月後半に捕らえたユダヤ人68人をSS特別中隊に引き渡し、SS特別中隊はそのユダヤ人は直ちに処刑されている。また、SS特別中隊11aはルーマニア占領軍に対して、市内のユダヤ人墓地が破壊され死体が通りに撒き散らされた事件は、SS特別中隊11aの仕業だと言う噂を否定する為の調査を要求し、それに対してルーマニア占領軍地区司令官ツドゥスィ大佐は嚴重な捜査の実施を約束している⁽²²²⁾。

8月2日、第54軍団司令部はSS特別中隊11aに対して、ジムポール、ソロキ付近で発見された大量のユダヤ人をルーマニア軍が更に東方に追放しようとしている事に関して、その意図をあらゆる手段を使って阻止しこのユダヤ人を取り調べてベッサラビアへ送還するように要請した。その後、SS特別中隊11aは第54軍団司令部と共に前線へ進出し、ソ連軍の空襲、砲撃を掻い潜りながら、ユダヤ人、共産主義者やパルチザンの捜索と処刑を続けた。その間、捕獲した武器、弾薬は第54軍団に引渡し、また捕獲したソ連軍捕虜の尋問から得た軍事情報を軍団司令部に提供している⁽²²³⁾。

8月14日にはSS特別中隊11aは、第一線で行動中の武装親衛隊ライプシュタンダルテ・アドルフ・ヒトラー(LAH)旅団の一隊に出会い、その際LAH旅団が捉えていた5人の共産党役員の引き渡しを受けてこれを処刑している⁽²²⁴⁾。

8月19日、SS特別中隊11aは第54軍団指揮下の第647秘密野戦警察第2分遣隊から調査依頼のあったペーター・シュムスキーを共産党役員と断定して処刑した旨の報告を第54軍団司令部へ送っている。同じ

日、秘密野戦警察はSS特別行動隊に処置を依頼した不審人物レブルックに関する報告を求めている。これらの事実から、この時期にはまだ秘密野戦警察とSS特別行動隊の間で民間人不審人物の取扱いに関する任務区分が厳格に守られている事が分かる⁽²²⁵⁾。

しかし、軍団作戦地域において秘密野戦警察自身も敵対勢力の掃討を開始する。更に大規模な作戦が実施される場合は、SS特別行動隊と協同で実施し、その際軍団指揮下の野戦憲兵隊、更には陸軍の第一線部隊もこれに参加した。8月24日にはニコライエフ（人口16万人、その内ユダヤ人6,000人）において、秘密野戦警察とSS特別中隊11aとの共同作戦が実施された⁽²²⁶⁾。8月27日にはヘルソン（人口6万人、その内ユダヤ人2,000人）において、秘密野戦警察の要請によりSS特別中隊11a、野戦憲兵隊及び第72師団第124歩兵連隊第1大隊によるユダヤ人、共産党、パルチザンに対する掃討作戦が、まだソ連軍による砲撃の続く中で実施されている⁽²²⁷⁾。

SS特別中隊11aは10月17日、第11軍司令部の命令により、ペレコープ地峡への突破攻撃の激戦中であつた第54軍団の作戦地域を退去して第11軍の後方地域へ向い、第553軍後方地域司令官の指揮下に入った⁽²²⁸⁾。しかし、その後第54軍団によるクリミア半島の攻略が進展するとともに再び第54軍団作戦地域に進出して大規模なユダヤ人殺戮を行う事になる。

軍団長の中には軍団作戦地域でのSS特別行動隊の活動を嫌悪する者もいたが、表立って批判する者はほとんどいなかった。しかし、大部分の第一線部隊指揮官がSS特別行動隊の活動を嫌った本当の理由は、ユダヤ人に対する同情の念からではなく住民に対する残虐行為が自分の部隊の規律に与える悪影響への懸念からであつた。その為SS特別行動隊に対して「政治的特別任務」の実行を制限する事はなかったが、自分の兵達がその様な

行為に関与する事は厳禁していた。ところがやがて兵達もSS特別行動隊のユダヤ人殺戮を聞いたり、あるいは直接目撃するに及んで陸軍部隊の軍規も弛緩していった。SS特別行動隊の行動報告には、陸軍の兵がユダヤ人の住宅を略奪した結果、SS特別行動隊の活動に支障を来した事が述べられている⁽²²⁹⁾。

確かに師団以下の第一線部隊の中にはSS特別行動隊のユダヤ人殺戮を目撃して衝撃を受ける者もいた。特に師団付きの従軍神父、従軍牧師の驚きは大きく、1941年8月ウクライナ、キエフ近郊のベジェヤラ・ツェルコフにおけるSS特別中隊4aによる多数の子供を含むユダヤ人住民の殺戮に際し、これを目撃した第4軍団第295歩兵師団付きのカトリックの従軍神父とプロテスタントの従軍牧師達は直ちに師団首席従軍牧師に報告した。師団首席従軍牧師は師団作戦参謀に対して事件の発生を報告し、更に虐殺を中止させる様に要求している。師団は上級部隊である第6軍司令部を通じてSS特別行動隊と交渉して数日後にようやく虐殺を中止させている⁽²³⁰⁾。

しかしながら、全般的に見れば、軍団及び師団以下の戦闘部隊は、ユダヤ人、共産主義者等を含む厄介な住民対策をSS特別行動隊に任せる事によって自分達は軍事作戦の作戦行動に専念できるので、その方がむしろ好ましく、また前線後方でのSS特別行動隊による対パルチザン掃討作戦の実施は、パルチザンと言う軍にとっての敵性勢力を一掃する事になるので、結果として軍団の第一線部隊の作戦の遂行に大いに貢献することになった。以下はそれを証明する実例である。

9月5日、ヘルソン地区司令部の司令官は、第54軍団麾下の第72歩兵師団長に対して、SS特別中隊11aの軍団作戦地域での活動が前線後方地域の安全確保に最大限の貢献をしたと絶賛する内容の報告を送っている⁽²³¹⁾。

元々軍団は後方地域がないので、後方兵站組織を持たずSS特別行動隊に対しては作戦面の統制を行うだけであったが、第一線軍団作戦地域でも当初から相互利益の関係が成立し、やがて前線後方の安全確保の為に共同で対パルチザン掃討作戦を実施する過程で、軍団隷下部隊も直接ユダヤ人の殺戮に手を染めて行く結果になった。

III 結 論

ドイツ東部作戦軍によって占領されたソ連占領地域は極めて早い時期に民政に移管された。例えば一番早いリトアニアが移管されたのは東部作戦軍がソ連への侵攻を開始した僅か1カ月後の7月25日であり、最も遅いエストニアでも12月5日には帝国全権委員領オストラント(Reichskommissariat Ostland)に編入されている。ドイツ国防軍のソ連占領地域は、同じドイツの被占領国でありながら大戦終結までドイツ軍の軍政下に置かれたフランス等の西欧諸国とは大きく異なっていた。過早の民政移管はドイツ東部作戦軍にとって軍事行動遂行上は不都合であったが、逆にヒトラーとナチス指導部には好都合であった。何故ならば東方地域は西欧とは違って、ドイツ民族の為の生存圏を獲得する地域であり、この地域で将来にわたってドイツによる確実な支配を行う為には、できるだけ早くしかも完全に現地の指導層や敵性勢力を抹殺する必要があったからである。その抹殺対象の第1優先こそナチスにとって不倶戴天の敵であるボルシェビキとこれを支えるユダヤ人に外ならず、この抹殺を早くかつ確実に実行する為には軍の干渉を受けにくい民政地域の方が有利であった。それは1939年にポーランドで得られた教訓であった。ポーランドではSS特別行動隊による過激な殺戮行動が国防軍の反発を招き、その活動に支障が生じた。そこでヒトラーの考えた解決策は、軍政の早期終了と東方占領省とその指揮下の帝国全権委員領を設立して、できるだけ早期に統治権を移管する事であった。しかしながらソ連でのユダヤ人の殺戮は民政地区内だけでは不十分であった。多くのボルシェビキ、ソ連のユダヤ人をより早く確実に捕らえる為には、SS特別行動隊は東部作戦軍の作戦地域内で行動する必要があり、しかも後方地域のみならず第一線戦闘地域にまで前進する必要があった。これに対して東部作戦軍は軍の作戦地域内では軍の作戦行動が当然の事として最優先されるので、SS特別行動隊の活動が軍の

行動を阻害するような事になれば、それは容認できなかった。そこで東部作戦軍の軍事作戦とSS特別行動隊の「政治的な特別任務(ユダヤ人殺戮)」と言う異なる任務の遂行を巡って両者の間には複雑で微妙な関係が生じる結果となった。

東部作戦軍のユダヤ人問題に対する考えは、部隊のレベルによって異なっていた。すでに南方軍集団司令官のフォン・ルントシュテット元帥の例で見た通り、軍集団司令官は多少の差はあるものの総じてナチ・イデオロギーに共鳴してはいなかったが表だって反対する者はなく、SS特別行動隊の作戦地域での行動は黙認するものの、軍自身はその様な活動には一切関与しないと言う態度であった。

更に中央軍集団司令官フォン・ボック元帥を例に取っても、1941年11月に反ユダヤ政策にはそれほど関心はなかったが、「コミッサール命令」の実行に関しては、その対応を陸軍総司令官フォン・ブラウヒッチュ元帥と協議したものの、結局陸軍の敵捕虜に対する適正な取扱いよりもドイツ帝国の安全の方が優先するとの結論に達し、ナチス指導部に対して何の意見具申もなされる事はなかった⁽¹⁾。これは、9月24日に下達された南方軍集団司令官フォン・ルントシュテット元帥の命令も同様の主旨であり、そこには共産主義者、ユダヤ人がドイツ帝国にとって最大の敵と言うナチ・イデオロギーへの同調は見られるものの、彼らに共通するのは軍にとって都合の悪いユダヤ人殺戮等の犯罪行為は見ない触れないと言う軍の体裁の保持を第一に考える消極的な態度であった。

野戦軍レベルでは軍司令官一人一人によってかなり差があった。それでも南方軍集団内でナチ・イデオロギーに対して最も批判的であったフォン・シュチュルプナーゲル大将の第17軍やフォン・クライスト上級大将の第1装甲集団でさえも、ユダヤ人がドイツ帝国にとって危険な敵である事を認めて、SS特別行動隊のユダヤ人殺戮行動の実態を知っていながら、

支援はしなかったが、あえてそれを禁止したり妨害する事はなかった。一方親ナチスのフォン・ライヘナウ元帥の第6軍やフォン・ショーベルト上級大将、後にはフォン・マンシュタイン上級大将の第11軍では反ユダヤ主義は更に鮮烈で、SS特別行動隊を軍後方地域の治安維持に利用する一方で、軍作戦地域内でのSS特別行動隊の「政治的特別任務（ユダヤ人殺戮）」の遂行を支援した。

軍団、師団以下の部隊が行動する戦闘地域では、陸軍部隊は目前の敵ソ連軍部隊を撃滅する事に全力を傾注しており、作戦地域内の厄介な住民対策をSS特別行動隊が引き受けてくれるのであれば、たとえそれがユダヤ人の大量殺戮を意味していようとも好都合と考えた。更に前線後方でパルチザン活動の脅威が高まるとSS特別行動隊はパルチザンを討伐して第一線部隊の戦闘を容易にし、更に陸軍部隊自身もパルチザン討伐を実施することになり、その過程でユダヤ人殺害に荷担する事になった。

陸軍内の組織でSS特別行動隊と最も頻繁に共同行動を取ったのは、秘密野戦警察と野戦憲兵隊であった。その主たる理由はこの三者の任務が近接しており、更に一部は重複していたからであった。確かに陸軍総司令部と保安警察・保安情報部間と軍集団とSS特別行動隊間の諸協定で任務分担が行われていたが、依然として幾つかの任務は重複、競合していた。そもそも秘密野戦警察は保安警察から陸軍野戦部隊の防諜任務の為に派遣されている警察部隊でSS特別行動隊とは保安警察と言う点で同根であり⁽²⁾、ユダヤ人が陸軍部隊の組織保全上から最大の脅威であればSS特別行動隊と協同して脅威に対処するのは当然の事であった。一方野戦憲兵隊は国防軍の軍事警察なので、軍内では最も警察に近い存在であり、特にドイツでは秩序警察（制服警察）要員が応召した場合にこの職務に就く事になっていた⁽³⁾、同じ警察出自という意味で通常の陸軍部隊よりSS特別行動隊には親近感があった。しかも軍後方地域での巡察勤務に際して

任務が競合していたので、捕らえたユダヤ人をSS特別行動隊に引き渡してその処理を任せ、更に軍後方地域でのパルチザン討伐作戦では共同行動を取るようになった。

同様の事は軍側でSS特別行動隊との窓口であった軍情報部についても言える。軍司令部内では、情報参謀がSS特別行動隊に最も好意的であったが、それは職務上接触の機会が多かったからだけではなく、現地人の保安要員の審査と保安要員を通じての情報収集にSS特別行動隊の協力が必要だったからである。しかし、時にはSS特別行動隊の無差別殺戮が軍情報部の現地情報提供者を一掃してしまい、軍側がSS特別行動隊の行動を統制しなければならない事態も発生した⁽⁴⁾。

後方地域の陸軍部隊とSS特別行動隊は、戦闘地域よりも更に接触の機会が多く、両者の関係もより緊密であった。その中でも特にSS特別行動隊に好意的で協力的だったのは占領軍地区司令部であった。占領軍地区司令部はしばしば地域内のユダヤ人対策をSS特別行動隊に依頼したが、それが多くのユダヤ人殺戮の舞台となった。これに対して、同じ軍集団あるいは軍後方地域司令官の指揮下にあるにもかかわらずSS特別行動隊の活動に最も非協力的だったのが捕虜収集所、及び捕虜移送収容所であった。この様な対応に差が生じた理由は、ナチス流の表現を使えば、彼らが直面するユダヤ人問題の程度の差、すなわちユダヤ人の脅威度の差に因っていたと考えられる。つまり後方地域の陸軍部隊にとって最も重要な事は、後方連絡線の確保及び円滑な兵站活動を可能ならしめる為の後方地域の治安の維持、安全の確保であった。これを基礎にして捕虜収容施設と地区司令部にとってのユダヤ人問題を考えると、捕虜収容施設ではたとえ捕虜の中にユダヤ人がいようと、それが政治委員であろうと捕虜は全て収容所警備部隊の厳重な管理下にあり、ユダヤ人の存在自体がドイツ陸軍部隊の脅威になる事はない。それ故に陸軍側は捕虜収容施設内のユダヤ人、政治委員

のSS特別行動隊への引き渡しには消極的であり、時にはSS特別行動隊の立ち入りも認めなかった。所長の中には公然とSS特別行動隊の活動を批判する者さえいた。しかし、彼らは極少数の例外を除いて人道的立場からそうしたのではない。ユダヤ人の脅威の度合いが極めて低かったので、彼らはSS特別行動隊の介入を排除する事によって、軍の威信と面子を守ったにすぎなかった。

一方、後方地域司令部や地区司令部は対ソ連侵攻当初は、ドイツにとって最大の脅威、敵はボルシェビズムとそれと同一のユダヤ人（ボルシェビキ＝ユダヤ人）であると言うナチ・プロパガンダがあったにもかかわらず、ユダヤ人の一般住民が後方地域の安全を脅かす存在であるとは考えていなかった。しかしながら、ドイツ占領軍に対してパルチザン活動が開始されると、パルチザン＝ボルシェビキ＝ユダヤ人というナチスのプロパガンダの図式が効を奏し始める。SS特別行動隊Dから第11軍司令部に送られた報告に、ナチ・プロパガンダの典型を見る事ができる。それはクリミア半島の住民調査において、一般住民に占めるユダヤ人の比率は数パーセントにすぎないのに、クリミア共産党の党员では60%、各都市の人民委員会では33～100%がユダヤ人であると言うものであった⁽⁵⁾。つまり、これはユダヤ人がボルシェビキ体制の中核であり主体である事を示していた。こうした事を通じて後方地域司令部や地区司令部は一般住民であるユダヤ人も危険な存在としてその排除の必要性を認識するに至る。それ故にSS特別行動隊によるユダヤ人殺戮を支援し、遂には自らの兵力を投入してユダヤ人殺戮を実行するに至るのである⁽⁶⁾。

この様に、ドイツ陸軍東部作戦軍作戦地域の戦闘地域、後方地域の双方において対ソ連侵攻の軍事作戦を遂行する東部作戦軍とボルシェビズム＝ユダヤ人の殲滅を任務とするSS特別行動隊との間には一種の「共利共生」の関係が成立し、やがて東部戦線でともに共通の敵と戦う者同士の戦友意

識が醸成され、陸軍部隊側もヴァグナー・ハイドリヒ協定や命令、規則で規定された関係を越えた緊密な関係へと進んでいった。こうして軍のユダヤ人殺戮の荷担への道が開かれたのである。東部戦線のドイツ陸軍各級部隊は、多少の例外はあるものの概ね1941年8月下旬を境にして直接ユダヤ人殺戮に手を染めていった。

陸軍部隊が無差別なユダヤ人殺戮に荷担していく発端は、前線の部隊であれ後方の部隊であれ、パルチザン討伐、作戦地域の安全確保と言う軍事上の必要性からであったが、その背景には「ドイツ帝国にとっての最大の敵ボルシェビズムを支える中心的存在はユダヤ人であり、その全てを抹殺しなければならない」と言うナチ・イデオロギーの影響を認められる。その影響は佐官クラス（大佐～少佐）ではそれほどではなかったが、青少年時代をナチス政権下で送った若い尉官クラスの将校、下級下士官及び兵で顕著であった。それは意識の面ではSS特別行動隊隊員と大差がない程であった。しかし、それはドイツ国防軍内でのナチズム政治教育が効果を上げていたと言うよりも、むしろ一般国民に対する政治教育、特に青少年に対するヒトラーユーゲント等の組織でのナチスの政治教育・プロパガンダが効を奏していたものと考えられる。その為に軍事上の必要性から一旦子供を含むユダヤ人一般住民に対する殺戮が始まると、抵抗なく更に大きな殺戮へとエスカレートして行った。その時、それを阻止できる立場にあった高級指揮官達（軍集団司令官、軍司令官、軍団長等）は、自身の反ユダヤ主義の信念からそれを推進したライヘナウやラインハルトは別にしても、フォン・ルントシュテットやフォン・ボックは軍の体面を保持し自分の保身のために消極的な態度に終始してあえてそれを阻止する事はなかったし、フォン・シュチュルプナーゲルやフォン・クライストさえも実質黙認していた。

東部戦線で卓越した指揮を実行し、ドイツ陸軍の数多い将軍の中でも屈

指の名将の一人に数えられるエーリヒ・フォン・マンシュタイン元帥は、1949年12月19日、ハンブルクで開廷されたイギリス占領軍による戦争裁判の軍事法廷において、1941年～1942年の東部戦線の南ウクライナ及びクリミア半島におけるSS特別行動隊Dのユダヤ人殺戮行動の容認、第11軍指揮下の第553軍後方地域（Koruck 553）によるSS特別行動隊への支援、クリミアの地区司令部によるユダヤ人殺害、1941年11月20日のユダヤ人を敵視した命令の下达等の罪により、禁固18年の有罪判決を受けた⁽⁷⁾。

まさに、このフォン・マンシュタイン元帥に対するイギリス軍の戦争裁判の判決に、東部戦線におけるドイツ陸軍部隊のSS特別行動隊によるユダヤ人大量殺戮に対する容認、支援、更に軍の直接関与と言う姿勢の変化と両者の関係の典型を見る事ができる。これは東部戦線で作戦を遂行した大方のドイツ東部作戦軍部隊に当てはまる事である。

それは東部戦線における「国防軍潔白神話」は完全に破綻し、ドイツ国防軍は、対ソ連戦においてソ連軍の撃滅を企図する武力戦のみならず、ユダヤ人殲滅を企図する政治イデオロギー戦においても重要な役割を果たした事を意味している。すなわちドイツ国防軍は、まさにヒトラーが意図した武力戦と政治イデオロギー戦の「二重の戦争」の双方で、その遂行において中心的な存在であったと言える。

その後、東部戦線での戦いは1945年のドイツ第三帝国の滅亡まで一層凄惨さを増して続き、一方政治イデオロギー戦は、ドイツ第三帝国によるヨーロッパの全ユダヤ人の絶滅（ホロコースト）へとエスカレートして行く。その意味でも1941年の独ソ戦（東部戦線）は、1939年に始まったヒトラーの戦争の重要な分岐点であったと言える。

今後は、ドイツ第三帝国における政軍関係研究の最大の焦点である1944年の「7月20日事件」の事実解明を目指して、東部作戦軍部隊の将

校達の1941年の東部戦線での体験が、その後の国防軍内反ナチ・反ヒトラー抵抗グループ形成にどのように影響したのかという問題の解明に研究を進める予定である。 (終り)

註

I 序 論

(1) **Bundesarchiv-Militärarchiv** (フライブルク・ドイツ連邦軍事公文書館所蔵文書)
〔以下 BA-MA と略す〕, RW4/v.522 (国防軍最高司令部文書：ファイル番号 5 2 2)

(2) **Vgl. H. Krausnick/H.Wilhelm, Die Truppe des Weltanschauungskrieges. Die Einsatzgruppen der Sicherheitspolizei und des SD 1938-1942, Stuttgart 1981.**

(以下 Krausnick, Die Truppe と略す) , S.19ff.

(3) **Vgl. Klausnick, Die Truppe, S.32ff.**

(4) **G.Reitlinger, Die Endlösung, S.573.**

ソ連のユダヤ人犠牲者の総数は研究者によって諸説があり、**R.Hilberg** によれば約 90 万人, **Yad Vashem** の研究によれば 1,211,500 ~ 1,316,500 人, **Weller** によれば 1,939,940 である。

Vgl. W.Benz (Hrsg.) ,Dimension des Völkermords, S.16, 499ff.

(5) **E.Jäckel, Hitlers Weltanschauung, S.76.**

(6) **L.S.Dawidowicz, The War against the Jews 1933-45, S.148f.**

(7) **Vgl. Franz Halder, Hitler als Feldherr, München 1949.**

Heinz Guderian, Erinnerungen eines Soldaten, Heidelberg 1951.

Elisabeth Wagner (Hrsg.) ,Der Generalquartiermeister. Briefe und

Tagebuchaufzeichnungen des Generalquartiermeisters des Heeres General der

Artillerie Eduard Wagner, München, Wien 1962.

(8) **Andreas Hillgruber, Zweierlei Untergang. Die Zerschlagung des Deutschen Reichs und das Ende des europäischen Judentums, Berlin 1986.**

(9) **ハンブルク社会問題研究所 (HIS) 主催の「絶滅戦争—ドイツ国防軍の犯罪**

1941年—1944年」展は、1995年3月から以下の各都市で開催された。

1995年 3月—4月：ハンブルク

5月—6月：ベルリン

6月—7月：ポツダム

- 9月－10月：シュツツツガルト
 10月－11月：インスブルック
- 1996年 1月－2月：フライブルク
 2月－3月：メンヒェングラートバッハ
 3月－5月：エッセン
 5月－6月：エアフルト
 6月－7月：レーゲンスブルク
 9月－10月：クラーゲンフルト
 10月－11月：ニュルンベルク
 11月－12月：リンツ
- 1997年 1月－2月：カールスルーエ
 2月－4月：ミュンヘン
 4月－5月：フランクフルト
 5月－7月：ブレーメン
 9月－10月：マールブルク
 10月－11月：コンスタンツ
 11月－1998年1月：グラーツ
- 1998年 1月－3月：ドレスデン
 3月－4月：ザルツブルク
 4月－5月：アーヘン
 5月－7月：カッセル

(H.Donat/A.Strohmeyer (Hrsg.): Befreiung von der Wehrmacht?, S.252.)

(10) Anschlag auf die "Ehre" des deutschen Soldaten, Der Spiegel, Nr.11/10.3. 1997,
 S.92-99.

H.Donat/A.Strohmeyer (Hrsg.), Befreiung von der Wehrmacht?, Bremen 1997.

Heribert Prantl (Hrsg.), Wehrmachtsverbrechen, Hamburg 1997.

Hans-Gunther Thiele (Hrsg.), Die Wehrmachtsausstellung, Bremen 1997.

Christian Gerlach, Krieg, Ernährung, Völkermord, Hamburg 1998.

- Hamburger Institut für Sozialforschung (Hrsg.), *Besucher einer Ausstellung*, Hamburg 1998.
- (11) Musial, Bogdan: » Konterrevolutionäre Elemente sind zu erschießen « *Die Brutalisierung des deutsch-sowjetischen Krieges im Sommer 1941*. Berlin 2000.
- (12) 三宅正樹『政軍関係研究』(芦書房、2001年)、1-3頁。
- (13) Alexander Dallin, *Deutsche Herrschaft in Rußland 1941-1945*, Düsseldorf 1958.
- (14) Hans-Adolf Jacobsen: *Kommissarbefehl und Massenexekutionen sowjetischer Kriegsgefangener*, in: *Anatomie des SS-Staates*.
- (15) Manfred Messerschmidt, *Die Wehrmacht im NS-Staat. Zeit der Indoktrination*, Hamburg 1969.
- (16) Klaus-Jürgen Müller, *Das Heer und Hitler. Armee und nationalsozialistisches Regime 1933-1940*, Stuttgart 1969.
- (17) Vgl. Nobert Müller (Hrsg.) , *Okkupation Raub Vernichtung. Dokumente zur Besatzungspolitik der faschistischen Wehrmacht auf sowjetischen Territorium 1941 bis 1944*, Berlin (O) 1980.
- (18) Helmut Krausnick: *Kommissarbefehl und " Gerichtsbarkeitserlass Barbarossa" in neuer Sicht*, in: *VfZG*, 25 (1977) , S.682-738.
- (19) Hermann Dieter Benz: *Das OKW und seine Haltung zum Landkriegsvölkerrecht im Zweiten Weltkrieg*, Würzburg Universität, 1970.
- (20) Christian Streit, *Keine Kameraden. Die Wehrmacht und die sowjetischen Kriegsgefangenen 1941-1945*.
- (21) Alfred Streim, *Die Behandlung sowjetischer Kriegsgefangener im » Fall Barbarossa «*, Heidelberg, Karlsruhe 1981.
- (22) Kausnick, *Die Truppe*.
- (23) Vgl. Richard Cavell Fattig: *Reprisal: The German Army and the Execution of Hostages during the Second World War*, University of California, Ph.D., 1980.
- Omer Bartov, *The Eastern Front 1941-1945. German Troop and the Barbarisation of Warfare*, London 1985. Christopher Browning: *Wehrmacht Reprisal Policy and*

- the Mass Murder of Jews in Serbia, in: MGM, 1 (1983) , S.31ff.
- (24) Militärgeschichtliches Forschungsamt (Hrsg.), Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg, 10 Bände. (ドイツ国防省軍事史研究所編纂 第二次大戦公刊戦史)
- (25) MGFA (Hrsg.) , Der Angriff auf die Sowjetunion, Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg, Band 4 (上記公刊戦史の第4巻 : 『対ソ連攻撃』。以下 MGFA, Der Angriff と略す) .
- (26) Jürgen Förster, Das Unternehmen ” Barbarossa ” als Eroberungs- und Vernichtungskrieg, in: MGFA, Der Angriff, S.1030ff.
- (27) Theo Schulte, The German Army and Nazi Policies in Occupied Russia.
- (28) R. Headland, Messages of Murder. A Study of the Reports of the Einsatzgruppen of the Security Police and the Security Service, 1941-1943.
- (29) Hans-Heinrich Wilhelm: Die Einsatzgruppe A der Sicherheitspolizei und des SD 1941/1942, Frankfurt a. M. 1996.
- (30) Ralf Ogorreck : Die Einsatzgruppen und die "Genesis der Endlösung", Berlin 1996.
- (31) Peter Klein (Hrsg.): Die Einsatzgruppen in der besetzten Sowjetunion 1941/1942, Berlin 1997.
- (32) French L. MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units, Atglen, PA 1999.
- (33) Manfred Oldenburg: Ideologie und militärisches Kalkül. Die Besatzungspolitik der Wehrmacht in der Sowjetunion 1942, Köln 2004.
- (34) Klaus Jochen Arnold: Die Wehrmacht und die Besatzungspolitik in den besetzten Gebieten der Sowjetunion. Kriegführung und Radikalisierung im "Unternehmen Barbarossa", Berlin 2005.
- (35) Dieter Pohl: Die Herrschaft der Wehrmacht. Deutsche Militärbesatzung und einheimische Bevölkerung in der Sowjetunion 1941-1944, München 2008.
- (36) Felix Römer, Der Kommissarbefehl, Paderborn 2008.
- (37) Jörgen Hasenclever: Wehrmacht und Besatzungspolitik in der Sowjetunion. Die Befehlshaber der rückwärtigen Heeresgebiete 1941-1943, Paderborn 2010.

(38) Jurgen Kilian: Wehrmacht und Besatzungsherrschaft im Russischen Nordwesten

1941-1944. Praxis und Alltag im Militärverwaltungsgebiet der Heeresgruppe Nord,

Paderborn 2012.

- (39) 著者の修士論文「1941年東部戦線におけるドイツ陸軍、主として南方軍集団とSS－特別行動隊との関係」（筑波大学：修乙第2582号、平成6年3月31日授与）以降に発表した当該テーマに関する論文は以下の通りである。

吉本隆昭「独ソ戦の知られざる一側面－ドイツ陸軍とSS－特別行動隊－」

『欧米文化研究』（第11号、1995年）

吉本隆昭「ドイツ陸軍とSS－特別行動隊－1941年東部戦線での政軍関係－」

『陸戦研究』（2002年 5月号）

吉本隆昭「ドイツ第三帝国における政軍関係－1941年・東部戦線の場合－」

『国際関係研究』（第31巻 第2号、2011年 2月）

II 本 論

- (1) Adolf Hitler, *Mein Kampf*, S.739, 751.
- (2) Hitler, a.a.O., S.143ff.
- (3) Jäckel, a.a.O., S.44f.
- (4) Hitler, a.a.O., S.751.
- (5) 林健太郎編 『ドイツ史（増補改訂版）』（山川出版社、1992年）
77－78頁。
- (6) 谷喬夫『ナチ・イデオロギーの系譜－ヒトラー東方帝国の起源－』（新評論、
2012年）56頁。
- (7) 谷、前掲書、61－63頁。
- (8) 谷、前掲書、63－65頁。
- (9) 谷、前掲書、65－66頁。
- (10) 谷、前掲書、68－69頁。

- (11) 林、前掲書、119－121頁。
- (12) 谷、前掲書、22－23頁。
- (13) 谷、前掲書、24－29頁。
- (14) 畝本正己、安井久善編著『第1次世界大戦概史』（黎明社、1964年）
138－139頁。
- (15) Henry Picker: **Hitlers Tischgespräche im Führerhauptquartier. Hitler, wie er wirklich war.** Stuttgart 1976, S. 284. (著者試訳)
- (16) Picker, a.a.O., S. 69. (著者試訳)
- (17) Buchheim, Hans/ Broszat, Martin/ Jacobsen, Hans-Adolf/Krausnick, Helmut:
Anatomie des SS-Staates, Band 1, München 1979, S.182.
- (18) Rössler, Mechtild/ Sabine Schleiermacher (Hrsg.): **Der"Generalplan Ost", Berlin 1993, S. 356-362.**
- (19) Rössler, a.a.O., S. 22-24.
- (20) Rössler, a.a.O., S. 12-19.
- (21) Walter Warlimont, **Im Hauptquartier der deutschen Wehrmacht 1939 bis 1945, S.129.**
- (22) **Hitler Reden Schriften Anordnungen.Februar 1925 Bis Januar 1933. Band II A, S.119.**
- (23) Franz Halder, **Kriegstagebuch** (陸軍参謀総長ハルデー上級大将戦争日誌：以下 Halder, KTB と略す) II, S.50(31.7. 1940).
- (24) MGFA, **Der Angriff, S.219ff.**
- (25) Halder, KTB II, S.201(29.11.1940), 205(3.12.1940), 217(7.12.1940).
- (26) Halder, KTB II, S.211ff(5.12.1940).
- (27) BA-MA, RW4/v.522. (著者試訳)
- (28) BA-MA, RW4/v.522.
- (29) **Kriegstagebuch des Oberkommandos der Wehrmacht** (ドイツ国防軍最高司令部戦争日誌：以下 KTB OKW と略す) I, S. 296ff(3.2.1940).
- (30) Halder, KTB II, S.463ff. (著者試訳)

- (31) KTB OKW I , S.368ff(27.3-6.4.1941).
- (32) Halder,KTB II, S.386f(30.4.1941).
- (33) KTB OKW I , S.401ff(5.6-13.6.1941).
- (34) Halder, KTB II, S.455 (14.6.1941).
- (35) Paul Carell, Unternehmen Barbarossa, S.14ff. Halder, KTB II, S.461 (21. 6.1941).
- (36) MGFA, Der Angriff Beiheft: Kartenskizzen und Graphiken Nr.2 Schematische Kriegsgliederung, Stand: B-Tag 1941 (22.6.) ” Barbarossa” より作成した。
ただし各軍集団後方地域司令官については、
Jörgen Hasenclever: Wehrmacht und Besatzungspolitik in der Sowjetunion, Die Befehlshaber der rückwärtigen Heeresgebiete 1941-1943, Paderborn 2010, S.73-120. による。
- (37) MGFA, Der Angriff, S.475.
- (38) Erich von Manstein: Verlorene Siege, Bonn 1955, S.212.
- (39) ソ連側の詳細な兵力配置は今日に至るまで明かにされていないが、
Halder,KTB II, S.461 (21.6.1941).と
Institute für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Kommunistischen Partei der Sowjetunion (Hrsg.), Geschichte des Großen Vaterländischen Krieges der Sowjetunion, Band 7, Karte 20. 等から推定した。
- (40) Carell, a.a.O., S.195ff.
- (41) Carell, a.a.O., S.149ff.
- (42) Carell, a.a.O., S.241ff.
- (43) Gerd F. Heuer: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945, o.J., S.76ff.
- (44) Heuer, a.a.O., S.71ff.
- (45) Heuer, Gerd F.: Die Generalobersten des Heeres. Inhaber höchster deutscher Kommandostellen 1933-1945, o.J., S.112ff.
- (46) Heuer, a.a.O., S.29ff.
- (47) Hasenclever, a.a.O., S.108-120.

- (48) Gerd F.Heuer: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945, o.J., S.21ff.
- (49) Gerd F. Heuer: Die Generalobersten des Heeres. Inhaber höchster deutscher Kommandostellen 1933-1945, o.J., S.122ff.
- (50) Heuer, a.a.O., S.188ff.
- (51) Gerd F.Heuer: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945, o.J., S.65ff.
- (52) Gerd F. Heuer: Die Generalobersten des Heeres. Inhaber höchster deutscher Kommandostellen 1933-1945, o.J., S.71ff.
- (53) Hasenclever, a.a.O., S.73-95.
- (54) C. Messenger, The Last Prussian.
- (55) Messenger, a.a.O., S.154ff.
- Gerd F.Heuer: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945, o.J., S.136ff.
- (56) Messenger, a.a.O., S.254ff.
- (57) S.W.Mitcham Jr., Kleist, in: C.Barnett (Hrsg.), Hitler's Generals, S.249ff.
- Gerd F.Heuer: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945, o.J., S.60ff.
- (58) W.Görlitz, Reichnau, in: Barnett, a.a.O., S.209ff.
- Heuer, a.a.O., S. 117ff.
- (59) K-J. Müller, Witzleben, Stülpnagel and Speidel, in: Barnett, a.a.O., S.431ff.
- (60) Carell, a.a.O., S.241.
- Gerd F. Heuer: Die Generalobersten des Heeres. Inhaber höchster deutscher Kommandostellen 1933-1945, o.J., S. 184ff.
- (61) Manstein, a.a.O., S. 206ff.
- Gerd F.Heuer: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945, o.J., S. 87ff.
- (62) Manstein, a.a.O., S.206ff.

- (63) MGFA, Der Angriff, S.474.
- (64) MGFA, Der Angriff, S.474.
- (65) Hasenclever, a.a.O., S.95-108.
- (66) Dallin, a.a.O., S.100ff.
- (67) Dallin, a.a.O., S.100ff.
- (68) Dallin, a.a.O., S.104.
- (69) Dallin, a.a.O., S.104.
- (70) U.S. War Department, Handbook on German Military Forces, S.43ff.
- (71) U.S. War Department, Handbook on German Military Forces, S.43ff.
- (72) BA-MA, RH22 Katalog.
- (73) MGFA, Der Angriff, S.1032.
- (74) BA-MA, RH22/4.
- (75) Hasenclever, a.a.O., S.144.
- (76) Hasenclever, a.a.O., S.163.
- (77) Edger M. Howell: The Soviet Partisan Movement 1941--1944, Milton Keynes 1956,
S. 42-44.
- (78) Howell, a.a.O., S. 44-52.
- (79) Antonio J. Munoz: Wehrmacht Rear Guard Security in the USSR 1941-1945, New
York 1951, S. 23-54.
- (80) Bogdan Musial: Sowjetische Partisanen 1941-1944, Paderborn 2009, S. 38-83.
- (81) Munoz, a.a.O., S.55-61.
- (82) R.L. Koehl, The Black Corps, S.161f.
- (83) 芝健介「国家保安本部の成立－1939年－」『1939 ドイツ第三帝国
と第二次世界大戦』 87頁。
- (84) S Sの発展とドイツ警察の組織については、吉本隆昭「ナチ親衛隊〔S S〕－
そのナチズム運動とドイツ第三帝国の権力構造における位置と役割－」『陸戦研究』
(1982年、4、5月号)を参照せよ。
- (85) 同上。

- (86) Heinz Höhne, Der Orden unter dem Totenkopf, S.202.
- (87) 芝、前掲書、85 - 86 頁。
- (88) Höhne, a.a.O., S.327ff.
- (89) Krausnick, Die Truppe, S.147.
- (90) R.Hilberg, Die Vernichtung der europäischen Juden, S.302f.
- (91) Defense Document Book of Ohlendorf, Records of the United States Nuernberg War Crimes Trials, U.S. v. O.Ohlendorf et al. (Case 9) September 15, 1947-April 10, 1948 (M 895-Roll 26).
- Berlin Document Center Records Biographical Records: SS Officers' Service Records.
Reel : No. 007B, 011B, 018C, 038, 054B, 060B, 064, 66B, 074B, 076, 078, 090A,
095A, 096, 099A, 102, 112B, 129B, 130A, 139B, 141A, 148B, 151B,
165B, 176, 180, 180A, 180B, 216A, 331A, 344A, 345A, 353A, 356A, 369A.
- Krausnick, Die Truppe, S.644ff.
- (92) Michael Wildt: Generation des Unbedingten. Das Führungskorps des Reichssicherheitshauptamtes. Hamburg 2002, S.335-345.
- Gerhard Paul/ Klaus-Michael Mallmann (Hrsg.): Die Gestapo im Zweiten Weltkrieg. » Heimatfront « und besetztes Europa. Darmstadt 2000, S. 47-50, 56-64.
- (93) BDC A3340 MFOK W008 (ベルリン・ドキュメントセンター SS 将校人事ファイル No. A3340 MFOK W008) .
- French L. MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S.117.
- (94) BDC A3343 SSO-345A.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 92.
- (95) BDC A3343 SSO-007B.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 98.
- (96) BDC A3343 SSO-356A.

- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 93.
(97) BDC A3343 SSO-060B.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 102.
(98) BDC A3343 SSO-177.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 53.
(99) BDC A3343 SSO-035.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 38.
(100) BDC A3343 SSO-129A.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 75.
(101) BDC A3343 SSO-078.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 42.
(102) BDC A3343 SSO-011B.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 98.
(103) BDC A3343 SSO-139B.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 114.
(104) BDC A3343 SSO-096.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 45.
(105) BDC A3343 SSO-207.**
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the**

- Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 55.
(106) BDC A3343 SSO-076.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 42.
(107) BDC A3343 SSO-092A.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 70.
(108) BDC A3343 SSO-112B.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 111.
(109) BDC A3343 SSO-215A.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 82.
(110) BDC A3343 SSO-129B.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 113.
(111) BDC A3343 SSO-369A.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 95.
(112) BDC A3343 SSO-018C.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 129.
(113) BDC A3343 SSO-102.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 46.
(114) BDC A3343 SSO-353A.
- MacLean: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the
Einsatzkommandos-the Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999, S. 92.

- (115) Krausnick, Die Truppe, S.19f.
- (116) Krausnick, Die Truppe, S.21ff.
- (117) Krausnick, Die Truppe, S.33ff.
- (118) Krausnick, Die Truppe, S.33ff.
- (119) Höhne, a.a.O., S.276.
- (120) Krausnick, Die Truppe, S.85ff.
- (121) Krausnick, Die Truppe, S.73f.
- (122) Krausnick, Die Truppe, S.141ff.
- (123) A.Streim, Zur Eröffnung des allgemeinen Judenvernichtungsbefehls gegenüber den Einsatzgruppen, in: E.Jäckel, J.Rohwer (Hrsg.), Der Mord an den Juden im Zweiten Weltkrieg, S.111.
- Defense Document Book of Ohlendorf, Records of the United States Nuernberg War Crimes Trials, U.S. v. O.Ohlendorf et al. (Case 9) September 15, 1947-April 10, 1948 (M 895-Roll 26).
- (124) Streim, a.a.O., S.114. 栗原 優 「ヒトラーとユダヤ人絶滅政策」 『文化学年報（神戸大学・院）』（第8号、1989年）を参照せよ。
- (125) Krausnick, a.a.O., S173ff.
- (126) 黒川祐次『物語ウクライナの歴史』中央公論新社、2002年、70－73頁。
- (127) Heiko Haumann: Geschichte der Ostjuden, München, 1990, S. 36.
- (128) 黒川、前掲書、159－161頁。
- (129) Höhne, a.a.O., S.330.
- (130) Ebenda.
- (131) Ereignismeldung UdSSR Nr.8, 9, 12, 13, 14, 15, 17, 19, 20, 21, 24, 25, 26, 27, 30, 31, 32, 36, 37.
- Ereignismeldung UdSSR [以下EMと略す] とは、1941年6月23日から1942年4月23日まで、SS特別行動隊（A～D）から国家保安本部に送られた行動報告であり、これを国家保安本部第IV局A1で纏め、当初は10部だけをSS長官、保安警察・保安情報部長官、及び各局等に配布した極秘資料である。

第1号から195号まで出され、158号を除く全てが現存している。

(132) Hühne, a.a.O., S.332.

(133) Dawidowicz, a.a.O., S.167.

(134) Benz, a.a.O., S.543. ただし、これはEMを元にした試算である。

(135) Hühne, a.a.O., S.333.

(136) P.Padfield, Himmler. Reichsführer SS, S.342f.

(137) Defense Document Book of Blobel, Record of the United States Nuernberg War Crimes Trials, U.S. v. O.Ohlendorf et al. (Case 9), September 15, 1947-April 10, 1948 (M 895-Roll 26).

(138) ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち (上・下)』(菅野昭正、星埜守之、篠田勝英、有田英也 訳) 集英社、2011年。

(原書: Jonathan Littell: Les Bienveillantes 2006)

(139) Headland, a.a.O., S.25.

(140) I.Gutman (Hrsg.), Enzyklopädie des Holocaust. Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden I, S.10ff.

(141) Defense Document Book of Blobel, Record of the United States Nuernberg War Crimes Trials, U.S. v. O.Ohlendorf et al. (Case 9), September 15, 1947-April 10, 1948 (M 895-Roll 26).

Hilary Earl: The Nuremberg SS-Einsatzgruppen Trial, 1945-1958. Atorocity, Law, and History, Cambridge 2009, S. 1-18, 82ff, 259ff, 283, 287.

(142) W.Hubatsch (Hrsg.), Hitlers Weisungen für die Kriegführung 1939-1945, S.89.

(著者試訳)

(143) Vgl. R.L.Koehl, RKFDV: German Resettlement and Population Policy 1939-1945.

(144) Schulte, a.a.O., S.212.

(145) S S 特別行動隊の行動開始に先立ち、国家保安本部はソ連領内にいる逮捕すべきドイツへの敵対者、敵対組織のリストを作成して各S S 特別行動隊に配布していた。Vgl. Werner Röder, Sonderfahndungsliste UdSSR, Erlangen 1977.

(146) BA-MA, RH22/15. (著者試訳)

- (147) MGFA, Der Angriff, S.1098.
- (148) Vgl. Klaus Gessner: Zur Organisation und Funktion der Geheimen Feldpolizei im zweiten Weltkrieg, in: Revue Internationale d'Histoire Militaire, 43 (1979), S.154ff.
- (149) Absolon, Die Wehrmacht im Dritten Reich, a.a.O., S.222. (著者試訳)
- (150) BA-MA, RH22/74.
- (151) W.Schellenberg, Memoiren, S.172ff. Headland, a.a.O., S.118.
- (152) Schulte, a.a.O., S.213.
- (153) BA-MA, RH22/170: 「作戦境界閉鎖に関する南方軍集団後方地域司令官命令」第558号(1941年6月28日)において、通行を許可するものの中に部隊としてのSS特別行動隊が挙げられている。
- (154) BA-MA, RH22/171. (著者試訳)
- (155) Dawidowicz, a.a.O., S.160f. KTB OKW I, S.371 (30.3.1941).
- (156) Krausnick, Judenverfolgung, in: Anatomie des SS-Staates Band 2, S.300.
- (157) Dawidowicz, a.a.O., S.162.
- (158) Jacobsen, a.a.O., S.153.
- (159) Guderian, a.a.O., S.138.
- (160) Streit, a.a.O., S.335.
- (161) Streit, a.a.O., S.77. Streim, a.a.O., S.10ff.
- (162) Schulte, a.a.O., S.216ff.
- (163) Jacobsen, a.a.O., S.159f.
- (164) BA-MA, RH22/170.
- (165) 初期のEMには殺害したユダヤ人の区別が明記されていたが(EM 1 1, 1 4) 10月のEMには全てのユダヤ人と言う記述が現れる(EM 1 1 1)。
- (166) BA-MA, RH22/24.
- (167) BA-MA, RH22/227. RH23/72, 79.
- (168) EM17, 94, 128, 150.
- (169) BA-MA, RH22/7.

- (170) BA-MA, RH22/4.
- (171) Höhne, a.a.O., S.337.
- (172) BA-MA, RH22/225.
- (173) BA-MA, RH22/244.
- (174) BA-MA, RH22/202, 227.
- (175) Schulte, a.a.O., S.231f.
- (176) BA-MA, RH20-6/135. (著者試訳)
- (177) BA-MA, RH20-6/489. (著者試訳)
- (178) BA-MA, RH21-1/470.
- (179) BA-MA, RH21-2/v.658.
- (180) BA-MA, RH20-6/489.
- (181) BA-MA, RH20-6/489, 492.
- (182) BA-MA, RH20-6/490.
- (183) BA-MA, RH20-6/491.
- (184) BA-MA, RH20-6/492.
- (185) BA-MA, RH20-6/493.
- (186) Klee (Hrsg.), » Gott mit uns ‹‹, S.29f.
- (187) Klee, a.a.O., S.43f.
- (188) BA-MA, RH20-11/488.
- (189) BA-MA, RH20-11/488. EM22. Krausnick, Die Truppe, S.196f.
- (190) BA-MA, RH20-11/488.
- (191) BA-MA, RH20-11/488.
- (192) BA-MA, RH20-11/488.
- (193) BA-MA, RH20-11/488.
- (194) BA-MA, RH20-11/488. RH23/68. EM19, 25, 37, 40.
- (195) BA-MA, RH20-11/488.
- (196) BA-MA, RH23/78.
- (197) Schulte, a.a.O., S.221.

- (198) BA-MA, RH23/69.
- (199) BA-MA, RH23/69.
- (200) BA-MA, RH23/69.
- (201) BA-MA, RH23/62.
- (202) BA-MA, RH20-11/488. RH23/79.
- (203) BA-MA, RH23/71.
- (204) BA-MA, RH22/74. RH23/79. EM21.
- (205) BA-MA, RH23/70.
- (206) BA-MA, RH23/69.
- (207) BA-MA, RH23/71. EM133.
- (208) Schulte, a.a.O., S.231f.
- (209) BA-MA, RH23/68, 71, 72.
- (210) EM106.
- (211) EM10, 28, 38, 58, 128, 132.
- (212) BA-MA, RH23/72.
- (213) BA-MA, RH23/79.
- (214) BA-MA, RH20-11/488.
- (215) Schulte, a.a.O., S.237f.
- (216) BA-MA, RH23/69.
- (217) EM38. MGFA, Der Angriff, S.1051. Krausnick, Die Truppe, S.261.
- (218) BA-MA, RH20-11/488.
- (219) BA-MA, RH20-11/488.
- (220) BA-MA, RH20-11/488.
- (221) BA-MA, RH24-54/177.
- (222) BA-MA, RH24-54/177.
- (223) BA-MA, RH24-54/177.
- (224) BA-MA, RH24-54/177.
- (225) BA-MA, RH24-54/177.

(226) BA-MA, RH24-54/176.

(227) BA-MA, RH24-54/176.

(228) BA-MA, RH24-54/10.

(229) EM119.

(230) Krausnick, Die Truppe, S.237. Klee (Hrsg.), » *Schöne Zeiten* ‹‹, S.131ff.

(231) BA-MA, RH20-11/488.

III 結 論

(1) BA-MA, N22/9. MGFA, *Der Angriff*, S.1066.

(2) Absolon, *Die Wehrmacht im Dritten Reich*, a.a.O., S.222.

(3) Ebenda.

(4) BA-MA, RH20-11/488.

(5) BA-MA, RH20-11/488.

(6) BA-MA, RH22/227.

(7) Vgl. Paget, Manstein. *Seine Feldzüge und seine Prozeß*.

Wallach: *Feldmarschall Erich von Manstein und Judenausrottung in Rußland*,
in: *Jahrbuch des Instituts für deutsche Geschichte*, IV (1975), S.457-472.

史料

1 Bundesarchiv-Militärarchiv (ドイツ連邦軍事公文書館・フライブルク) 所蔵文書

RW4/v.257 (OKW-Propaganda):国防軍最高司令部・宣伝部門文書

RH20-6 (AOK 6):第6軍司令部文書

RH20-11 (AOK 11):第11軍司令部文書

RH20-17 (AOK 17):第17軍司令部文書

RH21-1 (Pz AOK 1):第1装甲集団・軍司令部文書

RH21-2 (Pz AOK 2):第2装甲集団・軍司令部文書

RH22 (Bfh.rückw. H.Geb.):軍集団後方地域司令官文書

RH23/62-91 (Kortück 553):第553軍後方地域司令官文書

RH24-54 (LIV AK):第54軍団文書

N22/9 (Nachlaß GFM Feder von Bock):ボック元帥個人文書

2 Bundesarchiv-Berlin-Lichterfelde (ドイツ連邦公文書館：ベルリン・リヒターフェルデ分館) 所蔵文書

R 5 7 : 国家保安本部 (R S H A) 文書

3 National Archives (米国立公文書館・ワシントン D.C.) 所蔵文書

(1) Microfilm Series T-175 (Reichsführer SS und Chef der deutschen Polizei):

親衛隊長官兼ドイツ警察長官文書

Roll No.233 (Ereignismeldung UdSSR Nr.1-100):

S S 特別行動隊行動報告 第 1 号～第 1 0 0 号

Roll No.234 (EM Nr. 101-173):

S S 特別行動隊行動報告 第 1 0 1 号～第 1 7 3 号

Roll No.235 (EM Nr. 174-195):

S S 特別行動隊行動報告 第 1 7 4 号～第 1 9 5 号

(2) Microfilm Series M-895 (Records of the United States Nuernberg War Crimes Trials, U.S.A. v. Otto Ohlendorf et al. Case IX) :

米国ニュールンベルク戦争犯罪裁判オーレンドルフ事案記録

(Roll No.1 ～ Roll No.38)

(3) Berlin Document Center Records Biographical Records:

SS Officers' Service Records.

**Reel : No. 007B, 011B, 018C, 038, 054B, 060B, 064, 66B, 074B, 076, 078, 090A,
095A, 096, 099A, 102, 112B, 129B, 130A, 139B, 141A, 148B, 151B,
165B, 176, 180, 180A, 180B, 216A, 331A, 344A, 345A, 353A, 356A, 369A.**

4 公刊史料集

**(1) Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das
nationalsozialistische Deutschland 1933-1945. Band 7, Sowjetunion mit annektierten
Gebieten I . Besetzte sowjetische Gebiete unter deutscher Militärverwaltung, Baltikum
und Transnistrien. München 2011**

**(2) Mallmann, Klaus-Michael/ Andrej Angrick/ Jürgen Matthaus/ Martin Cüppers
(Hrsg.): Die Ereignismeldungen UdSSR 1941. Dokumente der Einsatzgruppen in der
Sowjetunion. Darmstadt 2011**

**(3) Mallmann, Klaus-Michael/ Andrej Angrick/ Jürgen Matthaus/ Martin Cüppers
(Hrsg.): Deutsche Besatzungsherrschaft in der UdSSR 1941-1945. Dokumente der
Einsatzgruppen in der Sowjetunion II. Darmstadt 2013**

参 考 文 献

1: 単行本

《欧文》

Absolon, Rudolf: Die Wehrmacht im Dritten Reich. Aufbau, Gliederung, Recht, Verwaltung. 6 Bände. Boppard 1969-1995

Addison, Paul/ Angus Calder (ed.): Time to Kill. The Soldier's experience of War in the West 1939-1945. London 1997

Angrick, Andrej: Besatzungspolitik und Massenmord. Die Einsatzgruppe D in der südlichen Sowjetunion 1941-1943. Hamburg 2003

Arad, Yitzhak: The Holocaust in the Soviet Union. Jerusalem 2009

Arendt, Hannah: Eichmann in Jerusalem: Ein Bericht von der Banalität des Bösen. München 1986

Armstrong, John A. (ed.): Soviet Partisans in World War II. Madison 1964

Arnold, Klaus Jochen: Die Wehrmacht und die Besatzungspolitik in den besetzten Gebieten der Sowjetunion. Kriegführung und Radikalisierung im "Unternehmen Barbarossa". Berlin 2005

Bald, Detlef: Der deutsche Offizier. München 1982

Bald, Detlef/ Johannes Klotz/ Wolfram Wette: Mythos Wehrmacht. Nachkriegsdebatten und Traditionspflege. Berlin 2001

- Banach, Jens: Heydrichs Elite. Das Führerkorps der Sicherheitspolizei und des SD 1936-1945. Paderborn 2002**
- Barkai, Avraham: Vom Boykott zur »Entjudung« : Der wirtschaftliche Existenzkampf der Juden im Dritten Reich 1933-1944. Frankfurt a. M. 1988**
- Barnett, Correlli (Hrsg.): Hitler's Generals. Authoritative Portraits of the Men Who Waged Hitler's War. New York 1989**
- Bartov, Omer: Hitler's Army. Soldiers, Nazis, and War in the Third Reich. New York Oxford 1991**
- Bartov, Omer: The Holocaust. Origins, Implementation, Aftermath. London 2000**
- Bartov, Omer: The Eastern Front, 1941-45, German Troops and the Barbarisation of Warfare. New York 2001**
- Bartov, Omer/ Atina Grossmann/ Mary Nolan: Crime of War. Guilt and Denial in the Twentieth Century. New York 2002**
- Baumfalk, Gerhard: Überfall oder Präventivschlag? Der deutsche Angriff auf die Sowjetunion am 22. Juni 1941. Frankfurt a. M. 1997**
- Beese, Dieter: Seelsorger in Uniform. Evangelische Militarseelsorge im Zweiten Weltkrieg. Aufgabe - Leitung - Predigt. Hannover 1995**
- Bellamy, Chris: Absolute war. Soviet Russia in the Second World War. London 2009**

Benz, Wighert: Der Rußlandfeldzug des Dritten Reiches: Ursachen, Ziele, Wirkungen.

Frankfurt a. M. 1988

Benz, Wolfgang (Hrsg.): Dimension des Völkermords: Die Zahl der Jüdischen Opfer des Nationalsozialismus. München 1991

Benz, Wolfgang : Der Holocaust. München 1995

Berenbaum, Michael:The World Must Know: The History of the Holocaust as Told in the United States Holocaust Memorial Museum. Boston 1993

Berenbaum, Michael/ Abraham J. Peck (ed.): The Holocaust and Histoy. The Known, the Unknown, the Disputed, and the Reexamined. Bloomington 1998

Birn, Ruth Bettina: Die Höheren SS- und Polizeiführer. Himmlers Vertreter im Reich und in den besetzten Gebieten. Düsseldorf 1986

Blasius, Dirk/ Dan Diner: Zerbrochene Geschichte: Leben und Selbstverständnis der Juden in Deutschland. Frankfurt a. M. 1991

Böhler, Jochen: Auftakt zum Vernichtungskrieg. Die Wehrmacht in Polen 1939. Frankfurt a. M. 2006

Boog, Horst/Förster, Jürgen/Hoffman, Joachim/ Klink,Ernst/ Müller, Rolf- Dieter/ Ueberschär, Gerd R.: Der Angriff auf die Sowjetunion. Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg. Band 4 (Hrsg. Militärgeschichtlichen Forschungsamt). Stuttgart 1983

Brakel, Alexander: Unter Rotem Stern und Hakenkreuz: Barannowicze 1939 bis 1944. Das westliche Weißrussland unter sowjetischer und deutscher Besatzung. Paderborn 2009

Brandt, Hans Jürgen (Hrsg.): Priester in Uniform. Seelsorger, Ordensleute und Theologen als Soldaten im Zweiten Weltkrieg. Augsburg 1994

Breitman, Richard: The Architect of Genocide: Himmler and the Final Solution. New York 1991

Breitman, Richard: Official Secrets. What the Nazis Planned, What the British and Americans Knew. New York 1998

Breymayer, Ursula/ Bernd Ulrich/ Karin Wieland (Hrsg.): Willenmenschen. Über deutsche Offiziere. Frankfurt a. M. 1999

Browder, George Clark: Hitler's Enforcers: The Gestapo and the SS Security Service in the Nazi Revolution. New York 1996

Browning, Christopher R.: Ordinary Man: Reserve Police Battalion 101 and the Final Solution in Poland. New York 1992

Buchheim, Hans/ Broszat, Martin/ Jacobsen, Hans-Adolf/Krausnick, Helmut: Anatomie des SS-Staates. 2 Bände. München 1979

Buchruckner, Ernst: Die Ehre des Soldaten. Stollhamm 1953

Bullock, Alan: Hitler. A Study in Tyranny. New York 1995

Burleigh, Michael: The SS. A New History. London 2012

Burrin, Philippe: Hitler und die Juden. Die Entscheidung für den Völkermord. Frankfurt a.M. 1993

Büttner, Maren/ Magnus Koch (Hrsg.): Zwischen Gehorsam und Desertion. Handeln, Erinnern, Deuten im Kontext des Zweiten Weltkrieges. Köln 2003

Calic, Edouard: Reinhard Heydrich: Schlüsselfigur des Dritten Reiches. Düsseldorf 1982

Carell, Paul: Unternehmen Barbarossa. Der Marsch nach Rußland. Stuttgart 1963

Cesarani, David (ed.): The Final Solution: Origins and Implementation. London 1996

Clark, Alan: Barbarossa. New York 1985

Cohen, Asher/ Yehoyakim Cochavi/ Yoav Gelber (ed.): The Shoah and the War. New York 1992

Crankshaw, Edward: Gestapo: Instrument of Tyranny. London 1956

Dallin, Alexander: German Rule in Russia 1941-1945. A Study of Occupation Policies. London 1957

Dallin, Alexander: Deutsche Herrschaft in Rußland 1941-1945. Düsseldorf 1958

Dawidowicz, Lucy S.: The War against the Jews 1933-45. London 1987

Deist, Wilhelm (ed.): The German Military in the Age of Total War. Warwickshire 1985

Delarue, Jacques: Histoire de la Gestapo. Paris 1962

Deschner, Günther: Reinhard Heydrich. Statthalter der totalen Macht. Frankfurt a. M. 1987

de Zayas, Alfred M.: The Wehrmacht War Crimes Bureau, 1939-1945. Lincoln 1989

Der Dienstkalender Heinrich Himmlers 1941/ 1942. Hamburg 1999

Dirks, Carl/ Karl-Heinz Janßen: Der Krieg der Generäle. Hitler als Werkzeug der Wehrmacht. Berlin 1999

Diner, Dan (Hrsg.): Ist Nationalsozialismus Geschichte?: Zu Historisierung und Historikerstreit. Frankfurt a.M. 1991

Diner, Dan (Hrsg.): Zivilisationsbruch: Denken nach Auschwitz. Frankfurt a. M. 1988

Dobroszycki, Lucjan/ Jeffrey S. Gurock (ed.): The Holocaust in the Soviet Union. Studies and Sources on the Destruction of the Jews in the Nazi-Occupied Territories of the USSR, 1941-1945. New York 1993

Dolan, Edward F. Jr.: Adolf Hitler. A Portrait in Tyranny. New York 1981

Dollinger, Hans (Hrsg.): Kain, wo ist dein Bruder? Was der Mensch im Zweiten Weltkrieg erleiden mußte- dokumentiert in Tagebüchern und Briefen. Frankfurt a. M. 1987

Donat, Helmut/ Arn Strohmeyer (Hrsg.): Befreiung von der Wehrmacht?:

**Dokumentation der Auseinandersetzung über die Ausstellung "Vernichtungskrieg-
verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944" in Bremen 1996/97. Fulda 1997**

**Earl, Hilary: The Nuremberg SS-Einsatzgruppen Trial, 1945-1958. Atorocity, Law, and
History. Cambridge 2009**

Evans, Richard J.: The Third Reich at War 1939-1945. London 2008

**Eberle, Heinrik/ Matthias Uhl (Hrsg.): Das Buch Hitler. Geheimdossier des NKWD für
Josef W. Stalin, zusammengestellt aufgrund der Verhörprotokolle des Persönlichen
Adjutant Hitlers, Otto Günsche, und des Kammerdieners Heinz Linge, Moskau 1948/49.
Bergisch Gladbach, 2005**

Eisner, Jack P.: Holocaust. Warszawa 1993

Engert, Jürgen (Hrsg.): Soldaten für Hitler. Hamburg 1999

Fest, Joachim C.: Hitler, Frankfurt a.M. 1973

Fest, Joachim C.: The Face of the Third Reich. London 1974

**Fiala, Josef: Österreicher "in den "SS-Einsatzgruppen und SS-Brigaden. Die
Tötungsaktionen in der Sowjetunion 1941-1942. Hamburg 2010**

Fleming, Gerald: Hitler and the Final Solution. Berkeley 1987

- Foerster, G. Roland (Hrsg.): "Unternehmen Barbarossa". Zum historischen Ort der deutsch-sowjetischen Beziehungen von 1933 bis Herbst 1941. München 1993**
- Förster, Gerhard: Totaler Krieg und Blitzkrieg. Berlin (O) 1967**
- Förster, Jürgen: Die Wehrmacht im NS-Staat. Eine strukturgeschichtliche Analyse. München 2007**
- Frei, Nobert: Der Führerstaat: Nationalsozialistische Herrschaft 1933-1945. München 1987**
- Frei, Nobert/ Sybille Steinbacher/ Bernd C. Wagner (Hrsg.): Ausbeutung, Vernichtung, Öffentlichkeit. Neue Studien zur nationalsozialistischen Lagerpolitik. München 2000**
- Friedlander, Henry: The Origin of Nazi Genocide. From Euthanasia to the Final Solution. London 1995**
- Friedrich, Jörg: Das Gesetz des Krieges. Das deutsche Heer in Rußland 1941 bis 1945. München 1993**
- Fruchtmann, Karl: die Grube. Bremen 1998**
- Fugate, Bryan I.: Operation Barbarossa. Novato 1984**
- Gerlach, Christian: Krieg, Ernährung, Völkermord: Forschungen zur deutschen Vernichtungspolitik im Zweiten Weltkrieg. Hamburg 1998**
- Gerlach, Christian: Kalkulierte Morde. Die deutsche Wirtschafts- und Vernichtungspolitik in Weißrußland 1941 bis 1944. Hamburg 1999**

- Geßner, Klaus: Geheime Feldpolizei. Die Gestapo der Wehrmacht. Berlin 2010**
- Gilbert, Martin: Atlas of the Holocaust. New York 1993**
- Giziowski, Richard: The Enigma of General Blaskowitz. New York 1997**
- Glanz, David M.: Barbarossa. Hitler's Invasion of Russia 1941. Gloucestershire 2001**
- Goebbels, Joseph: Tagebücher 1924-1945. München 1992**
- Goldhagen, Daniel Jonah: Hitler's Willing Executioners: Ordinary Germans and the Holocaust. New York 1996**
- Gordon, Sarah: Hitler, Germans, and the "Jewish Question". Princeton 1984**
- Görlitz, Walter: Generalfeldmarschall Keitel. Verbrecher oder Offizier? Göttingen 1961**
- Gorodetsky, Gabriel: Die große Täuschung. Hitler, Stalin und das Unternehmen
» Barbarossa «. Berlin 2003**
- Graml, Hermann: Reichskristallnacht: Antisemitismus und Judenverfolgung im Dritten Reich. München 1988**
- Grossman, Wassili/ Ilija Ehrenburg (Hrsg.): Das Schwarzbuch. Der Genozid an den sowjetischen Juden. Hamburg 1994**
- Guderian, Heinz: Erinnerungen eines Soldaten. Heidelberg 1951**

Halder, Franz: Generaloberst Halder Kriegstagebuch. Tägliche Aufzeichnungen des Chefs des Generalstabes des Heeres 1939-1942. 3 Bände. Stuttgart 1962-1964

Halder, Franz: Hitler als Feldherr. München 1949

Hamburger Institute für Sozialforschung (Hrsg.): Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941-1944. Hamburg 1996

Hamburger Institute für Sozialforschung (Hrsg.): Besucher einer Ausstellung. Die Ausstellung » Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944 « in Interview und Gespräch. Hamburg 1998

Hamburger Institute für Sozialforschung (Hrsg.): Eine Ausstellung und ihre Folgen: Zur Rezeption der Ausstellung » Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941-1944 « Hamburg 1999

Hamburger Institute für Sozialforschung (Hrsg.): Verbrechen der Wehrmacht. Dimension des Vernichtungskrieges 1941-1944 Ausstellungskatalog. Hamburg 2002

Hartmann, Christian: Halder Generalstabschef Hitlers 1938-1942. Paderborn 1991

Hartmann, Christian/ Johannes Hürter/ Ulrike Jureit: Verbrechen der Wehrmacht. Bilanz einer Debatte. München 2005

Hartmann, Christian/ Johannes Hürter/ Peter Lieb/ Dieter Pohl: Der deutsche Krieg im Osten 1941-1944. Facetten einer Grenzüberschreitung. München 2006

- Hartmann, Christian (Hrsg.): Von Feldherren und Gefreiten. Zur biographischen Dimension des Zweiten Weltkriegs. München 2008**
- Hartmann, Christian : Wehrmacht im Ostkrieg. Front und militärisches Hinterland 1941/42. München 2009**
- Hasenclever, Jörgen: Wehrmacht und Besatzungspolitik in der Sowjetunion. Die Befehlshaber der rückwärtigen Heeresgebiete 1941-1943. Paderborn 2010**
- Hasse, Norbert/ Gerhard Paul (Hrsg.): Die anderen Soldaten. Wehrkraftzersetzung, Gehorsamsverweigerung und Fahnenflucht im Zweiten Weltkrieg. Frankfurt a. M. 1995**
- Haumann, Heiko: Geschichte der Ostjuden. München 1990**
- Headland, Ronald: Messages of Murder. A Study of the Reports of the Einsatzgruppen of the Security Police and the Security Service, 1941-1943. Cranbury 1992**
- Heer, Hannes/ Klaus Naumann: Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941-1944. Hamburg 1995**
- Heer, Hannes: Tote Zonen: Die deutsche Wehrmacht an der Ostfront. Hamburg 1999**
- Heer, Hannes: Vom Verschwinden der Täter. Der Vernichtungskrieg fand statt, aber keiner war dabei. Berlin 2004**
- Heiber, Helmut (Hrsg.): Reichsführer!: Briefe an und von Himmler. München 1970**

Heiber, Helmut (Hrsg.): Der ganze normale Wahnsinn unterm Hakenkreuz. Triviales und Absonderliches aus den Akten des Dritten Reiches. München 2001

Heiden, Konrad: Der Fuehrer. New York 1968

Herbert, Ulrich: Best: Biographische Studien über Radikalismus, Weltanschauung und Vernunft 1903-1989. Bonn 1996

Herbert, Ulrich (Hrsg.): Nationalsozialistische Vernichtungspolitik 1939-1945. Neue Forschungen und Kontroversen. Frankfurt a. M. 1998

Heuer, Gerd F.: Die deutschen Generalfeldmarschälle und Großadmirale 1933-1945. o.J.

Heuer, Gerd F.: Die Generalobersten des Heeres. Inhaber höchster deutscher Kommandostellen 1933-1945. o.J.

Hilberg, Raul: Täter, Opfer, Zuschauer: Die Vernichtung der Juden 1933-1945. Frankfurt a.M. 1992

Hilberg, Raul: Die Vernichtung der europäischen Juden. 3 Bände. Frankfurt a. M. 1990

Hildebrand, Klaus: Das Dritte Reich. München 1979

Hillgruber, Andreas: Hitlers Strategie: Politik und Kriegführung 1940-1941. Bonn 1993

Hitler, Adolf: Mein Kampf. München 1937, 1943

Hitler, Adolf: Hitler Reden Schriften Anordnungen. Februar 1925 Bis Januar 1933. Band II A, Außenpolitische Standortbestimmung nach der Reichstagswahl Juni-Juli 1928. München 1995

Hofer, Walter (Hrsg.): Der Nationalsozialismus Dokumente 1933-1945. Frankfurt a.M. 1957

Höhne, Heinz: Der Orden unter dem Totenkopf: Die Geschichte der SS. Güntersloh 1969

Hoßbach, Friedrich: Zwischen Wehrmacht und Hitler 1934-1938. Göttingen 1965

Howell, Edgar M.: The Soviet Partisan movement 1941-1944. Milton Keynes 1956

Hubatsch, Walter (Hrsg.): Hitlers Weisungen für die Kriegführung 1939-1945. Dokumente des Oberkommandos der Wehrmacht. Koblenz 1983

Hürten, Heinz (Hrsg.): Deutsche Geschichte in Quellen und Darstellung. Band 9 Weimarer Republik und Drittes Reich 1918-1945. Stuttgart 1995

Hürter, Johannes: Hitlers Heerführer . Die deutschen Oberbefehlshaber im Krieg gegen die Sowjetunion 1941/42. München 2006

Ingrao, Christian: Croire et Detruire. Les intellectuels dans la machine de Guerre SS. Fayard 2010 邦訳 『ナチスの知識人部隊』 吉田春美訳 河出書房新社 2012年

Irving, David: Führer und Reichskanzler. Adolf Hitler 1933-1945. München 1991

Jäckel, Eberhard: Hitlers Weltanschauung. Entwurf einer Herrschaft. Stuttgart 1986

- Jäckel, Eberhard/ Rohwer, Jürgen (Hrsg.): Der Mord an den Juden im Zweiten Weltkrieg. Entschlußbildung und Verwirklichung. Frankfurt a. M. 1987**
- Jahn, Peter/ Rürup, Reinhard (Hrsg.): Erobern und Vernichten. Der Krieg gegen die Sowjetunion 1941-1945. Essays. Berlin 1991**
- Jarausch, Konrad H./ Klaus Jochen Arnold (Hrsg.): » Das stille Sterben ... «. Feldpostbriefe von Konrad Jarausch aus Polen und Russland 1939-1942. Paderborn 2008**
- Jochmann, Werner (Hrsg.), Heims, Heinrich (Aufzeichnungen): Adolf Hitler. Monologe im Führerhauptquartier 1941-1944. Hamburg 1980**
- Kaden, Helma/ Nestler, Ludwig (Hrsg.): Dokumente des Verbrechens. Aus Akten des Dritten Reiches 1933-1945. 3 Bände. Berlin 1993**
- Kaiser, Wolf: Täter im Vernichtungskrieg. Der Überfall auf die Sowjetunion und der Völkermord an den Juden. Berlin 2002**
- Kammer, Hilde/ Elisabeth Bartsch: Nationalsozialismus: Begriff aus der Zeit der Gewaltherrschaft 1933-1945. Hamburg 1992**
- Kempowski, Walter: Das Echolot Barbarossa '41 Ein kollektives Tagebuch. München 2002**
- Kershaw, Ian: Hitler 1889-1936 Hubris. London 1998**
- Kershaw, Ian: Hitler 1936-1945 Nemesis. London 2000**

Kershaw, Robert: War Without Mercy. Operation Barbarossa 1941-42. Surrey 2008

**Kilian, Jürgen: Wehrmacht und Besatzungsherrschaft im Russischen Nordwesten
1941-1944. Praxis und Alltag im Militärverwaltungsgebiet der Heeresgruppe Nord.
Paderborn 2012**

**Klee, Ernst/ Dreßen, Willi (Hrsg.): » Gott mit uns « Der deutsche Vernichtungskrieg im
Osten 1939-1945. Frankfurt a. M. 1989**

**Klee, Ernst/ Dreßen, Willi/ Rieß, Volker (Hrsg.): » Schöne Zeiten « Judenmord aus
der Sicht der Täter und Gaffer. Frankfurt a. M. 1988**

**Klein, Peter (Hrsg.): Die Einsatzgruppen in der besetzten Sowjetunion 1941/1942. Berlin
1997**

Knopp, Guido: Hitler. Eine Bilanz. Berlin 1995

Knopp, Guido: Hitlers Krieger. München 1998

Knopp, Guido: Holocaust. München 2000

Knopp, Guido: Die SS: Eine Warnung der Geschichte. München 2002

**Koehl, Robert Lewis: RKFDV: German Resettlement and Population Policy 1939-1945.
Cambridge 1957**

**Koehl, Robert Lewis: The Black Corps. The Structure and Power Struggles of the Nazi
SS. Madison 1983**

- Kogon, Eugen u.a. (Hg.): Nationalsozialistische Massentötungen durch Giftgas: Eine Dokumentation. Frankfurt a. M. 1989**
- Kogon, Eugen: Der SS-Staat. Das System der deutschen Konzentrationslager. München 1974**
- Kohl, Paul: Der Krieg der deutschen Wehrmacht und der Polizei 1941-1944. Sowjetische Überlebende berichten. Frankfurt a. M. 1995**
- Kosthorst, Erich: Die Geburt der Tragödie aus dem Geist des Gehorsams. Bonn 1998**
- Krausnick, Helmut/ Wilhelm, Hans-Heinrich: Die Truppe des Weltanschauungskrieges. Die Einsatzgruppen der Sicherheitspolizei und des SD 1938-1942. Stuttgart 1981**
- Lammers, Walter (Hrsg.): "Fahrtberichte" aus der Zeit des deutsch-sowjetischen Krieges 1941. Protokolle des Begleitoffiziers des Kommandierenden Generals L. III. Armeekorps. Boppard am Rhein 1988**
- Lang, Berel: Act and Idea in the Nazi Genocide. Chicago 1990**
- Lang, von Jochen: Die Gestapo: Instrument des Terrors. Hamburg 1993**
- Langbein, Hermann: Der Auschwitz-Prozeß: Eine Dokumentation. 2 Bände. Frankfurt a. M. 1995**
- Lanzel, Klaus: Deutsche Soldaten -nationalsozialistischer Krieg? Kriegserlebnis-Kriegserfahrung 1939-1945. München 1998**

- Lehr, Stefan: Ein fast vergessener "Osteinsatz". Deutsche Archivare im
Generalgouvernement und im Reichskommissariat Ukraine. Düsseldorf 2007**
- Lichtenstein, Heiner: Himmlers grüne Helfer: Die Schutz und Ordnungspolizei im
"Dritten Reich". Köln 1990**
- Loewy, Hanno (Hrsg.): Holocaust: Die Grenzen des Verstehens: Eine Debatte über die
Besetzung der Geschichte. Hamburg 1992**
- Longerich, Peter (Hrsg.): Die Ermordung der europäischen Juden: Ein umfassende
Dokumentation des Holocaust 1941-1945. München 1989**
- Longerich, Peter: Der ungeschriebene Befehl. Hitler und der Weg zur » Endlösung «.
München 2001**
- MacLean, French L.: The Fieldmen: The SS Officers Who Led the Einsatzkommandos-the
Nazi Mobile Killing Units. Atglen, PA 1999**
- Magargee, Geoffrey: Barbarossa 1941. Hitler's War of Annihilation. Chalford 2008**
- Magenheimer, Heinz: Hitler's War. Germany's Key Strategic Decisions 1940-1945. London
2002**
- Mallmann, Klaus-Michael/ Volker Rieß/ Wolfram Pyta (Hrsg.): Deutscher Osten
1939-1945. Der Weltanschauungskrieg in Photos und Texten. Darmstadt 2003**
- Mallmann, Klaus-Michael/ Jochen Böhrer/ Jürgen Matthäus: Einsatzgruppen in Polen.
Darstellung und Dokumentation. Darmstadt 2008**

Manoschek, Walter (Hrsg.): Die Wehrmacht im Rassenkrieg. Wien 1996

**Manoschek, Walter (Hrsg.): » Es gibt nur eines für das Judentum: Vernichtung «. Das
Judenbild in deutschen Soldatenbriefen 1939-1944. Hamburg 1995**

Manstein, Erich von: Verlorene Siege. Bonn 1955

Marrus, Michael R.: The Holocaust in History. London 1989

Maser, Werner: Adolf Hitler. Legende-Mythos-Wirklichkeit. München 1971

**Matthäus, Jürgen/ Konrad Kwiet/ Jürgen Förster/ Richard Breitman: Ausbildungsziel
Judenmord? » Weltanschauliche Erziehung « von SS, Polizei und Waffen-SS im Rahmen
der » Endlösung «. Frankfurt a. M. 2003**

**Mayer, Arno J.: Why did the Heavens not Darken? The "Final Solution" in History.
London 1990**

Megargee, P. Geoffrey: Inside Hitler's High Command. Lawrence 2000

**Megargee, P. Geoffrey: War of Annihilation. Combat and Genocide on the Eastern Front
1941. Plymouth 2007**

**Merridale, Catherine: Ivan's War. Life and Death in the Red Army, 1939-1945. NewYork
2006**

**Messenger, Charles: The Last Prussian. A Biography of Field Marshal Gerd von
Rundstedt 1875-1953. London 1991**

**Messerschmidt, Manfred: Die Wehrmacht im NS-Staat. Zeit der Indoktrination. Hamburg
1969**

**Meyer, Klaus/ Wippermann, Wolfgang (Hrsg.): Gegen das Vergessen. Der
Vernichtungskrieg gegen die Sowjetunion 1941-1945. Frankfurt a. M. 1992**

**Michalka, Wolfgang (Hrsg.): Deutsche Geschichte 1933-1945 Dokumente. zur Innen- und
Außenpolitik. Frankfurt a. M. 2002**

**Mlynarczyk, Jacek Andrzej: Judenmord in Zentralpolen. Der Distrikt Radom im General-
gouvernement 1939-1945. Darmstadt 2007**

**Mommsen, Hans: Auschwitz, 17. Juli 1942. Der Weg zur europäischen » Endlösung der
Judenfrage «. München 2002**

**Müller, Klaus-Jürgen: Das Heer und Hitler. Armee und nationalsozialistisches Regime
1933-1940. Stuttgart 1969**

**Müller, Klaus-Jürgen: The army, politics and society in Germany, 1933-45. Studies in the
army's relation to Nazism. Manchester 1987**

**Müller, Norbert (Hrsg.): Okkupation Raub Vernichtung. Dokumente zur
Besatzungspolitik der faschistischen Wehrmacht auf sowjetischem Territorium 1941 bis
1944. Berlin (O) 1980**

**Müller, Norbert (Dokumentenauswahl und Einleitung): Europa unterm Hakenkreuz.
Dokumentenedition. Sowjetunion. Berlin (O) 1991**

- Müller, Rolf-Dieter: Hitlers Ostkrieg und die deutsche Siedlungspolitik. Die Zusammenarbeit von Wehrmacht, Wirtschaft und SS. Frankfurt a. M. 1991**
- Müller, Rolf-Dieter/Gerd R. Ueberschär: Hitler's War in the East. A Critical Assessment. Stuttgart 1993**
- Müller, Rolf-Dieter/ Hans-Erich Volkmann (Hrsg.): Die Wehrmacht Mythos und Realität. München 1999**
- Müller-Hill, Benno: Tödliche Wissenschaft: Die Aussonderung von Juden, Zigeunern und Geisteskranken 1933-1945. Hamburg 1984**
- Munoz, Antonio J.: Wehrmacht Rear Guard Security in the USSR 1941-1945. New York 1951**
- Musial, Bogdan: » Konterrevolutionäre Elemente sind zu erschießen « Die Brutalisierung des deutsch-sowjetischen Krieges im Sommer 1941. Berlin 2000**
- Musial, Bogdan (Hrsg.): Sowjetische Partisanen in Weißrußland. Innenansichten aus dem Gebiet Baranoviči 1941-1944. Eine Dokumentation. München 2004**
- Musial, Bogdan: Sowjetische Partisanen 1941-1944. Mythos und Wirklichkeit. Paderborn 2009**
- Ogorreck, Ralf: Die Einsatzgruppen und die "Genesis der Endlösung". Berlin 1996**
- Oldenburg, Manfred: Ideologie und militärisches Kalkül. Die Besatzungspolitik der Wehrmacht in der Sowjetunion 1942. Köln 2004**

Otto, Reinhard: Wehrmacht, Gestapo und sowjetische Kriegsgefangene im deutschen Reichsgebiet 1941/ 1942. München 1998

Padfield, Peter: Himmler. Reichsführer SS. London 1990

Paget, Reginald T.: Manstein. Seine Feldzüge und sein Prozeß. Wiesbaden 1952

Pahl, Magnus: Fremde Heere Ost. Hitlers militärische Feindaufklärung. Berlin 2012

Paul, Gerhard/ Klaus-Michael Mallmann (Hrsg.): Die Gestapo im Zweiten Weltkrieg. » Heimatfront « und besetztes Europa. Darmstadt 2000

Pehle, Walter (Hrsg.): Der Historische Ort des Nationalsozialismus. Annäherungen. Frankfurt a. M. 1990

Pehle, Walter (Hrsg.): Der Judenpogrom 1938: Von der » Reichskristallnacht « zum Völkermord. Frankfurt a. M. 1990

Penkert, Brigitte: Briefe einer Rotkreuzschwester von der Ostfront. Göttingen 2006

Philippi, Alfred und Ferdinand Heim: Der Feldzug gegen Sowjetrußland. Stuttgart 1962

Picker, Henry: Hitlers Tischgespräche im Führerhauptquartier. Hitler, wie er wirklich war. Stuttgart 1976

Pietrow-Ennker, Bianka (Hrsg.): Präventivkrieg? Der deutsche Angriff auf die Sowjetunion. Frankfurt a. M. 2000

Pingel, Falk: Häftlinge unter SS-Herrschaft. Hamburg 1978

Poeppl, Hans/ W.-K. Prinz von Preußen/ K.-G. v. Hase (Hrsg.): Die Soldaten der Wehrmacht. München 1998

Pohl, Dieter: Die Herrschaft der Wehrmacht. Deutsche Militärbesatzung und einheimische Bevölkerung in der Sowjetunion 1941-1944. München 2008

Pohl, Karl Heinrich (Hrsg.): Wehrmacht und Vernichtungspolitik. Militär im nationalsozialistischen System. Göttingen 1999

Post, Walter: Unternehmen Barbarossa. Deutsche und sowjetische Angriffspläne 1940/1941. Hamburg 1996.

Post, Walter: Die verleumdete Armee. Wehrmacht und Anti-Wehrmacht-Propaganda Selent 1999

Prantl, Heribert (Hrsg.): Wehrmachtsverbrechen: Eine deutsche Kontroverse. Hamburg 1997

Read, Anthony: Devil's Disciples. Hitler's Inner Circle. New York 2004

Redelis, Valdis: Partisanenkrieg. Entstehung und Bekämpfung der Partisanen- und Untergrundbewegung im Mittelabschnitt der Ostfront 1941 bis 1943. Heidelberg 1958

Reitlinger, Gerald: The House Built on Sand. The Conflicts of German Policy in Russia 1939-1945. New York 1960

Reitlinger, Gerald: The SS: Alibi of a Nation 1922-1945. London 1981

Reitlinger, Gerald: Die Endlösung. Hitlers Versuch der Ausrottung der Juden Europas 1939-1945. Berlin 1992

Reuth, Ralf Georg: Hitler. eine politische Biographie. München 2003

Rhodes, Richard: Masters of Death. The SS-Einsatzgruppen and the Invention of the Holocaust. New York 2003

Röder, Werner (Hrsg.): Sonderfahndungsliste UdSSR. Erlangen 1976

Röhr, Werner (Hrsg.): Faschismus und Rassismus: Kontroversen um Ideologie und Opfer. Berlin 1992

Römer, Felix: Der Kommissarbefehl. Wehrmacht und NS-Verbrechen an der Ostfront 1941/42. Paderborn 2008

Roseman, Mark: Die Wansee-Konferenz. Wie die NS-Bürokratie den Holocaust organisierte. München 2001

Rössler, Mechtild/ Sabine Schleiermacher (Hrsg.): Der "Generalplan Ost". Berlin 1993

Rubenstein, Joshua/ Ilya Altman (ed.): The Unknown Black Book. The Holocaust in the German-Occupied Soviet Territories. Bloomington 2008

Rürup, Reinhard (Hrsg.): Topographie des Terrors: Gestapo, SS und Reichssicherheitshauptamt auf dem » Prinz-Albrecht-Gelände «: Eine Dokumentation. Berlin 1987

Russell, Lord, of Liverpool: The Trial of Adolf Eichmann. London 1962

Safrian, Hans: Die Eichmann-Männer. Wien 1993

Schafranek, Hans/ Streibel, Robert: 22. Juni 1941. Der Überfall auf die Sowjetunion. Wien 1991

Schleunes, Karl A.: The Twisted Road to Auschwitz: Nazi Policy toward German Jews 1933-1939. Chicago 1970

Schellenberg, Walter: Memoiren. Köln 1956

Schneider, Michael: Das » Unternehmen Barbarossa «. Frankfurt a. M. 1989

Schneider, Wolfgang: Die Waffen SS. Hamburg 2000

Schoenberner, Gerhard: Der gelbe Stern: Die Judenverfolgung in Europa 1933-1945. Frankfurt a. M. 1991

Schram, Percy Ernst (Hrsg.): Kriegstagebuch des Oberkommandos der Wehrmacht. 5 Bände. Frankfurt a. M. 1965

Schram, Percy Ernst: Hitler. The Man & The Military Leader. Chicago 1981

- Schulte, Jan Erick: Zwangsarbeit und Vernichtung: Das Wirtschaftsimperium der SS. Oswald Pohl und das SS-Wirtschafts-Verwaltungshauptamt 1933-1945. Paderborn 2001**
- Schulte, Theo J.: The German Army and Nazi Policies in Occupied Russia. Oxford 1989**
- Schumann, Wolfgang/ Nestler, Ludwig (Hrsg.): Europa untem Hakenkreuz. Die faschistische Okkupationspolitik in den zeitweilig besetzten Gebieten der Sowjetunion (1941-1944). Berlin 1991**
- Schustereut Hartmut: VABANQUE. Hitlers Angriff auf Sowjetunion 1941 als Versuch, durch den Sieg im Osten den Westen zu bezwingen. Selent 2000**
- Schwarz, Gudrun: Die nationalsozialistischen Lager. Frankfurt a.M. 1990**
- Seidler, Franz W.: Die Wehrmacht im Partisanenkrieg. Militärische und völkerrechtliche Darlegungen zur Kriegführung im Osten. Selent 1999**
- Shandley, Robert R. (ed.): Unwilling Germans? The Goldhagen Debete. Minneapolis 1998**
- Smelser, Ronald/ Enrico Syring (Hrsg.): Die Militärelite des dritten Reiches. Berlin 1995**
- Smelser, Ronald/ Enrico Syring (Hrsg.): Die SS: Elite unter dem Totenkopf. Paderborn 2000.**
- Smith, Bradley F./ Agnes F. Peterson (Hrsg.): Heinrich Himmler Geheimreden 1933 bis 1945 und andere Ansprachen. Frankfurt a. M. 1974**
- Snyder, Timothy: Bloodlands. Europe between Hitler and Stalin. New York 2012**

Stahel, David: Operation Barbarossa and Germany's Defeat in the East. Cambridge 2009

Stader, Ingo (Hrsg.): Ihr daheim und wir hier draußen. Ein Briefwechsel zwischen Ostfront und Heimat Juni 1941- März 1943. Köln 2006

Stein, George H.: The Waffen SS. Hitler's Elite Guard at War 1939-1945. New York 1966

Steinert, Marlis: Hitler. München 1991

Stierlin, Heim: Adolf Hitler. Frankfurt a. M. 1995

Strauss, Herbert A./ Nobert Kampe (Hrsg.): Antisemitismus: Von der Judenfeindschaft zum Holocaust. Frankfurt a. M. 1988

Strawson, John: Hitler as Military Commander. London 1971

Streim, Alfred: Die Behandlung sowjetischer Kriegsgefangener im » Fall Barbarossa «. Eine Dokumentation. Heidelberg 1981

Streit, Christian: Keine Kameraden. Die Wehrmacht und die sowjetischen Kriegsgefangenen 1941-1945. Bonn 1991

Syring, Enrico: Hitler. Seine Politische Utopie. Berlin 1994

Thiele, Hans-Günther: Die Wehrmachtausstellung: Dokumentation einer Kontroverse. Bremen 1997

Tremper, Marlies (Hrsg.): Briefe des Soldaten Helmut N. 1939-1945. Berlin 1988

Tuchel, Johannes: Am Großen Wannsee 56-58: Von der Villa Minoux zum Haus der Wannsee-Konferenz. Berlin 1992

Ueberschär, Gerd R./ Wette, Wolfram (Hrsg.): "Unternehmen Barbarossa" Der deutsche Überfall auf die Sowjetunion 1941. Paderborn 1984

Ueberschär, Gerd R. (Hrsg.): Hitlers militärische Elite. Darmstadt 1998

Ueberschär, Gerd R. (Hrsg.): Der Nationalsozialismus vor Gericht. Die alliierten Prozesse gegen Kriegsverbrecher und Soldaten 1943-1952. Frankfurt a. M. 2000

U.S.War Department: Handbook on German Military Forces. Baton Rouge 1990

Volkman, Hans-Erich (Hrsg.): Das Russlandbild im Dritten Reich. Köln 1993

Wagner, Bernd (Hrsg.): Zwei Wege nach Moskau. Vom Hitler-Stalin-Pakt bis zum » Unternehmen Barbarossa «. München 1991

Wagner, Carl: Die Heeresgruppe Süd. Der Kampf im Süden der Ostfront 1941- 1942. Friedberg o.J.

Wagner, Elisabeth (Hrsg.): Der Generalquartiermeister. Briefe und Tagebuchaufzeichnungen des Generalquartiermeisters des Heeres General der Artillerie Eduard Wagner. München 1963

Walke, Anika: Jüdische Partisaninnen. Der verschwiegene Widerstand in der Sowjetunion. Berlin 2007

Warlimont, Walter: Im Hauptquartier der deutschen Wehrmacht 1939 bis 1945. Augsburg 1990

Weale, Adrian: The SS. A New History. London 2012

Weber, Joachim F. (Hrsg.): Armee im Kreuzfeuer: München 1997

Wehrmachtsverbrechen: Dokumente aus sowjetischen Archiven. Köln 1997

Weinberg, Gerhard L.: Germany Hitler & World War II. New York 1995

Weissbecker, Manfred/ Kurt Pätzold: Adolf Hitler. Leipzig 1995

Weitbrecht, Dorothee: Der Exekutionsauftrag der Einsatzgruppen in Polen. Filderstadt 2001

Westermann, Edward B.: Hitler's Police Battalions. Enforcing Racial War in the East. Lawrence 2005

Wette, Wolfram (Hrsg.): Der Krieg des kleinen Mannes. Eine Militärgeschichte von unten. München 1992

Wette, Wolfram (Hrsg.): Retter in Uniform. Handlungsspielräume im Vernichtskrieg der Wehrmacht. Frankfurt a. M. 2002

Wette, Wolfram : Die Wehrmacht. Feindbilder Vernichtungskrieg Legenden. Frankfurt a. M. 2002

Wette, Wolfram (Hrsg.) : Zivilcourage. Empörte, Helfer und Retter aus Wehrmacht, Polizei und SS. Frankfurt a. M. 2003

Wienn, Erhard R. (Hrsg.): Die Schoah von Babij Jar. Das Massaker deutscher Sonderkommandos an der jüdischen Bevölkerung von Kiew 1941. fünfzig Jahre danach zum Gedenken. Konstanz 1991

Wildt, Michael (Hrsg.): Die Judenpolitik des SD 1935 bis 1938: Eine Dokumentation. München 1995

Wildt, Michael: Generation des Unbedingten. Das Führungskorps des Reichssicherheitshauptamtes. Hamburg 2002

Wildt, Michael (Hrsg.) : Nachrichtendienst, politische Elite und Mordeinheit. Der Sicherheitsdienst des Reichsführers SS. Hamburg 2003

Williamson, Gordon: The SS: Hitler's Instrument of Terror. London 1994

Wilhelm, Friedrich: Die Polizei im NS-Staat. Paderborn 1997

Wilhelm, Hans-Heinrich: Rassenpolitik und Kriegführung. Sicherheitspolizei und Wehrmacht in Polen und der Sowjetunion 1939-1942. Passau 1991

Wilhelm, Hans-Heinrich: Die Einsatzgruppe A der Sicherheitspolizei und des SD 1941/1942. Frankfurt a. M. 1996

Witter, Robert E.: Die deutsche Militärpolizei im Zweiten Weltkrieg. Wölfersheim-Berstadt 1995

Wrochem, Oliver von: Erich von Manstein: Vernichtungskrieg und Geschichtspolitik. Paderborn 2006

Zeck, Mario: Das Schwarze Korps. Geschichte und Gestalt des Organs der Reichsführung SS. Tübingen 2002

Zitelmann, Rainer: Hitler. Stuttgart 1991

《邦文》

畝本正己、安井久善 編著 『第1次世界大戦概史』 黎明社 1964年

越後谷 太郎 『独ソ戦の始まりとその転換点—1941年の軍事情勢を中心に—』
文芸社 2006年

大野 英二 『ナチ親衛隊知識人の肖像』 未来社 2001年

小野寺 拓也 『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」 第二次世界大戦末期に
おけるイデオロギーと「主体性」』 山川出版社 2012年

木佐 芳男 『〈戦争責任〉とは何か』 中央公論新社 2001年

黒川 祐次 『物語 ウクライナの歴史』 中央公論新社 2002年

- 栗原 優 『ナチズムとユダヤ人絶滅政策－ホロコーストの起源と実態－』
ミネルヴァ書房 1997年
- 芝 健介 『ホロコースト』 中央公論新社 2007年
- 芝 健介 『武装親衛隊とジェノサイド』 有学舎 2008年
- 谷 喬夫 『ヒムラーとヒトラー』 講談社メチエ選書 2000年
- 谷 喬夫 『ナチ・イデオロギーの系譜－ヒトラー東方帝国の起源－』 新評論
2012年
- 永岑 三千輝 『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941－1942』
同文館 1994年
- 永岑 三千輝 『独ソ戦とホロコースト』 日本経済評論社 2001年
- 永岑 三千輝 『ホロコーストの力学－独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法－』
青木書店 2003年
- 秦郁彦、佐瀬昌盛、常石敬一（監修）『世界戦争犯罪事典』 文藝春秋 2002年
- 林健太郎編 『ドイツ史（増補改訂版）』 山川出版社 1992年
- 三宅正樹 『政軍関係研究』 芦書房 2001年
- 守屋 純 『国防軍潔白神話の生成』 錦正社 2009年

守屋 純 『独ソ戦はこうして始まった』 中央公論新社 2012年

義井 博 『ヒトラーの戦争指導の決断－1940年のヨーロッパ外交－』
荒地出版社 1999年

リテル, ジョナサン 『慈しみの女神たち (上下)』 (菅野昭正、星埜守之、
篠田勝英、有田英也 訳) 集英社 2011年

2 : 論 文

《欧文》

MGM: Militärgeschichtliche Mitteilungen

VfZG: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte

WWR: Wehrwissenschaftliche Rundschau

Anderson, Truman O. : A Hungarian Vernichtungskrieg? Hungarian Troops and the Soviet Partisan War in Ukraine, 1942. In: MGM, 58 (1999), S.345-366

Anderson, Truman O. : Incident at Barnivka: German Reprisals and the Soviet Partisan Movement in Ukraine, October-December 1941. In: The Journal of Modern History, 71, (1999), S. 585-623

Anderson, Truman O. : Germans, Ukrainians and Jews: Ethnic Politics in Heeresgebiet Süd, June-December 1941. In: War in History, 7, (2000), No.3, S. 325-351

Arad, Yitzhak: Alfred Rosenberg and the “Final Solution” in the Occupied Soviet Territories. In: Yad Vashem Studies, X III (1979), S. 263-286

Arndt, Ino/ Scheffler, Wolfgang: Organisierter Massenmord an Juden in nationalsozialistischen Vernichtungslagern. Ein Beitrag zur Richtigstellung apologetischer Literatur. In: VfZG, 24 (1976), S.105-135

Arnold, Klaus Jochen: Die Eroberung und Behandlung der Stadt Kiew durch die Wehrmacht im September 1941: Zur Radikalisierung der Besatzungspolitik. In: MGM, 58 (1999), S.23-63

Aronson, Shlomo: Die dreifache Falle. Hitlers Judenpolitik, Alliierten und die Juden. In: VfZG, 32 (1984), S. 29-65

Bartov, Omer: Indoctrination and Motivation in the Wehrmacht: The Importance of the Unquantifiable. In: The Journal of Strategic Studies, 9 (1986), S.16-34

Bartov, Omer: Daily Life and Motivation in War: The Wehrmacht in the Soviet Union. In: The Journal of Strategic Studies, 12 (1989), S.200-214

Bartov, Omer: Soldiers, Nazis, and War in the Third Reich. In: The Journal of Modern History, 63 (1991), S.44-60

Bartov, Omer: The Conduct of War: Soldiers and the Barbarization of Warfare. In: The Journal of Modern History, 64 (1992), S.32-45

Bartov, Omer: An Idiot's Tale: Memories and Histories of the Holocaust. In: The Journal of Modern History, 67 (1995), S.55-82

Beer, Albert: Der Fall Barbarossa. Münster Uni. Diss. Maschinenschrift, 1978

Beer, Mathias: Die Entwicklung der Gaswagen beim Mord an den Juden. In: VfZG, 35 (1987), S. 403-417

Benz, Wigbert: Präventiver Völkermord? Zur Kontroverse um den Charakter des deutschen Vernichtungskrieges gegen die Sowjetunion. In: Blätter für deutsche und internationale Politik, 33 (1988), S. 1215-1227

- Bergen, Doris L. The Nazi Concept of 'Volksdeutsche' and the Exacerbation of Anti-Semitism in Eastern Europe, 1939-45. In: Journal of Contemporary History, 29 (1994), S. 569-582**
- Betz, Herman Dieter: Das OKW und seine Haltung zum Landkriegsvölkerrecht im Zweiten Weltkrieg. Würzburg Uni. Diss. Maschinenschrift, 1970**
- Birn, Ruth Bettina: » Zaunkönig « an » Uhrmacher «. Große Partisanenaktionen 1942/1943 am Beispiel des » Unternehmens Winterzauber «. In: Militärgeschichtliche Zeitschrift, 60 (2001), S. 99-118**
- Birn, Ruth Bettina: Collaboration with Nazi Germany in Eastern Europe: the Case of the Estonian Security Police. In: Contemporary European History, 10, 2, (2001), S. 181-198**
- Bitzel, Uwe: Die Konzeption des Blitzkrieges bei deutschen Wehrmacht. Uni. Dortmund Diss. Maschinenschrift, 1989**
- Bloxham, Donald: Punishing German Soldiers during the Cold War: The Case of Erich von Manstein. In: Patterns of Prejudice, vol. 33, no. 4, (1999), S.25-45**
- Boll, Bernd: "Aktionen nach Krieg" Wehrmacht und I . SS-Infanteriebrigade 1941. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 48, (2000), S. 775-788**
- Boll, Bernd: Zloczow, Juli 1941: Die Wehrmacht und der Beginn des Holocaust in Galizien. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 50, (2002), S. 899-917**
- Breitman, Richard/ Shlomo Aronson: Eine Unbekannte Himmler-Rede vom Januar 1943. In: VfZG, 38 (1990), S. 337-348**

Browning, Christopher R.: Nazi Resettlement Policy and the Search for a Solution to the Jewish Question, 1939-1941. In: German Studies Review, 9-3 (1986), S. 497-519

Browder, George Clark: SIPO and SD, 1931-1940. Uni. Wisconsin Diss. Maschinenschrift, 1968

Buchheim, Hans: Die Höheren SS- und Polizeiführer. In: VfZG, 11 (1963), S. 362-391

Büchler, Yehoshua: Kommandostab Reichsführer-SS: Himmler's Personal Murder Brigades in 1941. In: Holocaust and Genocide Studies, 1 (1986), S. 11-25

Burdik, Charles B.: Tradition and Murder in the Wehrmacht. In: Simon Wiesenthal Center Annual, 4 (1987), S. 329-336

Corum, James S.: The Luftwaffe's Army Support Doctrine, 1918-1941. In: The Journal of Military History 59 (1995), S. 53-76

Datner, Szymon: Crimes Committed by the Wehrmacht during the September Campaign and the Period of Military Government. In: Polish Western Affairs, 3 (1962), S. 294-338

Dean, Martin C.: The German Gendarmerie, the Ukrainian Schutzmannschaft and the 'Second Wave' of Jewish Killings in Occupied Ukraine: German Policing at the Local Level in the Zhitomir Region, 1941-1944. In: The German History Society, 14-2 (1996), S. 168-192

Diner, Dan: Rationalisierung und Methode. Zu einem neuen Erklärungsversuch der "Endlösung". In: VfZG, 40 (1992), S. 359-382

Dreßen, Willi: The Role of the Wehrmacht and the Police in the Annihilation of the Jews; the Prosecution and Postwar Careers of Perpetrators in the Police Force of the Federal Republic of Germany. In: Yad Vashem Studies, 23 (1993), S. 295-319

Erickson, John: New Thinking about the Eastern Front in World War II. Journal of Military History, 56-2 (1992), S. 283-292

Fattig, Richard Cavell: Reprisal: The German Army and the Execution of Hostages during the Second World War. Uni. California Diss. Maschinenschrift, 1980

Fest, Joahim: Hitlers Krieg. In: VfZG, 38 (1990), S. 359-373

Förster, Jürgen: Hitler's War Aims Against the Soviet Union and the German Military Leaders. In: Militärhistorisk Tidskrift (Sweden), 1 (1979), S. 83-93

Förster, Jürgen: Zur Rolle der Wehrmacht im Krieg gegen die Sowjetunion. In: Aus Politik und Zeitgeschichte, 45 (1980), S. 3-15

Förster, Jürgen: The Wehrmacht and the War of Extermination against the Soviet Union. In: Yad Vashem Studies, XIV (1981), S. 7-34

Förster, Jürgen: Fünfzig Jahre danach: Ein historischer Rückblick auf das "Unternehmen Barbarossa". In: Aus Politik und Zeitgeschichte, 24 (1991), S. 11-24

Förster, Rudolf: Dresden, In: Städte im Zweiten Weltkrieg, 1991, S. 299-315

- Gessner, Klaus: Zur Organisation und Funktion der Geheimen Feldpolizei im zweiten Weltkrieg. In: Revue International d'Histoire Militaire, 43 (1979), S. 154-166**
- Gibbons, Robert Joseph: Allgemeine Richtlinien für die politische und wirtschaftliche Verwaltung der besetzten Ostgebiete. In: VfZG, 25 (1977), S. 252-261**
- Gruner, Wolf: Poverty and persecution: the Reichsvereinigung, the Jewish population, and anti-Jewish policy in the Nazi state, 1939-1945. In: Yad Vashem Studies, 27 (1999), S. 23-60**
- Guttermann, Bella: Jews in the service of Organisation Todt in the occupied Soviet territories: October 1941-March 1942. In: Yad Vashem Studies, 29 (2001), S. 65-107**
- Hagen, William W.: Before the "Final Solution": Toward a Comparative Analysis of Political Anti-Semitism in Interwar Germany and Poland. In: The Journal of Modern History, Vol. 68 (1996), S. 351-381**
- Hartmann, Christian: Massensterben oder Massenvernichtung? sowjetische Kriegsgefangene im "Unternehmen Barbarossa" Aus dem Tagebuch eines deutschen Lagerkommandanten. In: VfZG, 49 (2001), S. 97-158**
- Headland, Ronald: The Einsatzgruppen: The Question of their Initial Operations. In: Holocaust and Genocide Studies, 4 (1989), S. 401-412**
- Heer, Hannes: Einübung in den Holocaust: Lemberg Juni/Juli 1941. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 49 (2001), S. 409-427**

Heer, Hannes: Vom Verschwinden der Täter. Die Auseinandersetzungen um die Ausstellung "Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944" In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 50, (2002), S. 869-898

Herbert, Ulrich: Vergeltung, Zeitdruck, Sachzwang. Die deutsche Wehrmacht in Frankreich und in der Ukraine. In: Mittelweg 36, 6 (2002), S. 25-42

Herzstein, Robert Edwin : Anti-Jewish Propaganda in the Orel Region of Great Russia, 1942-1943: The German Army and Its Russian Collaborators. In : Simon Wiesenthal Center Annual, 6 (1989), S. 33-55

Hesse, Klaus: NKWD-Massaker, Wehrmachtsverbrechen oder Pogrommorde? Noch einmal: die Fotos der "Tarnopol-Stellwand" aus der "Wehrmachtsausstellung" In: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, 51, (2000), S. 712-726

Hesse, Klaus: Verbrechen der Wehrmacht- Dimensionen des "Vernichtungskrieges 1941-1944" Anmerkungen zur Neufassung der "Wehrmachtsausstellung" In: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, 53, (2002), S. 594-611

Heyde, Philipp: Bemerkungen zu einigen Neuerscheinungen über den Deutsch-Sowjetischen Krieg 1941-1943. Von Barbarossa nach Stalingrad. In: Neue Politische Literatur, 39 (1994), S. 14-33

Hillgruber, Andreas: Die "Endlösungen" und das deutsche Ostimperium als Kernstück des rassenideologischen Programms des Nationalsozialismus. In: VfZG, 20 (1972), S. 133-153

Hillgruber, Andreas: Die ideologisch-dogmatische Grundlage der nationalsozialistischen Politik der Ausrottung der Juden in den besetzten Gebieten der Sowjetunion und ihre Durchführung 1941-1944. In: German Studies Review, 2 (1979), S. 263-296

**Humburg, Martin: Feldpostbriefe aus dem Zweiten Weltkrieg - zur möglichen Bedeutung im aktuellen Meinungsstreit unter besonderer Berücksichtigung des Themas.
» Antisemitismus «. In: MGM, 58 (1999), S. 321-343**

Hürter, Johannes: Die Wehrmacht vor Leningrad: Krieg und Besatzungspolitik der 18. Armee im Herbst und Winter 1941/1942. In: VfZG, 49 (2001), S. 377-440

Kaiser, Wolf: Die Wannsee-Konferenz: Zur Bedeutung eines Protokolls. In: Tribune, 33 (1994), S. 110-124

Kansteiner, Wulf: From Exception to Exemplum: The New Approach to Nazism and the "Final Solution". In: History and Theory, 33-2 (1994) S. 145-171

Klink, Ernst: The Organization of the German Military High Command in World War II. In: Revue Internationale d'Histoire Militaire, 47 (1980), S. 129-157

Krannhals, Hans von: Die Judenvernichtung in Polen und die "Wehrmacht". In: WWR, 15 (1965), S. 570-581

Krausnick, Helmut: Kommissarbefehl und "Gerichtsbarkeitserlass Barbarossa" in neuer Sicht. In: VfZG, 25 (1977), S. 682-738

Kumanyev, G.A.: On the Soviet People's Partisan Movement in the Hitlerite Invaders' Rear, 1941-1944. In: Revue Internationale d'Histoire Militaire, 47 (1980), S. 180-188

- Kusnezowa, Olga/Selesnjow, Konstantin : Der politisch-moralische Zustand der faschistischen deutschen Truppen an der sowjetisch-deutschen Front in den Jahren 1941-1945. Überblick über sowjetische Quellen und Literatur. In: Zeitschrift für Militärgeschichte, 9 (1970), S. 598-608**
- Lieb Peter: Täter aus Überzeugung? Oberst Carl von Andrian und die Judenmorde der 707. Infanteriedivision 1941/ 42. In: VfZG, 50 (2002), S. 523-557**
- Lozowick, Yaacov: Erinnerung an die Shoah in Israel. In: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, 45-6 (1994), S. 368-390**
- Lozowick, Yaacov: Rollbahn Mord: The Early Activities of Einsatzgruppe C. In : Holocaust and Genocide Studies, 2 (1987), S. 221-241**
- Marrus, Michael R. Robert O. Paxton: The Nazis and the Jews in Occupied Western Europe, 1940-1944. In: Journal of Modern History, 54 (1982), S. 687-714**
- Mason, Henry L.: Imponderables of the Holocaust. In: World Politics, 34 (1981), S.90-113**
- Mayer, Klaus: Eine authentische Halder-Ansprache ? Textkritische Anmerkungen zu einem Dokumentenfund im früheren Moskauer Sonderarchiv. In: MGM, 58 (1999), S. 471-527**
- Messerschmidt, Manfred: Ideologe und Befehlsgehorsam im Vernichtungskrieg. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 49 (2001), S. 905-926**

Meyer zu Uptrup, Wolfram: Wann wurde Hitler zum Antisemiten? Einige Überlegungen zu einer strittigen Frage. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 43 (1995), S. 687-697

Mommsen, Hans: Die Realisierung des Utopischen: Die "Endlösung der Judenfrage" im "Dritten Reich". In: Geschichte und Gesellschaft, 9(1983), S. 381-420

Monteath, Peter: Buchenwald Revisited: Rewriting the History of a Concentration Camp. In: The International History Review, 16-2 (1994), S. 221-440

Moritz, Erhard/ Kern, Wolfgang: Aggression und Terror. Zur Zusammenarbeit der faschistischen deutschen Wehrmacht mit den Einsatzgruppen der Sicherheitspolizei und des SD bei der Aggression gegen Polen. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 22 (1974), S. 1314-1325

Mühleisen, Horst: Das letzte Duell. Die Auseinandersetzungen zwischen Heydrich und Canaris wegen der Revision der » Zehn Gebote « . In: MGM, 58(1999), S. 395-458

Müller, Norbert: Massenverbrechen von Wehrmachtorganen an der sowjetischen Zivilbevölkerung im Sommer/Herbst 1941. In: Zeitschrift für Militärgeschichte, 8(1969), S. 537-553

Müller, Rolf-Dieter: Kriegerrecht oder Willkür? Helmut James Graf v. Moltke und die Auffassungen im Generalstab des Heeres über die Aufgaben der Militärverwaltung vor Beginn des Rußlandkrieges. In: MGM, 42(1987), S. 125-151

Mulligan, Timothy P.: Reckoning the Cost of People's War: The German Experience in the Central USSR. In: Russian History, 9(1982), S. 27-48

Musial, Bogdan: Bilder einer Ausstellung. Kritische Anmerkungen zur Wanderausstellung "Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944" In: VfZG, 47 (1999), S. 563-591

Musial, Bogdan: Die Wanderausstellung "Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944" und der Bericht der Kommission zu ihrer Überprüfung. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 49, (2001), S. 712-731

Nicosia, Francis R.: The Yishuv and the Holocaust. In: The Journal of Modern History, 64 (1992), S. 533-540

Orbach, Wila: The Destruction of the Jews in the Nazi-Occupied Territories of the USSR. In: Soviet Jewish Affairs, 6 (1976), S. 14-51

Perz, Bertrand: Wehrmacht und KZ-Bewachung. In: Mittelweg, 36 (1995), S. 69-82

Pohl, Dieter: Rückblick auf das "Unternehmen Barbarossa" In: Jahrbücher für Geschichte Osteuropas, 42 (1994), S. 77-94

Rautenberg, Hans-Jürgen: Die Endlösung. Zur Rolle von Reichsbehörden, "SS " und Wehrmacht bei der Vernichtung der Juden. In: Informationen für die Truppe, 7 (1979), S. 81-110

Roberts, Cynthia A.: Planning for War: The Red Army and the Catastrophe of 1941. In: Europe-Asia Studies, 47-8 (1995), S. 1293-1326

- Römer, Felix: Das Heeresgruppenkommando Mitte und der Vernichtungskrieg im Sommer 1941. Eine Erwiderung auf Gerhard Ringshausen. In: VfZG, 53 (2005), S. 451-461**
- Rossino, Alexander B.: Nazi Anti-Jewish Policy During the Polish Campaign: The Case of the Einsatzgruppe von Woyrsch. In: German Studies Review, 24, 1, (2001), S. 35-53**
- Roth, Karl Heinz: » Generalplan Ost « und der Mord an den Juden. Der » Fernplan der Umsiedlung in den Ostprovinzen « aus dem Reichssicherheitshauptamt vom November 1939. In: 1999, 2 (1997), S. 50-70**
- Ruß, Hartmut: Wer war verantwortlich für das Massaker von BabijJar? In: MGM, 57 (1998), S. 483-508**
- Ruß, Hartmut: Wehrmacht kritik aus ehemaligen SS-Kreisen nach 1945. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 49, (2001), S. 428-445**
- Schüler, Klaus A. Friedrich: Logistik im Rußlandfeldzug. Uni. Köln Diss. Maschinenschrift, 1987**
- Schulze-Wegener, Guntram: Die Rote Armee im Urteil der deutschen Führung vor dem "Unternehmen Barbarossa" In: Historische Mitteilungen, 7 (1994), S. 102-119**
- Simpson, Keith: The German Experience of Rear Area Security on the Eastern Front 1941-45. In: Journal of the Royal United Services Institute for Defense Studies, 121 (1976), S.38-46**

Smith, F. Bradley: Die Überlieferung der Hoßbach-Niederschrift im Lichte neuer Quellen.

In: VfZG, 38 (1990), S. 329-336

Sommer, Dirk: Die Wehrmacht und der Holocaust. In: Truppenpraxis/ Wehrausbildung 6/

1995, S. 423-430

Der Spiegel 33/ 1996, "Was dachten die Mörder?"

Der Spiegel 11/ 1997, "Verbrechen der Wehrmacht"

Der Spiegel 35/ 1999, "Hitler und die Deutschen"

Der Spiegel 36/ 1999, "Der Holocaust"

Der Spiegel 43/ 1999, "Hitler -Die reale Macht des Bösen-"

**Der Spiegel Special Nr. 1/ 2001, "Die Gegenwart der Vergangenheit -Die Spiegel-Serie
Über den Langen Schatten des Dritten Reichs"**

**Der Spiegel 26/ 2001, "Der barbarische Krieg -Vor 60 Jahren: Hitlers Überfall auf die
Sowjetunion-"**

Der Spiegel 48/ 2001, "Abrechnung mit Hitlers Generälen"

Der Spiegel Special Nr. 1/ 2002, "Experiment Europa -Ein Kontinent macht Geschichte-"

Der Spiegel 4/ 2005, "Holocaust: Ort des Unfassbaren"

Der Spiegel 21/ 2009, "Die Komplizen. Hitlers europäische Helfer beim Judenmord"

Stang, Werner: Richtlinien für die Meinungsmanipulierung der deutschen Soldaten des Heeres 1939 bis 1943. In: Zeitschrift für Militärgeschichte, 41 (1993), S. 513-531

Stegemann, Bernd: Hitlers Ziele im Kriegsjahr 1939/ 1940. Ein Beitrag zur Quellenkritik. In: MGM, 27 (1980), S. 93-105

Streim, Alfred: The Tasks of the SS Einsatzgruppen. In: Simon Wiesenthal Center Annual, 4 (1987), S. 309-328

Streit, Christian: Ostkrieg, Antibolschewismus und "Eudlösung". In: Geschichte und Gesellschaft, 17 (1991), S. 242-255

Tenenbaum, Joseph: The Einsatzgruppen. In: Jewish Social Studies, XVII (1955), S.43-64

Umbreit, Hans: Die Kriegsverwaltung 1940 bis 1945. In: MGM, 2 (1968), S. 105-134

Uziel, Daniel: Wehrmacht propaganda troops and the Jews. In: Yad Vashem Studies, 29 (2001), S. 27-63

Volkman, Hans-Erich: » Vergessen prägt unser Dasein «. Rede zur Eröffnung der Ausstellung » Verbrechen der Wehrmacht. Dimension des Vernichtungskrieges 1941-1944 « In: Militärgeschichtliche Zeitschrift, 60 (2001), S. 501-515

Wallach, Jehuda: Feldmarschall Erich von Manstein und die deutsche Judenausrottung in Rußland. In: Jahrbuch des Instituts für deutsche Geschichte, IV (1975), S. 457-472

The Washington Post, October, 29th "U.S. Museum Gets KGB Files of Nazi Attacks Pages
'Soaked in Blood' Detail 1940s Slaughter."

Welzer, Harald: Kumulative Heroisierung: Nationalsozialismus und Krieg im Gespräch
zwischen den Generationen. In: Mittelweg 36, 2 (2001), S. 57-73

Westermann, Edward B.: "Friend and Helper": German Uniformed Police Operations in
Poland and the General Government, 1939-1941. In: Journal of Military History, 58
(October 1994), S. 643-661

Zeidler, Manfred: Der Minsker Kriegsverbrecherprozeß vom Januar 1946. Kritische
Anmerkungen zu einem sowjetischen Schauprozeß gegen deutsche Kriegsgefangene.
In: VfZG, 52/2 (2004), S. 211-244

Zipfel, Friedrich: Hitlers Konzept einer "Neuordnung" Europas. Ein Beitrag zum
politischen Denken des deutschen Diktators. In: Aus Theorie und Praxis der
Geschichtswissenschaft, (1972), S. 154-174

《邦文》

安藤 公一 「ナチス・ドイツの対ソ経済略奪構想—『トーマス覚書』を中心に—」
『政治経済史学』（第403号、2000年3月）

木戸 衛一 「ドイツにおける『国防軍論争』」『季刊 戦争責任研究』（第18号、
1997年 冬季号）

庄司 潤一郎 「ドイツにおける『戦争犯罪』をめぐる諸問題に関する一考察」
『戦史研究年報』（第6号、防衛研究所、平成15年3月）

綱川 政則 「対外政策におけるヒトラーの指導性について」 『国際政治』
(第72号、1982年10月)

中田 潤 「ドイツ国防軍と『ユダヤ人問題』 —独ソ戦に関する歴史認識をめぐ
って—」 『歴史評論』(第581号、1998年9月)

永岑 三千輝 「ホロコーストのダイナミズム—『絶滅命令』に関する資料批判と資
料発掘の意義—」 『ドイツ研究』(第26号、1998年)

永岑 三千輝「ドイツ歴史学と現実政治—第三帝国戦時期をめぐる最近の論争から—」
『歴史評論』(第591号、1999年7月)

永岑 三千輝「ヒトラー『絶滅命令』とホロコースト」『土地制度史学』
(第166号、2000年)

福田 茂夫「ナチ・ドイツの対ソ攻撃決定の時期と動機—独ソ開戦原因の一考察とし
て—」『法学論叢』(第63巻 5号、1957年)

吉田 輝夫 「1940—1941年におけるヒトラーの戦争指導」
『現代ヨーロッパ国際政治史』(第3号、1966年)

吉本 隆昭 「ナチ親衛隊〔SS〕—そのナチズム運動とドイツ第三帝国の権力構造
における位置と役割—」 『陸戦研究』(1982年 4、5月号)

吉本 隆昭 「独ソ戦の知られざる一側面—ドイツ陸軍とSS—特別行動隊—」
『欧米文化研究』(第11号、1995年)

吉本 隆昭 「ヒトラーの戦争観」『陸戦研究』(2000年 2月号)

吉本 隆昭「ドイツ陸軍とSS－特別行動隊－1941年東部戦線での政軍関係－」

『陸戦研究』（2002年 5月号）

吉本 隆昭「ドイツの戦略文化－ヒトラーの戦争観を中心に－」

『戦略研究年報 戦略文化』（2006年 12月）

吉本 隆昭「ドイツ第三帝国における政軍関係－1941年・東部戦線の場合－」

『国際関係研究』（第31巻 第2号、2011年 2月）